

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書第407集

しま おか
島岡Ⅱ遺跡発掘調査報告書

担い手育成基盤整備事業八幡東部地区関連発掘調査

盛岡地方振興局盛岡農村整備事務所

(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

しま おか
島岡Ⅱ遺跡発掘調査報告書

担い手育成基盤整備事業 八幡東部地区 第6号調査業務委託

序

本県には、旧石器時代の遺跡をはじめとする数多くの埋蔵文化財包蔵地が各地に分布しております。これらの先人たちの貴重な文化遺産を保存し、後世に伝えていくことは私たち県民に課せられた重大な責務であります。

一方、本調査の原因となりました担い手育成基盤整備八幡東部地区事業を例に挙げるまでもなく、現代社会を豊かにし快適な生活を送るための地域開発も県民の切な願いであります。埋蔵文化財の保護保存と地域開発という相容れない要素を持つ事業の調和のとれた施策は今日の課題となっております。

当岩手県文化振興事業団は、埋蔵文化財センター創設以来、埋蔵文化財保護の立場にたって、県教育委員会生涯学習文化課の指導と調整のもとに開発事業にやむを得ず消滅する遺跡について発掘調査を行い、その記録を残す措置をとってまいりました。

本書は、担い手育成基盤整備八幡東部地区事業に関連して行われた島岡Ⅱ遺跡発掘調査の結果について収録したものであります。調査の結果、平安時代と近世の集落跡であることが明らかになりました。両時代において住居跡と水路跡が確認され、当時の集落における利水のあり方などを考える上で貴重な資料を提供することができました。

この本書が広く活用され、斯学の研究に寄与するとともに埋蔵文化財に対する関心と理解をいっそう深めることに役立つことを切に希望いたします。

最後になりましたが、これまでの発掘調査および報告書作成にご協力とご支援を賜りました盛岡地方振興局盛岡農村整備事務所、石鳥谷町教育委員会をはじめとする関係各位に衷心より感謝申し上げます。

平成15年1月

財団法人岩手県文化振興事業団
理事長 合田 武

例 言

1. 本報告書は、岩手県稗貫郡石鳥谷町八幡第22地割140番地ほかに所在する島岡Ⅱ遺跡の発掘調査を収録したものである。
2. 本遺跡の調査は、担い手育成基盤整備事業八幡東部地区の施行に伴う緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会と盛岡地方振興局盛岡農村整備事務所との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが担当した。
3. 岩手県遺跡台帳に登録されている遺跡番号はL E 96-2343、遺跡略号S O-01、発掘調査面積は、2,800㎡である
4. 発掘調査期間は平成13年4月10日～6月15日、担当者は村木 敬・星 幸文である。
5. 室内整理期間は平成13年11月1日～平成14年1月31日、担当者は村木 敬である。
6. 本報告書の執筆・編集は村木 敬が行った。
7. 本遺跡の出土遺物等の分析・鑑定及び業務委託は各位・各機関に依頼した。

炭化材の年代分析	木工舎「ゆい」
樹種同定	パリノ・サーヴェイ株式会社
火山灰同定	パリノ・サーヴェイ株式会社
基準点測量	株式会社 協進測量設計
8. 野外調査では盛岡地方振興局盛岡農村整備事務所・石鳥谷町教育委員会にご協力をいただいた。
9. 調査結果は、これまでに現地説明会資料や調査略報に掲載してきたが、本書はこれらに優先するものである。
10. 土層の色調は、「新版標準土色帖」（農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色票監修 1993）
11. 本書で得られた一切の資料は財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが保管している。

目 次

第1章	調査に至る経過	1
第2章	位置と環境	2
	1. 位置と立地	2
	2. 遺跡周辺の地形と地質	2
	3. 調査区内の地形	6
	4. 基本層序	6
	5. 周辺の遺跡	7
第3章	調査と整理方法	10
	1. 野外調査の方法	10
	2. 室内整理の方法	11
第4章	検出遺構と出土遺物	14
	1. 調査概要	14
	2. 平安時代の遺構と遺物	14
	3. 近世の遺構と遺物	35
第5章	まとめ	50
	1. 平安時代	50
	2. 近世	52
	3. まとめ	53
第6章	分析鑑定	55
	1. 石鳥谷町島岡Ⅱ遺跡出土材の樹種	56
	2. 石鳥谷町島岡Ⅱ遺跡のテフラ分析	66
	3. 石鳥谷町島岡Ⅱ遺跡の自然科学分析	70

〔図 版〕

第1図	遺跡位置図	3	第17図	8号竪穴住居	25
第2図	調査区位置図	4	第18図	9号竪穴住居	26
第3図	地形分類図	5	第19図	9号竪穴住居出土遺物(1)	27
第4図	周辺遺跡分布図	8	第20図	9号竪穴住居出土遺物(2)	28
第5図	グリッド配置図	10	第21図	1号水路跡・出土遺物	29
第6図	凡例	12	第22図	1号溝跡・出土遺物	30
第7図	遺構配置図	13	第23図	1・2・3・4・6土坑・出土遺物	32
第8図	平安時代遺構配置図	15	第24図	7・8・9・10土坑	34
第9図	1号竪穴住居	16	第25図	近世遺構配置図	36
第10図	1号竪穴住居出土遺物	17	第26図	1・2号近世掘立柱建物	37
第11図	2号竪穴住居・出土遺物	19	第27図	3・4号近世掘立柱建物	39
第12図	4号竪穴住居	20	第28図	1・2号水路跡	41
第13図	4号竪穴住居出土遺物	21	第29図	1・2号土坑	42
第14図	5号竪穴住居・出土遺物	22	第30図	1・2号土坑出土遺物(1)	43
第15図	6号竪穴住居	23	第31図	1・2号土坑出土遺物(2)	44
第16図	6号竪穴住居出土遺物	24	第32図	遺構外出土遺物	45

〔写真図版〕

第1図	遺跡遠景・完掘状況	75	第11図	5・6・8・9号竪穴住居・1号水路	85
第2図	完掘状況	76	第12図	1号水路・1号溝	86
第3図	完掘状況	77	第13図	1～4号土坑	87
第4図	完掘状況	78	第14図	近世1・2号土坑	88
第5図	調査風景・1号竪穴住居	79	第15図	近世1・2号水路・柱穴	89
第6図	1号竪穴住居	80	第16図	出土遺物(1)	90
第7図	2号竪穴住居	81	第17図	出土遺物(2)	91
第8図	4号竪穴住居	82	第18図	出土遺物(3)	92
第9図	5・6号竪穴住居	83	第19図	出土遺物(4)	93
第10図	8・9号竪穴住居	84	第20図	出土遺物(5)	94

〔表〕

第1表	周辺遺跡一覧	9
第2表	柱穴計測表(1)	46
第3表	柱穴計測表(2)	47
第4表	遺物観察表(1)	48
第5表	遺物観察表(2)	49

第1章 調査に至る経過

島岡Ⅱ遺跡は、担い手育成基盤事業・八幡東部地区の事業区域内に位置しているため、当該事業の施工に伴い発掘調査を実施することとなったものである。

担い手育成基盤整備事業・八幡東部地区は、稗貫郡石鳥谷町八幡地内の水田地帯（123ha）を事業区域として平成9年度に着手しており、高生産農業の確立及び農村環境水準の向上を図るため、大区画水田や道水路網の整備を進めている。

当該事業区域の埋蔵文化財包蔵地については、平成9年度に岩手県教育委員会が分布調査を実施しており、その際に島岡Ⅱ遺跡が確認されている。

その後、担い手育成基盤整備事業・八幡東部地区の施工主体である盛岡農村整備事務所の依頼を受け、平成11年度及び平成12年度に岩手県教育委員会が試掘調査を実施しており、その結果を踏まえた両者の協議により（財）岩手県文化振興事業団に発掘調査を委託することとなったものである。

これを受け、岩手県教育委員会は、平成13年1月16日付け教文第1222号により（財）岩手県文化振興事業団へ平成13年度事業としての実施を通知した。

また、盛岡農村整備事務所と（財）岩手県文化振興事業団は、平成13年4月1日付けで委託契約を締結し、4月6日から発掘調査に着手した。

（盛岡地方振興局盛岡農村整備事務所）

第2章 位置と環境

1. 位置と立地

島岡Ⅱ遺跡は岩手県稗貫郡石鳥谷町八幡第22地割140番地ほかに所在し、JR東日本東北本線石鳥谷駅から南南東約2.5kmに位置している。遺跡が所在する石鳥谷町は、面積118.22km²、人口約16,000人の町で、内陸中央部にあり、北は紫波町、東は大迫町、東和町、西は雫石町、南は花巻市に接する。

石鳥谷町は、昭和3年の町制施行により成立しているが、正保国絵図などには好地村内の宿場に石鳥谷村が存在している。この地の歴史は古く奥州街道筋の宿場町や酒造業地として栄えており、現在でも「南部杜氏」の里として知られている。遺跡が所在する八幡に限定すると、永禄年中に新堀村長島八幡を勧請し、真木村から八幡村に改称したと言われ、文献には元和八年(1622)には本地名が確認されている。

遺跡は北上川右岸の沖積地、標高約84mの河岸段丘に立地している。この河岸段丘は南東方向に向かって緩やかに傾斜しており、その縁に遺跡は存在している。北上川との比高差は10m前後である。

本遺跡は、国土地理院発行の5万分の1地形図「花巻」(N J - 54 - 13 - 16)の図幅に含まれ、北緯39度27分47秒、東経141度08分59秒にある。

2. 遺跡周辺の地形と地質

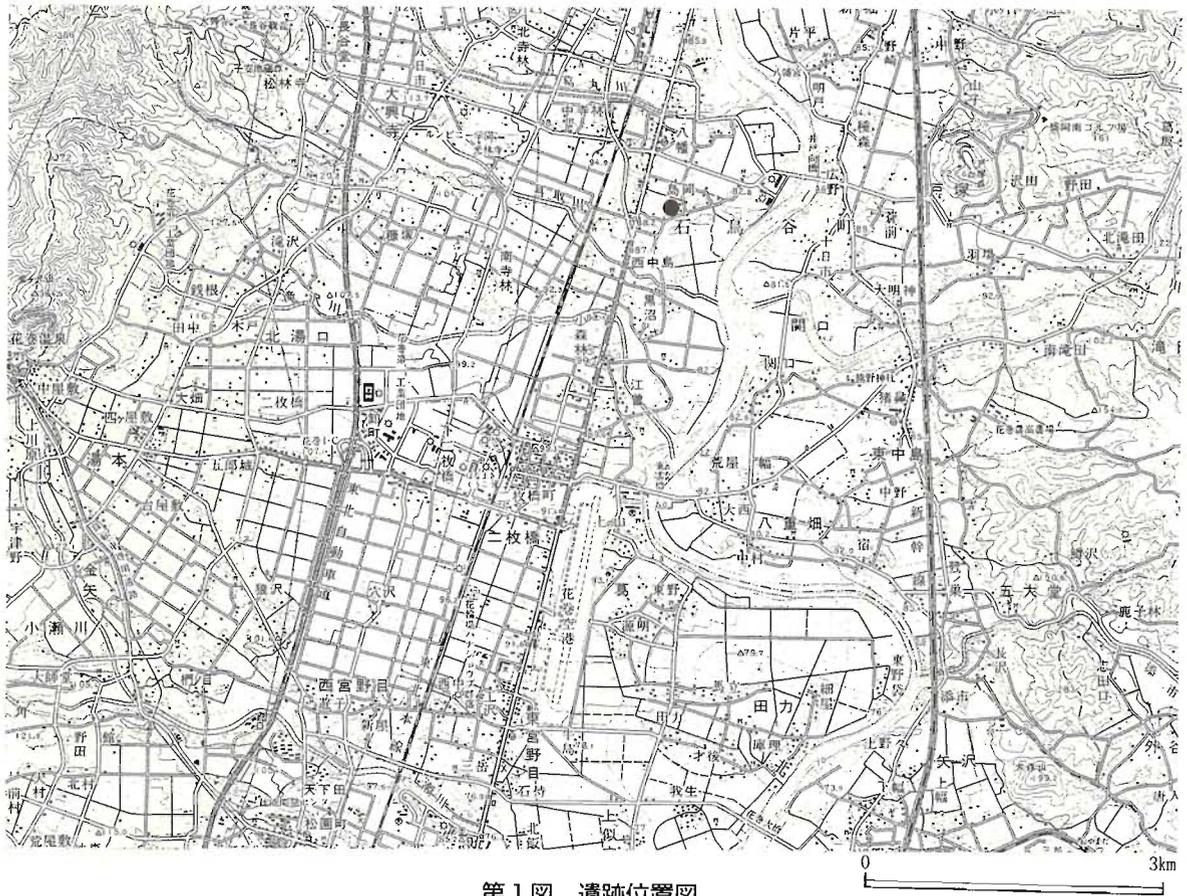
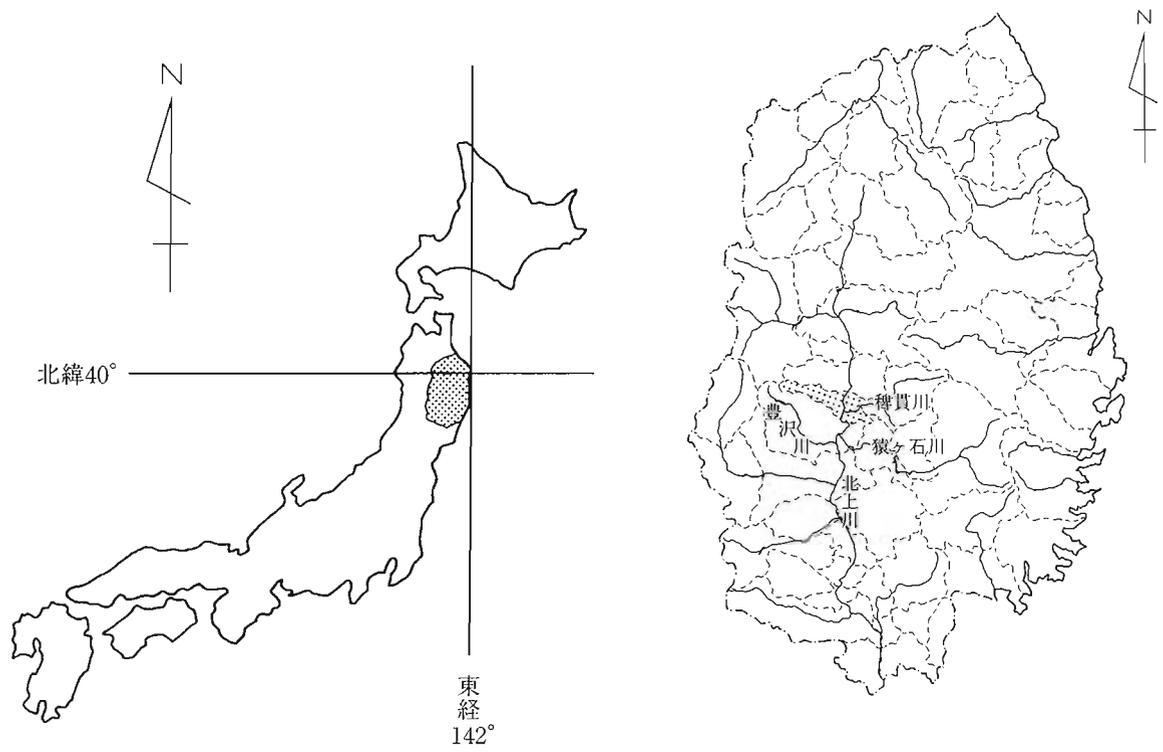
石鳥谷町の地勢を概観すると、稗貫郡西部、北上川の中流域に位置する。地形全体が東西に細長く、西側半分は奥羽脊梁山脈の峡谷に深く入り込んでいる。西に奥羽脊梁山脈の標高約600~800mの中起伏山地の台山・塚瀬森・高狸山・権現森・諸倉山、東に早地峰山の小・中起伏山地の廻館山・赤梅山・権現堂山が広がり、その合間を縫うように町の中央よりやや東寄りを北上川が南流している。そして、その北上川に奥羽脊梁山脈に源を発する葛丸川、耳取川、滝名川、北上山系早地峰山に源を発する稗貫川がそれぞれ注ぎ込む。それらの河川に沿って低地が広がっている。

町内の地形・地質・土壌について概観する。その地形は、町西部は奥羽脊梁山脈から峡谷を形成しながら高度を次第に減じ、北上川周辺で見られる北上川低地の間に花巻温泉丘陵・二枚橋段丘といった複数の段丘面が存在する。また、東部も西岸同様、北上山地より高度を減じ鷹山丘陵・滝田丘陵・長沢丘陵といった河岸段丘が形成されている。奥羽脊梁山脈と北上山地の両岸に形成された地形を北上川中心に見てみると、東岸は西岸よりその標高差は少ない。

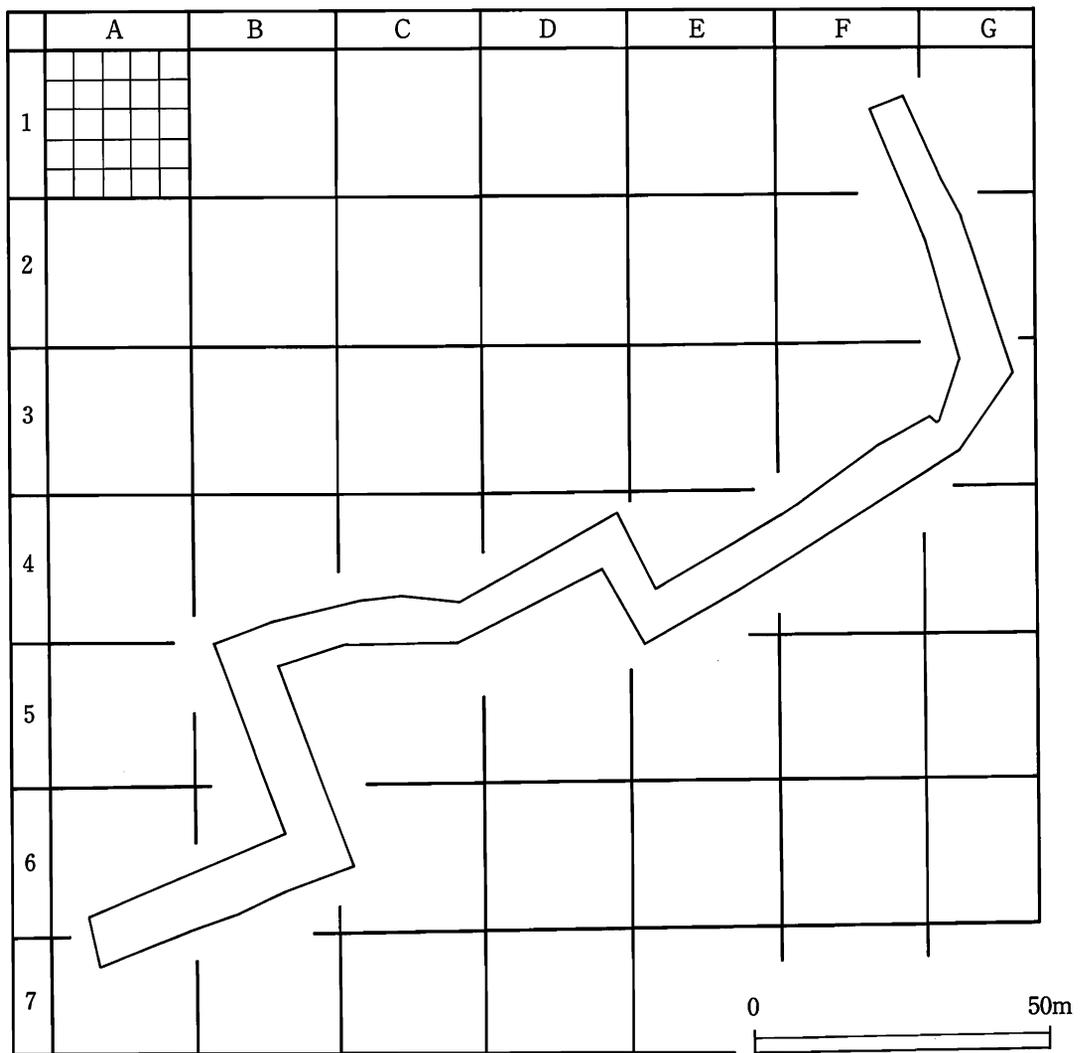
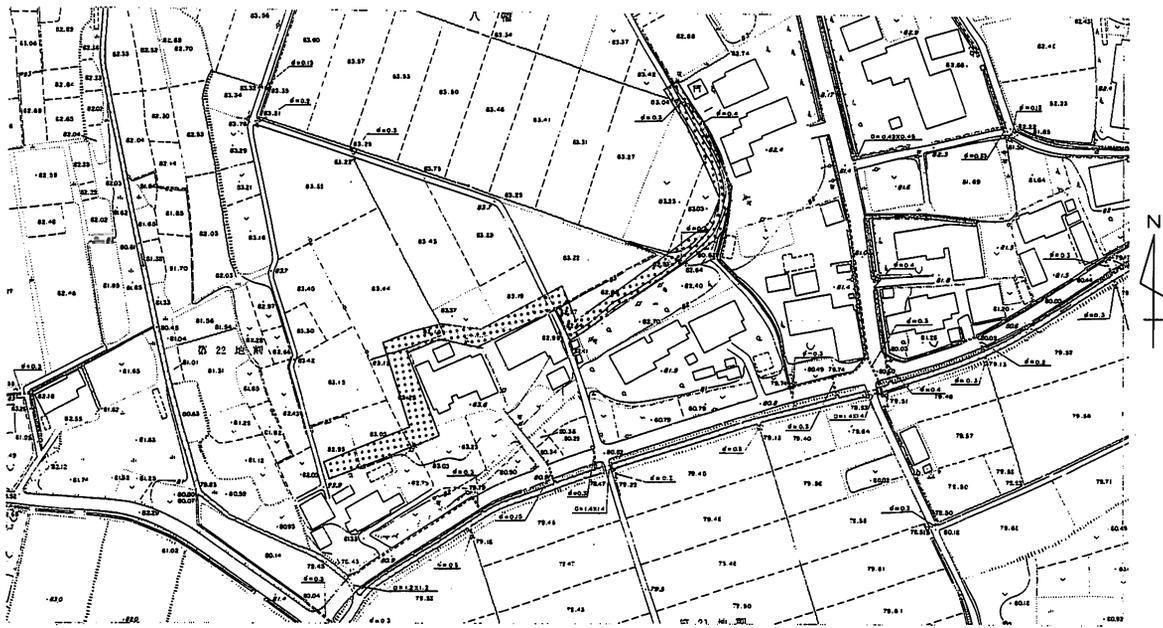
地質は、北上川の両岸には、沖積世・洪積世の砂礫層、第四紀のローム層が広がっている。標高が上がるにつれて両岸の表層地質は異なる。西岸は第三世紀の火山性岩石である流紋岩質岩石や集塊岩、また東岸は沖積世の砂礫、第四紀の火山性岩石に分類されるロームや安山岩質岩石、中生代の深成岩に分類される花崗岩質岩石、蛇紋岩質岩石などで形成されている。

土壌は、北上川の西岸は細粒灰色低地土壌真城統・細粒グライ土壌・褐色森林土壌で形成され、東岸では細粒灰色低地土壌・細粒グライ土壌・黒ボク土壌で形成されている。

本遺跡内の表層地形・地質・土壌について見ていく。表層地形区分では、旧河道に挟まれ谷底氾濫平野に区分された北上川低地、地質は沖積世の砂礫層、土壌は細粒灰色低地土壌として扱われている。



第1図 遺跡位置図



第2図 調査区位置図



0 1km

- | | | | | | | | | | |
|---|--------------|---|-------|---|--------|---|--------|---|----------------|
|  | 山麓地
及び緩斜面 |  | 丘陵地 I |  | 丘陵地 II |  | 砂礫段丘 I |  | 砂礫段丘 II |
|  | 砂礫段丘 III |  | 沖積段丘 |  | 扇状地 |  | 崖錐性扇状地 |  | 谷底平野
及び氾濫平野 |
|  | 自然堤防 |  | 旧河道 |  | 河原 |  | 人工改变地 |  | 崖 |

第3図 地形分類図

3. 調査区内の地形

本遺跡は、前述したように北上川西岸に形成された谷底氾濫平野の北上川低地に分類され、その低位河岸段丘の縁に立地している。調査区内でもやや異なる地形を見せているためここで記述しておく。本来ならば、微地形を把握するために、遺構検出面でのコンタ作成を行うべきだが、検出時の地形測量を調査区が狭く遺構のレベリング等から復元可能と判断したため行っていない。

検出面は後世の水田耕作により著しく削平を受けており、当時の地形をそのまま残しているわけではないが、地形と遺構の関係が捉えられることからここで示しておく。おおまかに述べると調査区3 D25グリッドから4 D14グリッドにかけて近世まで旧河道が存在し、現地形では一つに見えた地形が2つの舌状地の段丘に分けられている。

調査区北端から3 G16グリッドまでは比較的平坦な地形を呈している。ただしその東側は段丘崖が存在している。調査区と下の段丘面との比高差のあるところで1.5m前後ある。その3 G16グリッドの平坦面から調査区は南西に延び、緩やかに傾斜していく。その傾斜は5 D15グリッドまであり、そこからは平坦面が存在し、それは5 E1グリッドまで至る。調査区はそこから北に方向を変え、その北に向って登る緩斜面が続く。4 D10グリッドで調査区は南西に向き、ここに先述した旧河道が存在している。4 D10グリッド付近の遺構検出面と旧河道の底面は約2m前後ある。旧河道の西側3 D25グリッドから西は、また平坦面が続く。5 B2グリッドで調査区は南側を向くが、その標高に変化は見られない。5 B15グリッド付近で緩やかに南に傾斜していく。そして調査区から約15~20mで段丘崖に至る。この下位の段丘は調査区東側で述べたものと同じである。さらに、調査区は5 B10グリッド付近で西側に延び、調査区西端まで緩やかに下っている。その比高はほぼ10~20cmである。その西端は下位段丘へと標高を下げていく。

4. 基本層序

本遺跡の基本層序は調査区が長いことから、土層確認及び遺構検出用のトレンチを調査区に複数カ所設定しながら掘り下げた。しかし、遺構検出面であるⅡ層以下から若干異なりを見せるだけで、遺構検出及び遺物出土層位に関わらないことから、今回の記載は調査区西側の6 A24グリッド付近の1カ所とした。

Ⅰ層 黒色土(10Y R2/1) 場所によって現耕作土と旧耕作土に区分できるが、ここでは1層として扱う。層厚は場所によって異なるが約20~60cmある。本層直下には酸化鉄を多量に含む。

Ⅱ層 にぶい黄褐色シルト層(10Y R6/3) 粘性、しまり共に強い。本層は遺構検出面である。層厚は約30~40cm。

Ⅲ層 にぶい黄褐色砂質シルト層(10Y R6/3) 粘性強く、しまりやや強い。層厚は約30cm。

Ⅳ層 褐灰砂層(5 Y R6/1) 粘性、しまり共に弱い。層厚は約10cm。5 B15グリッドより東側の調査区では本層は礫層(亜円礫~円礫)となる。

Ⅴ層 褐灰粘土層(5 Y R6/1) 粘性、しまり共に強い。層厚は約20cm。

Ⅵ層 褐灰砂層(5 Y R6/1) 粘性、しまり共に弱い。本層のⅣ層厚は不明である。第3図地形図に見られる旧河道部分に相当する。層厚不明だが、確認した範囲では50cmある。

基本的には本層で細粒灰色砂層や礫層基盤であることなどが確認でき、それらは先述した地質や土壌と合致する。

5. 周辺の遺跡

石鳥谷町内には、平成13年度現在187カ所の遺跡が登録されている。旧石器時代から近世に属する数多くの遺跡が存在しているが、発掘調査自体は少ない。昭和49年に行われた東北縦貫自動車道や東北新幹線に伴う調査が数例あり、縄文時代や平安時代の遺構や遺物などの成果から、少なからず各時代において人々の生活の営みが明らかにされている。それ以降は調査例は減少する。

本調査によって平安時代と近世に属する遺構や遺物が得られたことから、ここでは平安時代・近世に限定し概観していく。

[平安時代]

当該期の遺跡は、東北縦貫自動車道や東北新幹線事業に伴う発掘調査が行われた大曲遺跡・大地渡遺跡・大瀬川A遺跡・上台遺跡をはじめ数多くの遺跡が存在している。それらの調査成果からは平安時代の竪穴住居等が確認され、小規模ではあるものの集落の存在が認められ、少しずつではあるがその様相を明らかにしつつある。なかでも鍛冶遺構が検出された大瀬川A遺跡の存在は、町内において稀である。

それらの遺跡の多くは北上川・葛丸川・稗貫川によって形成された北上川低地や西岸の二枚橋段丘、東岸長沢・滝田段丘に分類される段丘に多く立地している。

[近世]

当該期の遺跡は、城館跡と渡し場・一里塚などが確認されているものの、その数は少ない。そのなかでも、奥州街道沿いに昭和44年に県指定史跡に指定されている江曾一里塚、北上川沿いには渡し船場跡が特筆すべき存在として挙げられる。このことは、奥州街道と北上川両方の交通手段が活発に行われていたことを示している。また、南部杜氏の活動を示すものが近世文書などが確認されているが、遺跡としてその存在は認められていない。

これらの遺跡は、基本的に北上川の両側及びその低位段丘と県道の両脇に形成されている。

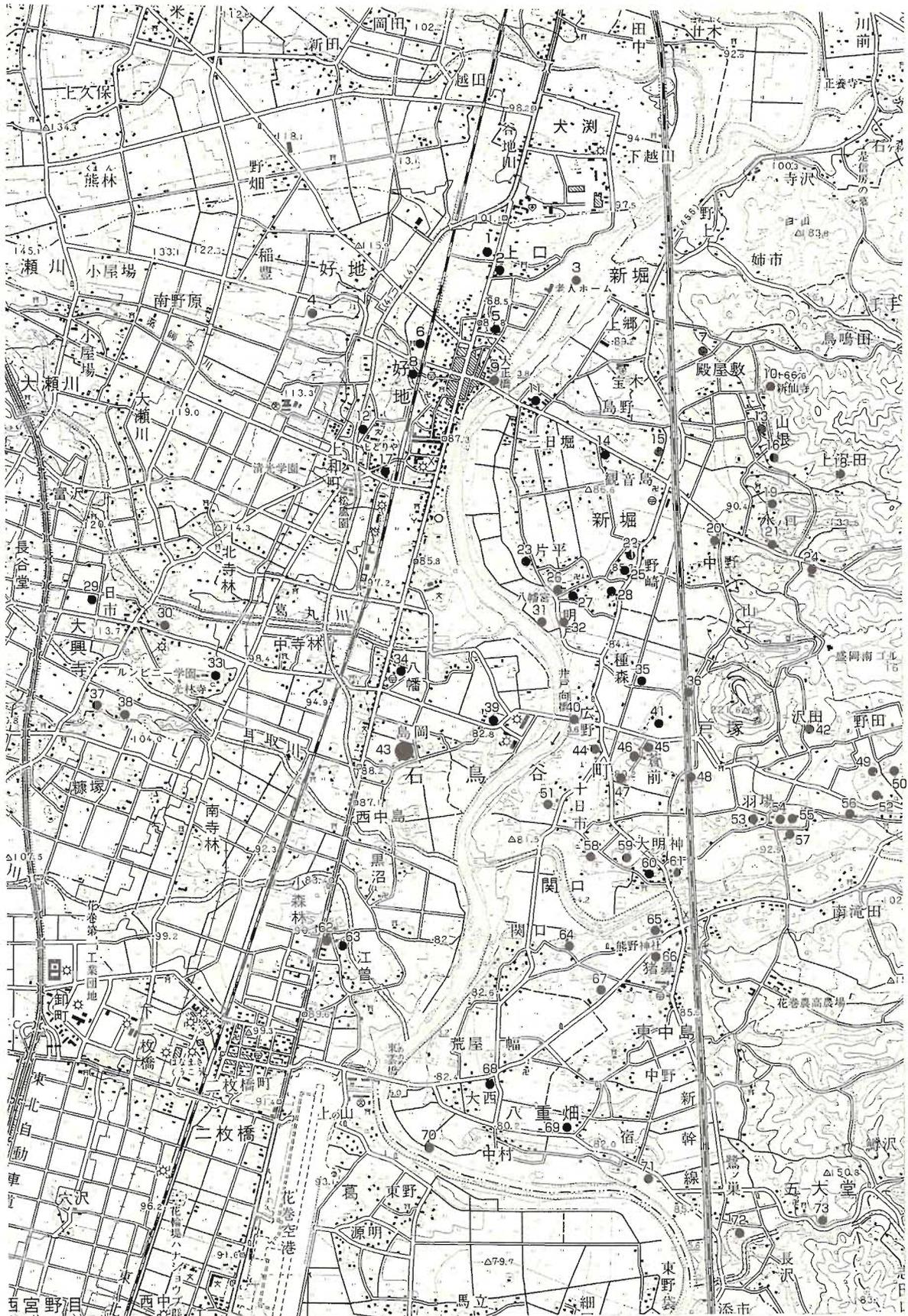
参考文献

岩手県 1974 『北上山系開発地域 土地分類基本調査』

岩手県教育委員会 2001 『平成13年度遺跡包蔵地一覧』

岩手県埋蔵文化財センター 1984 『小森林館跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第73集

石鳥谷町教育委員会 1995 『白幡林遺跡発掘調査報告書』



第4図 周辺遺跡分布図

	遺跡名	種別	時期	所在地	備考
1	数馬尾根	散布地	縄文・古代	字好地	
2	館野	散布地・城館跡	縄文・古代	字好地	
3	境船場	渡し場跡	近世	字好地第13地割	
4	石沢	散布地	縄文・古代	字好地	
5	堀子田	城館跡	近世	字好地上好地	
6	熊野堂	散布地	縄文・古代	字好地	
7	宝木Ⅱ	散布地	縄文・古代	字新堀第5地割	
8	馬頭	散布地	縄文・古代	字好地	
9	石鳥谷船場	渡し場跡	近世	字好地	
10	長善寺Ⅰ	散布地	縄文・古代	字新堀第65地割	
11			縄文・平安	三日堀	
12	好地田一里塚	一里塚	近世	字好地	
13	長善寺Ⅱ	散布地	縄文・古代	字新堀第65地割	
14	沼の次	散布地	平安	字新堀	
15	島	集落跡	平安	字新堀	
16	上沢田Ⅰ	散布地	縄文・古代	字新堀第64地割	
17	上和町	散布地	縄文・古代	字好地	
18	上沢田Ⅱ	散布地	縄文・古代	字新堀第64地割	
19	塚原	集落跡	縄文・古代	字新堀	
20	保沢川	散布地	平安	字新堀	
21	内御堂	散布地	縄文・平安	字新堀	
22	久保Ⅰ	散布地	平安	字新堀	
23	明戸Ⅰ	散布地	縄文・古代	字新堀	
24	字洞	散布地	縄文・古代	字新堀	
25	久保Ⅱ	散布地	平安	字新堀	
26	明戸Ⅱ	散布地	縄文・古代	字新堀	
27	明戸Ⅲ	散布地	平安	字新堀	
28	久保Ⅲ	散布地	平安	字新堀	
29	堀の内	城館跡	近世	字大興寺松田	
30	八日市	散布地	縄文・古代	字北寺林	
31	赤川渡し場	渡し場跡	近世	字新堀	
32	明戸Ⅳ	散布地	平安	字新堀	
33	光林寺	散布地・城館跡	縄文・古代・中世	字中寺林館前	
34	番屋	散布地	古代	字八幡	
35	種森	散布地	平安	字新堀	
36	宝木Ⅱ				
37	大興寺Ⅰ	散布地	古代	大興寺第14地割	
38	大興寺Ⅱ	散布地	古代	大興寺第14地割	
39	島岡Ⅰ	散布地	縄文・古代	字八幡	
40	井戸向船場	渡し場跡	近世	字新堀	
41	幅欠	散布地	縄文・平安	字戸塚	
42	志登計	散布地	縄文・平安	字戸塚	
43	島岡Ⅱ	散布地	古代	字八幡	
44	百目木	散布地	縄文・平安	字新堀	
45	野沢川Ⅰ	散布地	縄文・平安	字新堀	
46	野沢川Ⅱ	散布地	縄文・平安	字戸塚	
47	上野々	散布地	縄文・平安	字新堀	
48	大曲	散布地	平安	字戸塚	
49	戸塚蟹沢	散布地	縄文・古代	字戸塚	
50	硯石	散布地	縄文・古代	字戸塚	
51	上十日市	散布地	平安	字関口	
52	滝田笹原	散布地	縄文・平安	字滝田	
53	浦沢	散布地	縄文・平安	字戸塚	
54	戸塚笹原	散布地	縄文・平安	字戸塚	
55	蟹沢Ⅰ	散布地	縄文・平安	字戸塚	
56	滝田硯石	散布地	平安	字滝田	
57	端館	散布地・城館跡	平安・中世	字滝田	
58	塚の森Ⅰ	散布地	縄文・平安	字関口	
59	塚の森Ⅱ	散布地	平安	字関口	
60	七ツ森	散布地	縄文・古代	字関口	
61	貝の淵Ⅰ	散布地	縄文・古代	字関口	
62	江曾一里塚	一里塚	近世	字江曾	県指定史跡
63	古館	城館跡	中世	字江曾塚根	
64	下館Ⅱ	散布地	古代	字関口	
65	猪鼻	散布地	縄文・古代	字関口	
66	猪鼻Ⅱ	散布地	古代	字八重畑	
67	関口	散布地	古代	字関口	
68	荒野	散布地	古代	字八重畑	
69	稻荷	集落地	縄文・古代	字八重畑	平成13年度調査
70	葛船場	渡し場跡	近世	字八重畑	
71	宿	集落跡	縄文・古代	字八重畑	
72	安堵屋敷	散布地	縄文・古代	字五大堂	
73	沢流	散布地	縄文・古代	字五大堂	

第1表 周辺遺跡一覧

第3章 調査と整理方法

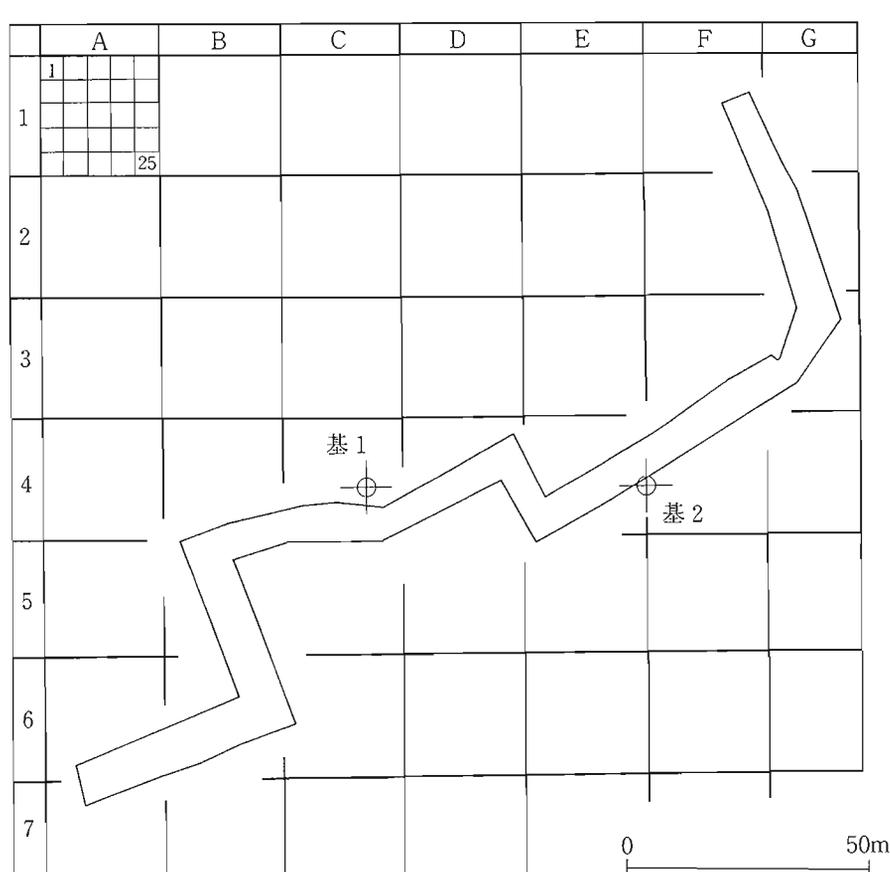
1. 野外調査の方法

(1) グリッドの設定

グリッドの設定にあたり、平面直角座標軸（第X系）に従って基準点2カ所、補点4カ所設置した。この基準点を結んだ線に補点を結んだ線をそれに直行するようにグリッド設定を行い、遺跡全体を網羅するようにした。

	X	Y	H	グリッド
基準点 1	-59530.000	27240.000	83.710	4 C19
基準点 2	-59530.000	27300.000	82.906	4 F16
補点 1	-59585.000	27210.000	82.509	-
補点 2	-59535.000	27210.000	83.728	-
補点 3	-59510.000	27330.000	82.537	-
補点 4	-59465.000	27330.000	82.536	-

大グリッドは1辺が25m、小グリッドは大グリッドの各辺を5等分して1辺が5mとしている。大グリッドは西から東に向かってA～G、北から南に向かって1～7とした。また、小グリッドは北西隅を1、南東隅を25となるようにした。各グリッドの名称は、南東隅の杭の名称によるものである。



第5図 グリッド配置図

(1) 遺構名称

遺構番号には、調査過程や調査後の検討で遺構に成り得ないと判断したものもあり欠番が生じている。竪穴住居では3号・7号竪穴住居、土坑は5号土坑をその対象としている。調査時より平安時代と近世に分けられるが、文章中や遺構配置図では時期を区分し掲載しているため、同一番号を付してあることとなる。ただしこれらは柱穴には当てはまらない。

(2) 粗掘り・遺構検出・精査

任意にトレンチを数カ所に設定し、土層の堆積状況や遺物の包含状況、遺構検出面の確認を行った後、重機を用いて遺構検出面まで掘り下げを行った。

遺構確認は、表土と遺構検出面の層界を、ジョレン・両刃鎌でプラン確認をした。遺構精査では、サブトレンチを積極的に活用し、正確な遺構把握に務めた。

検出された遺構は、2分法・4分法を適宜使い分けて精査を行い、必要な記録は図面等に記録した。

遺物の取り上げは、遺構内の出土遺物については埋土から分けて取り上げており、床面及び床面直上の遺物は必要に応じて実測・写真撮影を行っている。

(3) 実測・写真撮影

遺構の平面実測は、簡易遣り方と平板測量で作成している。縮尺は原則として1/10・1/20とし、調査区範囲のみ1/40の縮尺を用いた。

写真撮影は、35mm判カメラ2台（モノクロ・リバーサル）と6×7判カメラ1台を使用した。撮影は遺構・遺物の検出状況や出土状況に応じて行っている。

(4) 広報活動

埋蔵文化財に対する啓蒙活動の一環として、調査成果を公開する現地説明会を平成13年6月9日に開催している。

2. 室内整理の方法

(1) 作業手順

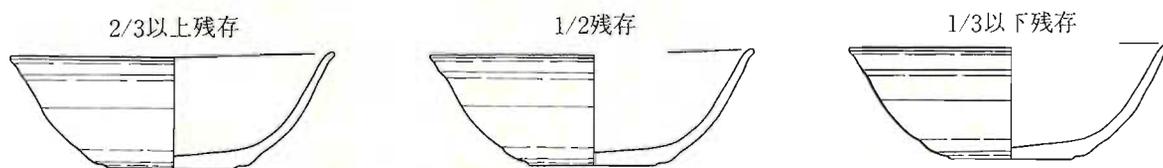
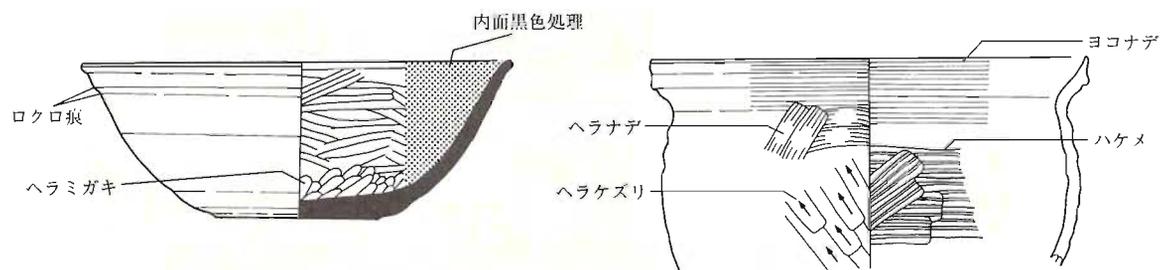
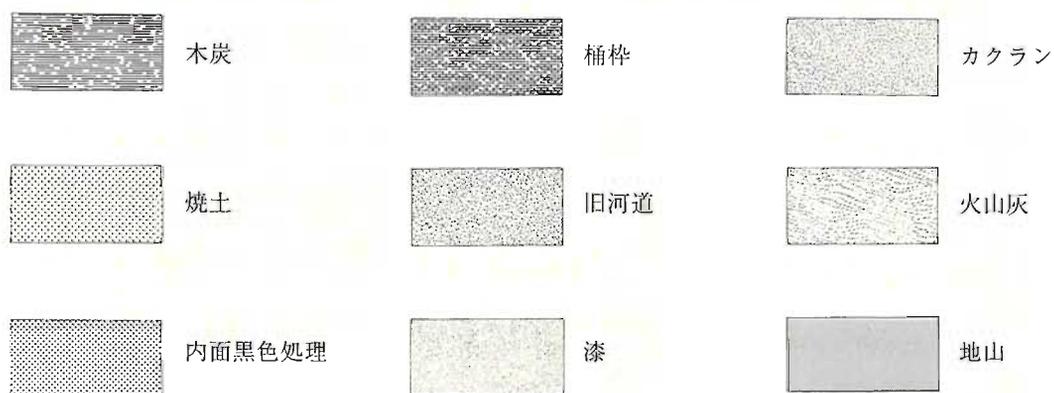
出土遺物は水洗、注記、遺物の接合復元をし、本報告書掲載遺物の登録を行った。これらの作業終了後、実測、拓本、遺物の写真撮影、遺構・遺物のトレースを順に行い、種別ごとに図版と観察表を作成した。また、この作業と平行して原稿執筆、各種分析鑑定を行い報告書に掲載している。

(2) 遺構

遺構図版はスケール・縮尺率を付しており、一部例外があるものの以下の縮尺を原則としている。竪穴住居1/60、カマド1/30、掘立柱建物1/100、水路・溝1/60、1/80、土坑1/40である。方位は国家座標第X系による座標北を示している。また、方位がないものはグリッドで方角を示している。

(3) 遺物

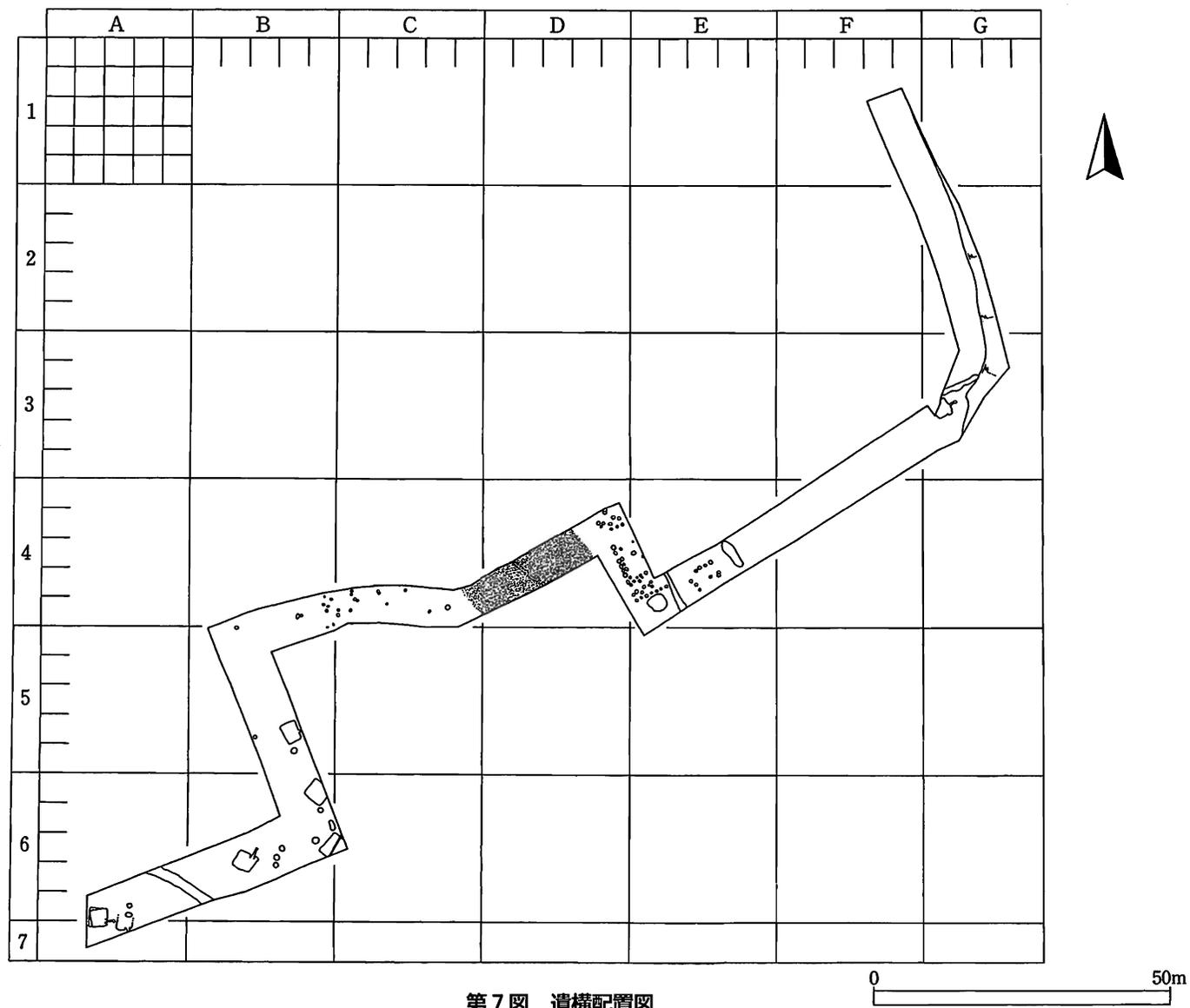
遺物は洗浄後全遺物を点検し、土器実測は原則として反転実測が可能なものに限定した。土器の現存率は口縁部上端で表現している。掲載遺物の縮尺率は、基本的には土器の実測図と写真は1/3とし、大きさに合わせて適宜縮尺率を変え各図版ごとに縮尺を示している。



第6図 凡例

(4) 凡例

本書に掲載したスクリーントーンや実測中で使用している凡例は、第6図に示した通りである。また、観察表中で使用している法量の推定値は()・計測値はcmで表示している。住居の床面積は、プランメーターで3回計測し、その平均値を示している。



第7図 遺構配置図

第4章 検出遺構と出土遺物

1. 調査概要

今回の調査から平安時代と近世に属する遺構や遺物が検出された。平安時代の成果はその東西に形成されていた段丘先端部の調査区東側の3Gグリッド付近と西側の6A、5・6Bグリッド付近にある。近世は、周辺部より若干標高が低く緩やかに南へ下る斜面上に形成されている調査区中央部旧河道の東側の4D・Eグリッド付近にある。

平安時代に属する遺構は、西側で竪穴住居6棟、水路1条、土坑4基と東側で竪穴住居1棟と溝1条検出されている。遺物は土師器や須恵器の坏と甕がそれらに伴い出土している。

近世に属する遺構は、掘立柱建物4棟、水路2基、土坑2基、柱穴状ピット57基検出され、遺物は近世陶磁器や木製品などで点数は少ないが確認されている。

時期不明とした土坑は5B10～15付近で、柱穴状ピットは5B2～4D24グリッド付近で検出されているが、遺物は確認されていない。

2. 平安時代の遺構と遺物

[1号竪穴住居]

〈位置〉6A22・23グリッド、7A2・3グリッドに位置する。

〈検出面〉Ⅱ層。

〈検出状況〉遺構検出用のトレンチを掘り下げ中に遺物が多く出土し、方形プランを確認できたことから住居と判断し、精査を行う。調査段階で重複していると判断したため、別番号を付した。しかし精査中に住居のカマドが設置されている東壁と南壁以外において、主軸方位がずれていることなどが確認できたことから、拡幅を主体として建て替えられたものと判断し、続けて精査を行った。ここでは新しい竪穴住居を1a、古い竪穴住居を1bとして扱う。

〈規模〉1a住居の規模は2.82m×3.10mである。1b住居の規模は3.04m×3.26mである。

〈平面形〉平面形はどちらも方形を呈する。

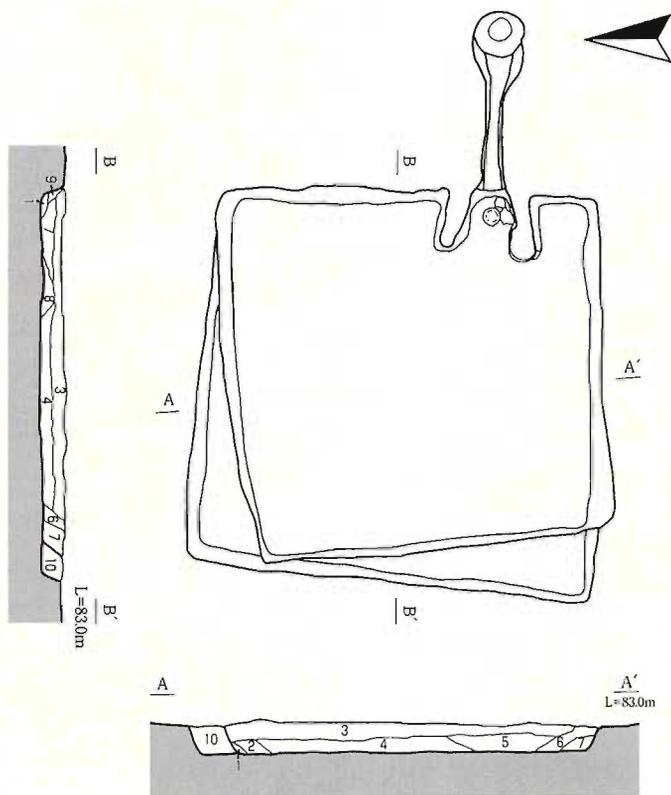
〈埋土〉1a住居の埋土は黒～暗褐色シルト層主体で9層に分けられる。また、1b住居の埋土は壁面近くで分層されない。埋土を比較すると1b住居の方が暗味が強い。

〈壁の状況〉住居の上半部が削平されており、全体の状況は不明であるが、残存する壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。各壁高は平均20cm前後である。旧住居の壁も同様の状態である。

〈床の状況〉両者共にほぼ平坦でⅡ層を掘り込むように形成されており、新旧の床面で標高差は確認できなかった。貼り床は両住居共に確認されていない。

〈カマド〉カマドは東壁の中央より南寄りに設置している。天井部は削平され、袖と燃焼部を残すのみである。袖の部分は地山である砂質シルト層を基盤とし作り出され、右袖の先端部に土師器・甕の体部を構築材として使用している。燃焼部は皿状に窪み、底面は強く焼けている。燃焼部の中央には土師器・甕の底部を伏せたものが支脚として用いられていた。

煙道部は燃焼部から1.47mあり、楕円形を呈する煙り出し部(0.56m×0.42m)へは緩やかに下っていく。

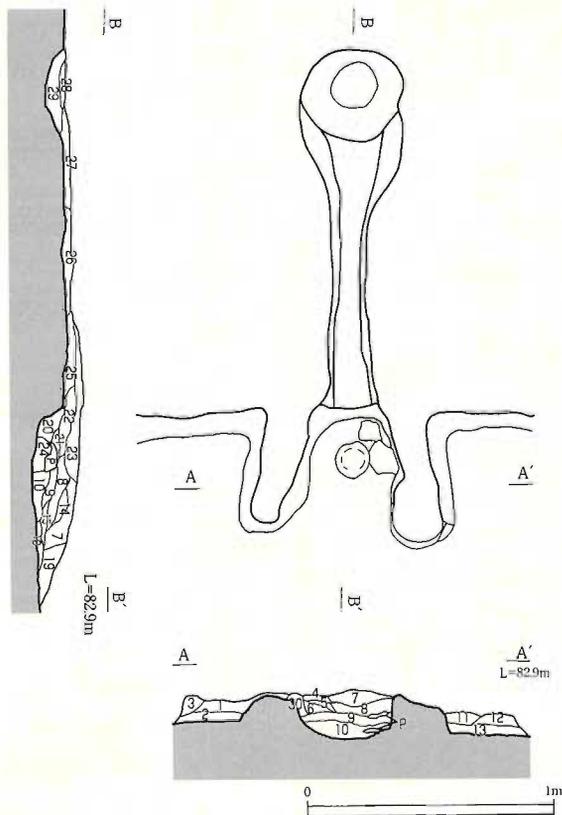


1号竖穴住居

1. 黒褐色粘土質シルト層 (10YR2/2) 粘性やや強く、しまり強い。白色粒子をブロック状に微量混入。
2. 黒褐色粘土質シルト層 (10YR2/3) 7層と類似。
3. 褐色粘土層 (10YR4/6) 粘性、しまり共に強い。
4. 黒褐色粘土質シルト層 (10YR3/2) 粘性、しまり共に強い。直径5~10mmの炭化粒を微量含む。
5. 暗褐色粘土層 (10YR3/3) 粘性やや強く、しまり強い。白色粒子がブロック状に少量混入。直径5mm前後の炭化粒を微量含む。
6. 暗褐色粘土層 (10YR3/4) 粘性やや強く、しまり強い。地山ブロックを多く混入。
7. 黒褐色粘土質シルト層 (10YR2/3) 粘性、しまり共に強い。地山崩落土を少量含む。
8. 暗褐色粘土層 (10YR3/3) 粘性、しまり共に強い。地山崩落土を少量含む。
9. 暗褐色粘土質シルト層 (10YR3/4) 7層に類似するが粘性増す。
10. 7層と類似しているが若干黒味を増す。

カマド注記

1. 暗褐色シルト層 (10YR3/3) 粘性弱く、しまりやや強い。直径1~3mmの炭化粒を微量含む。
2. 暗褐色シルト層 (10YR3/3) 1層に近いが、暗み帯び粘性増す。
3. 住居の3層と同一。
4. 黄褐色シルト層 (5YR5/8) 粘性弱く、しまりやや弱い。直径10mmの焼土と炭化粒が少量含む。
5. 黄褐色シルト層 (5YR5/8) 粘性弱く、しまりやや弱い。直径10mmの焼土と炭化粒が少量含む。
6. 黄褐色シルト層 (5YR5/8) 粘性弱く、しまりやや弱い。直径10mmの焼土と炭化粒が少量含む。
7. 褐色砂質シルト層 (7.5YR4/4) 直径1~3mmの焼土を少量含む。
8. 明褐色シルト層 (5YR5/8) 粘性やや弱く、しまり並。直径3~5mmの炭化粒を微量含む。
9. 褐色シルト層 (7.5YR4/3) 粘性やや強く、しまり強い。直径5~10mmの焼土をやや多く含む。
10. 褐色~にぶい黄褐色シルト層 (7.5YR4/3~5YR4/3) 粘性やや強く、しまり並。直径3~5mmの炭化粒を少量、直径5~10mmの焼土をやや多く含む。
11. 暗褐色シルト層 (10YR3/3) 粘性弱く、しまりやや強い。直径1~3mmの炭化粒を微量含む。
12. 暗褐色シルト層 (10YR3/4) 粘性やや弱く、しまり並。
13. 暗褐色シルト層 (10YR3/4) 上層と類似。砂質が増す。
14. 明褐色シルト層 (5YR5/8) 焼土。粘性弱く、しまり並。
15. 黒色シルト層 (10YR1/1) 炭化材。
16. 暗褐色シルト層 (10YR3/4) 粘性強く、しまりやや強い。直径1~5mmの炭化粒と焼土を微量含む。
17. 暗褐色シルト層 (10YR3/3) 1層と類似。直径5~10mmの炭化粒と焼土を微量含む。
18. 暗褐色シルト層 (10YR3/4) 粘性強く、しまりやや強い。直径5~20mmの炭化粒と焼土を微量含む。
19. 黒褐色シルト層 (10YR2/2) 粘性強く、しまりやや強い。直径1~3mmの焼土を微量含む。
20. 暗褐色シルト層 (10YR3/3) 粘性、しまり共にやや強い。直径1~3mmの焼土を微量含む。
21. 黒褐色シルト層 (10YR2/3) 粘性強く、しまりやや強い。
22. 黄褐色粘土質シルト層 (10YR5/8) 粘性強く、しまりやや強い。
23. 22層と類似。直径5mmの炭化粒を微量含む。
24. 暗褐色シルト層 (10YR3/4) 粘性、しまり共にやや強い。
25. 黒褐色シルト層 (10YR2/3) 粘性強く、しまり並。
26. 暗褐色シルト層 (10YR3/4) 粘性強く、しまりやや強い。直径3~10mmの炭化粒を微量含む。
27. 暗褐色シルト層 (10YR3/4) 28層と同じ。
28. 明黄褐色シルト層 (5YR4/8) 粘性やや弱く、しまり弱い。焼土。



第9図 1号竖穴住居



第10図 1号竪穴住居出土遺物

上部構造は削平されているため不明である。

〈土坑・柱穴〉床面検出後に精査を行ったが、柱穴等は確認できなかった。

〈出土遺物〉土師器と須恵器がカマド周辺と床面直上から出土している。1・2は内面に黒色処理とミガキが施され、体部が膨らみながら立ち上がる土師器・坏である。1の底部は回転糸切り後に再調整、2の底部は不明である。3は須恵器・坏である。4・5は土師器・甕で、5の体部は右袖の構築材、底部は支脚として使用されていた。6～8は須恵器・甕である。

〈遺構時期〉9世紀後半の所属である。

〈備考〉北壁と西壁で新・旧住居の壁立ち上がりを確認し、そのことから主軸方向に若干の変化が見られたため、建て替えが行われたと考えられる。

[2号竪穴住居]

〈位置〉7A3・4グリッドに位置する。

〈検出面〉Ⅱ層。

〈検出状況〉当初、焼土と炭化物の検出状況からカマドは認識していたものの、住居プランは不明瞭であった。そのためサブトレンチを数本入れ、住居プランの把握に務めた。その結果、住居の北側半分が水田耕作により削平を受けている状況を確認し、本遺構はカマドと南側半分の床面のみの精査となる。

〈規模〉規模は2.35m×2.57mである。

〈平面形〉確認できた南東・東西隅は隅丸方形を呈する。

〈壁の状況〉大半は後世に削平され、確認できた壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。残存している壁高は4～6cmである。

〈床の状態〉Ⅱ層を掘り込むように形成された床面は、ほぼ平坦である。比較的床面全体が硬化していたものの、このことが人為的か自然的な結果硬化したものかは判断が付かない。貼り床等は確認されていない。

〈カマド〉カマドは南壁の東寄りに設置されている。袖と燃焼部を残すのみで、天井部は削平されている。袖は地山を削り出すように作られている。燃焼部は中央部が若干窪んでいるものの、ほぼ平坦である。

煙道部は上部が削平され、また、煙り出し部は調査区外に延びていくため詳細は不明である。確認できた長軸は0.96mあり、残存していた底面は平坦である。

〈埋土〉黒色シルト層主体である。

〈柱穴〉南西隅に1基確認された。

〈出土遺物〉土師器と須恵器がカマド埋土から出土している。9～11は土師器・坏である。12は土師器・甕、13は須恵器・甕である。9の体部は外傾して立ち上がり、口縁は外反する。10・11の体部は膨らみながら立ち上がり、口縁部まで残存している10は外反する。9～11の底部は糸切り後、再調整を行っている。

〈遺構時期〉9世紀後半の所属である。

[4号竪穴住居]

〈位置〉6 B12・13・18グリッドに位置する。

〈検出面〉Ⅱ層。

〈検出状況〉水田耕作により水が多くついていたため埋土と区別できなかったが、カマド煙道部分を確認できたことから住居跡と判断し、プラン確定後精査に入る。掘り下げていくにつれ炭化材や木材等が出土したため、焼失住居と判断した。

〈規模〉規模は3.18m×3.32mである。

〈平面形〉方形を呈する。

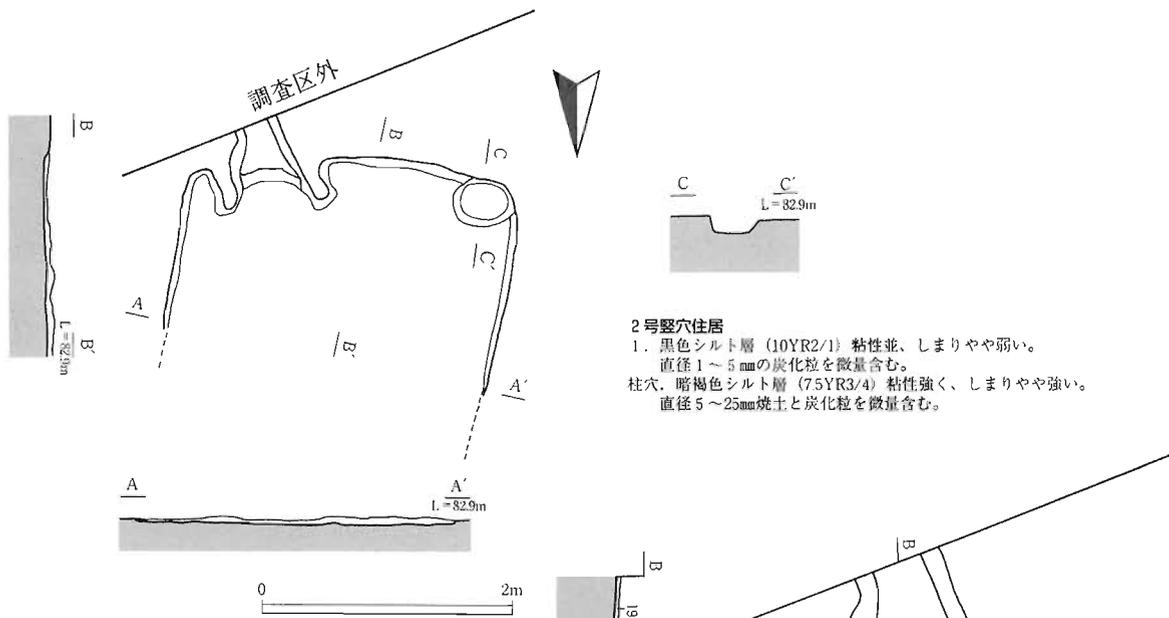
〈埋土〉黒色粘土質シルトや暗褐色シルト層が主体で、15層に分けられる。

〈壁の状況〉各壁は外傾しながら立ち上がる。比較的残存状態が良く、壁高は18～26cmである。

〈床の状態〉Ⅱ層を掘り下げ、平坦に形成されている。その床面は地山に比べ堅く締まっているが、貼り床等は確認されていない。

〈カマド〉カマドは東壁の南寄りに設置されている。上部構造は不明であるが、断面より天井部の崩落が観察されている。袖は地山であるシルト層を基盤として作り出されている。燃焼部は若干窪み、焼けて比較的硬化している。

煙道部は1.57mで、円形を呈する煙り出し部(0.32m×0.38m)に向かって緩やかに下っていく。この煙道部は主体部とは異なり、埋土から崩落土が観察されないことから、掘り込み式と考えられる。

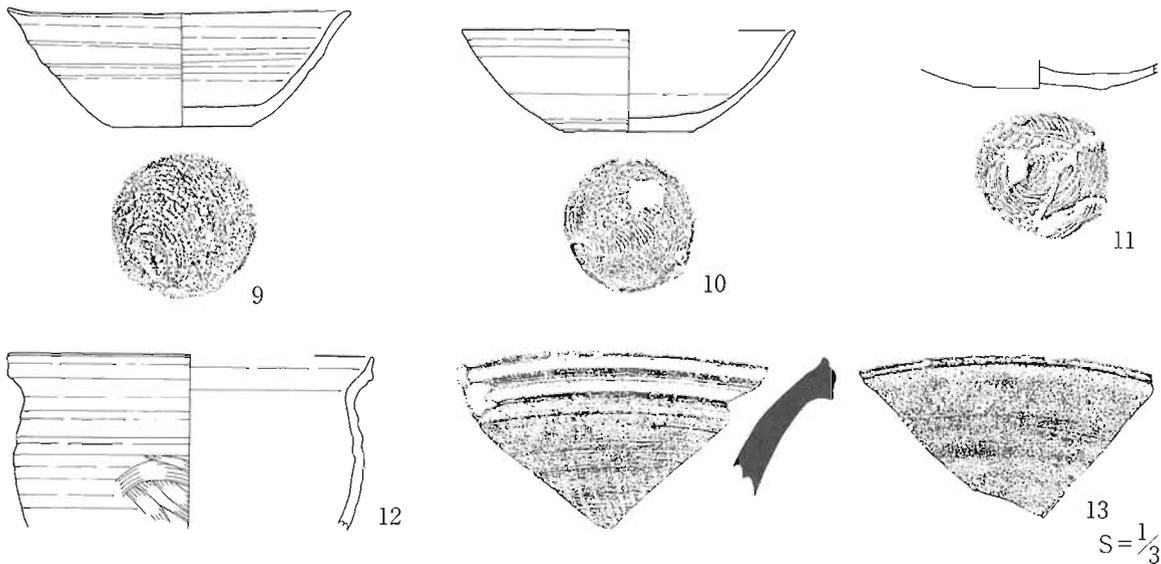
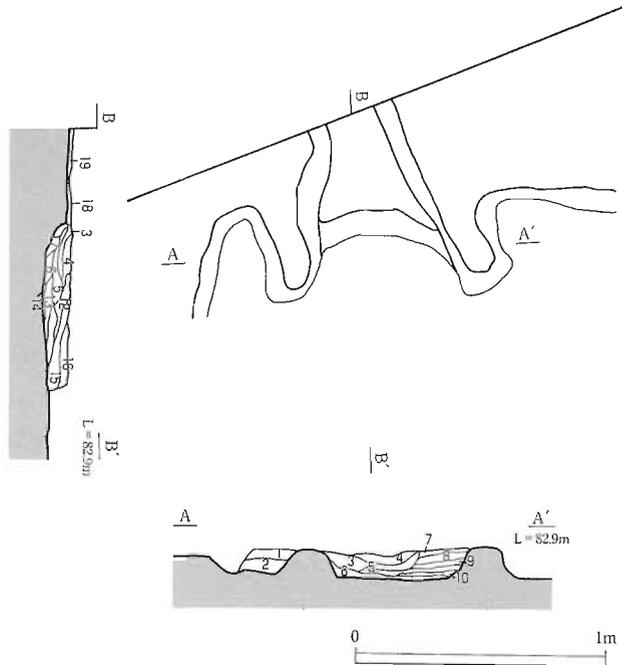


2号竖穴住居

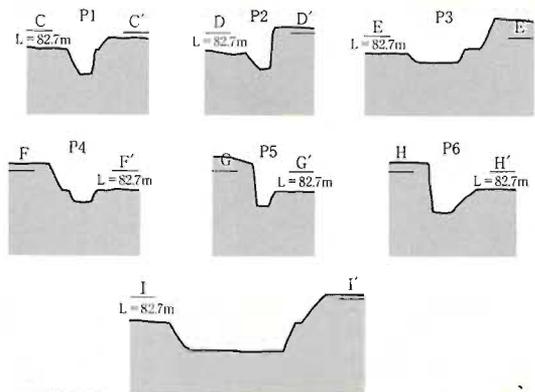
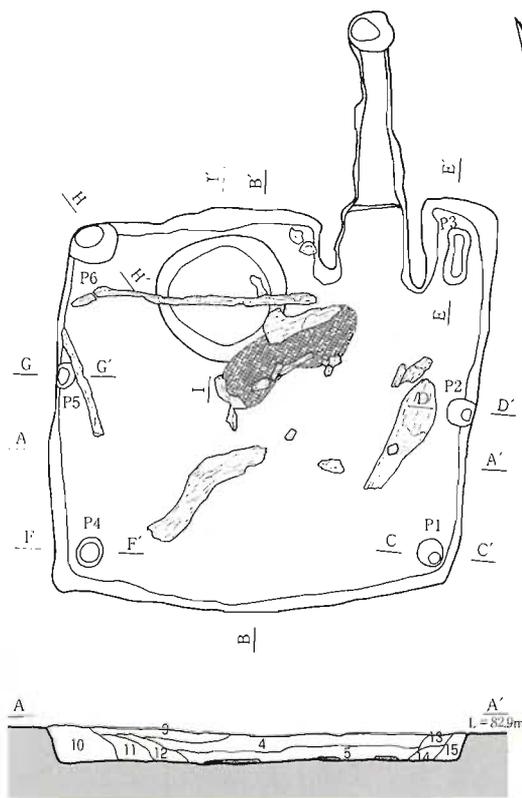
1. 黒色シルト層 (10YR2/1) 粘性並、しまりやや弱い。
直径1~5mmの炭化粒を微量含む。
- 柱穴、暗褐色シルト層 (7.5YR3/4) 粘性強く、しまりやや強い。
直径5~25mm焼土と炭化粒を微量含む。

カマド注記

1. 黒色シルト層 (10YR2/1) 粘性、しまり共にやや弱い。
直径1~5mmの炭化粒を微量含む。
2. 1層に類似。粘性は増し、混入物が見られなくなる。
3. 明褐色シルト層 (7.5YR5/8) 粘性並、しまりやや弱い。
4. 1層に類似。焼土ブロックが混入。
5. 褐色砂質シルト層 (10YR4/4) 粘性やや強く、しまりやや弱い。
直径5~10mmの焼土を微量含む。
6. 5層に類似。粘性と混入物共に増す。直径5~10mmの炭化粒も確認される。
7. 暗褐色シルト層 (7.5YR3/4) 粘性やや弱く、しまりやや強い。
直径5~10mmの焼土を微量含む。
8. 7層と類似。
9. 暗褐色シルト層 (10YR3/4) 粘性、しまり共にやや強い。
直径5~10mmの焼土を微量含む。
10. 炭化物 (10YR1.7/1)
12. にぶい黄褐色シルト層 (10YR4/3) 粘性やや強く、しまり並。
直径3~5mmの焼土と直径1~5mmの炭化粒を微量含む。
13. 褐色砂質シルト層 (10YR4/4) 5層と類似。
14. 褐色砂質シルト層 (10YR4/4) 5層と類似。
15. 黒褐色シルト層 (10YR2/2) 粘性やや強く、しまりやや弱い。
直径5~10mmの炭化粒と直径3~5mmの焼土を微量含む。
16. 黒色シルト層 (10YR2/1) 1層と類似。
17. 褐色シルト層 (10YR4/4) 粘性、しまりやや弱い。
直径5~10mmの炭化粒と直径1~3mmの焼土を多く含む。
18. 暗褐色シルト層 (10YR3/3) 粘性やや強く、しまりやや弱い。
直径5mm前後の焼土を含み、土器出土。
19. 黒褐色シルト層 (10YR2/2) 粘性、しまり共にやや強い。
直径1~3mm焼土と炭化粒を微量含む。



第11図 2号竖穴住居・出土遺物



4号竪穴住居

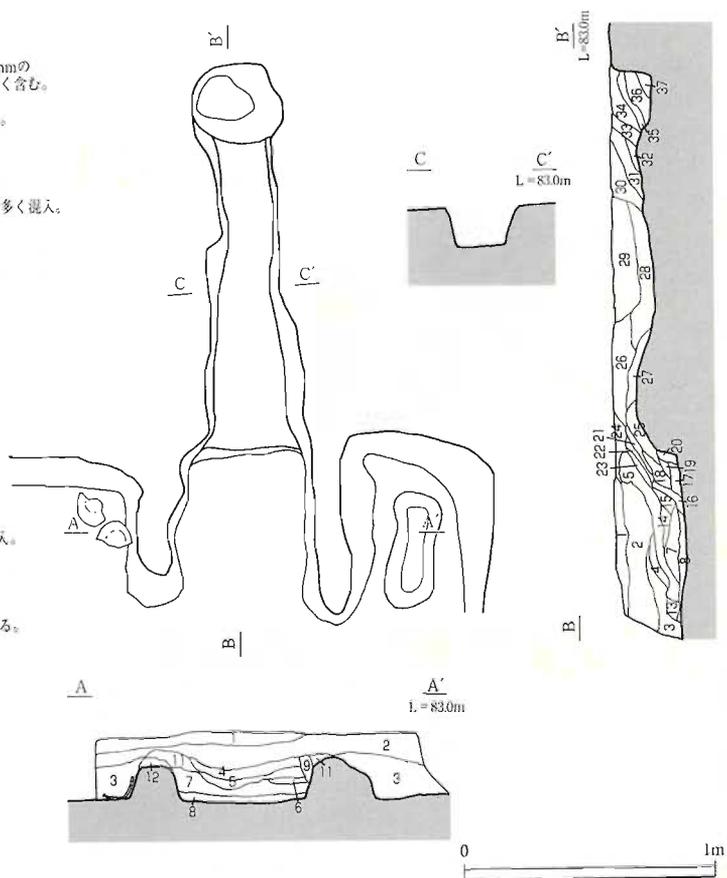
1. 黒色粘土質シルト層 (10YR2/1) 粘性、しまり共に強い。地山崩落土を含む。
2. 黒色粘土質シルト層 (10YR2/1) 1層と類似しているが、粘性は強い。
3. 黒褐色粘土層 (10YR2/2) 粘性、しまり共にやや強い。地山ブロックを多く混入。
4. 黒褐色粘土層 (10YR1.7/1) 粘性やや強く、しまり強い。酸化鉄や褐鉄鉱を多く含む。
5. 黒褐色粘土層 (10YR1.7/1) 4層と類似しているが粘性増し、しまりはやや強い。
6. 3層と類似するが、直径1~5mmの炭化粒も見られる。7.2層と類似。
8. 暗褐色シルト層 (10YR3/3) 粘性やや弱く、しまり強い。
直径2~3cmの地山ブロックを含む。
9. 暗褐色シルト層 (10YR3/4) 粘土、粘性しまり共に強い。地山ブロックを含む。
10. 黒色粘土質シルト層 (10YR2/1) 2層と類似。
11. 黒色粘土質シルト層 (10YR2/1) 2層と類似。
12. 黒褐色粘土層 (10YR2/2) 3層と類似しているが、地山ブロックを多く混入。
13. 黒色粘土質シルト層 (10YR2/1) 1層と類似。
14. 黒色粘土質シルト層 (10YR2/1) 1層と類似。
15. 黒色粘土質シルト層 (10YR2/1) 2層と類似。

柱穴1~6. 黒色粘土質シルト層 (10YR2/1) 粘性強く、しまりやや弱い。
地山ブロックを多く含む。
土坑1. 黒色シルト層 (10YR2/1) 柱穴とはほぼ同じであるが、直径5~50mmの炭化粒を多く含む。

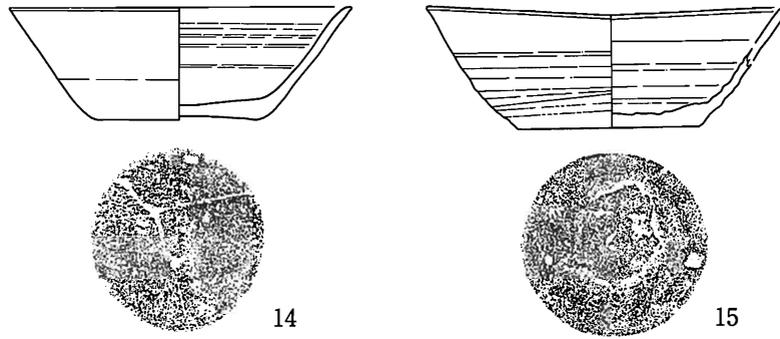


カマド注記

1. 住居セクション9層と同一。
2. 住居セクション3層と同一。
3. 住居セクション4層と同一。ただしカマド付近であるため直径5~10mmの焼土、直径10~15mmの炭化粒、直径5~10mmの地山崩落土をやや多く含む。
4. 暗褐色シルト層 (10YR3/4) 天井部分の崩落土が主体。
直径5~20mmの焼土をやや多く、直径1~5mmの炭化粒を並に含む。
5. 灰褐色シルト層 (10YR4/2) 天井部分の崩落土。袖と同じ色調。
6. 暗赤褐色シルト層 (5YR3/3) 5層と7層の中間的な層。
7. 焼土 (2.5YR3/6~4/6) 粘性弱く、しまり並。
8. 黒色シルト層 (10YR1.7/1) 粘性、しまり共にやや強い。
直径5~20mmの炭化粒を最も多く含む。直径5~20mmの焼土をやや多く混入。
9. 近い赤褐色シルト層 (5YR4/3) 粘性・しまり共に並。
袖なし天井部崩落土と焼土が混ざり合った層。
4層の類似。
11. 暗褐色シルト層 (10YR3/3) 粘性並、しまりやや強い。
直径10~15mmの焼土と直径1~5mmの炭化粒を少量含む。
12. 黒褐色シルト層 (10YR2/3) 3層が混入。
13. 黒褐色シルト層 (10YR2/3) 3層と混入しているものの4層に近い。
14. 褐色シルト層 (7.5YR4/3) 粘性並、しまりやや強い。
5層と7層の中間的な層。
15. 黒褐色シルト層 (10YR3/3) 粘性やや強く、しまり強い。
直径3~5mmの焼土を少量含む。
16. 褐色シルト層 (7.5YR4/3) 粘性強く、しまりやや強い。
焼土と天井部崩落土が混ざった層。焼土がブロック状に混入。
17. 赤褐色シルト層 (5YR3/6) 粘性並、しまりやや弱い。
直径2~3mmの炭化粒と焼土をやや多く含む。
18. 17層に類似。若干粘性が増し、焼土のみ確認される。
19. 17層に類似。若干粘性が増し、焼土のみ確認される。
20. ほぼ17層と同一。
21. 褐色シルト層 (10YR4/6) 粘性、しまり共にやや弱い。焼土が少量混入。
22. 褐色シルト層 (10YR4/6) 粘性、しまり共に弱い。焼土が少量混入。
23. 黒褐色シルト層 (10YR2/2) 粘性、しまり共に強い。
24. 黒褐色シルト層 (10YR3/2) 粘性やや強く、しまり強い。
天井部崩落土がブロック状に少量混入。
25. 赤褐色シルト層 (2.5YR4/6) 粘性しまり共に弱い。焼土が多く含まれる。
26. 黒褐色シルト層 (7.5YR2/1) 粘性やや強く、しまり強い。
直径1~5mmの炭化粒と直径5~10mmの焼土を少量含む。
27. 暗褐色シルト層 (10YR3/4) 粘性弱く、しまりやや弱い。
直径5mmの焼土を少量含む。
28. 26に類似。粘性増す。
29. 暗褐色シルト層 (10YR3/3) 粘性強く、しまり弱い。
30. 黒褐色シルト層 (10YR2/3) 粘性、しまり共に強い。
31. 黒褐色シルト層 (10YR2/3) 粘性、しまり共に強い。
32. 暗褐色シルト層 (7.5YR4/4) 粘性やや弱く、しまり並。
直径5mm前後の焼土を微量含む。
33. 褐色シルト層 (7.5YR4/4) 粘性やや弱く、しまり並。
直径5mm前後の焼土を微量含む。
34. 暗褐色シルト層 (10YR3/3) 粘性強く、しまりやや弱い。
35. 赤褐色シルト層 (5YR4/6) 33層と類似しているが粘性強い。
36. 34層と同じ。
37. 34層に近いが粘性増す。



第12図 4号竪穴住居



$$S = \frac{1}{3}$$

第13図 4号竪穴住居出土遺物

〈炭化粒・炭化材〉床面中央に炭化粒の集中した範囲と炭化した板材と角材及び炭化していない板材が床面直上で検出された。

〈土坑・柱穴〉柱穴6基・土坑1基が確認されている。柱穴は北壁と南壁に3基ずつあり、ほぼ等間隔に配置されている。北東と北西隅の柱穴以外は、規模・平面形共に近似している。土坑はカマドの北側に設置され、用途は貯蔵穴と思われる。規模は1.03m×0.97m、深さ0.2mで、平面形は円形を呈する。この土坑からは遺物は確認されなかったが、多くの炭化材が出土した。このことから焼失時に埋まった可能性が考えられる。

〈出土遺物〉土師器・坏14・15の2点がカマド左袖の床面直上で出土している。14と15共に体部から口縁まで外傾して立ち上がり、底部はヘラ切り後に再調整されている。

〈遺構時期〉9世紀後半の所属である。

【5号竪穴住居】

〈位置〉6B5グリッドに位置する。

〈検出面〉Ⅱ層。

〈検出状況〉遺構検出時に南東隅が調査区外に延びていくものの、住居プランとして確定できたことより遺構精査に着手する。

〈規模〉残存している北西壁・南西壁は、それぞれ3.27m・3.56mである。

〈平面形〉平面形は方形を呈する。

〈埋土〉黒色シルト層が主体で、9層に分けられる。

〈壁の状況〉南壁が外傾して立ち上がる以外は、ほぼ垂直に立ち上がる。壁高は34～38cmである。

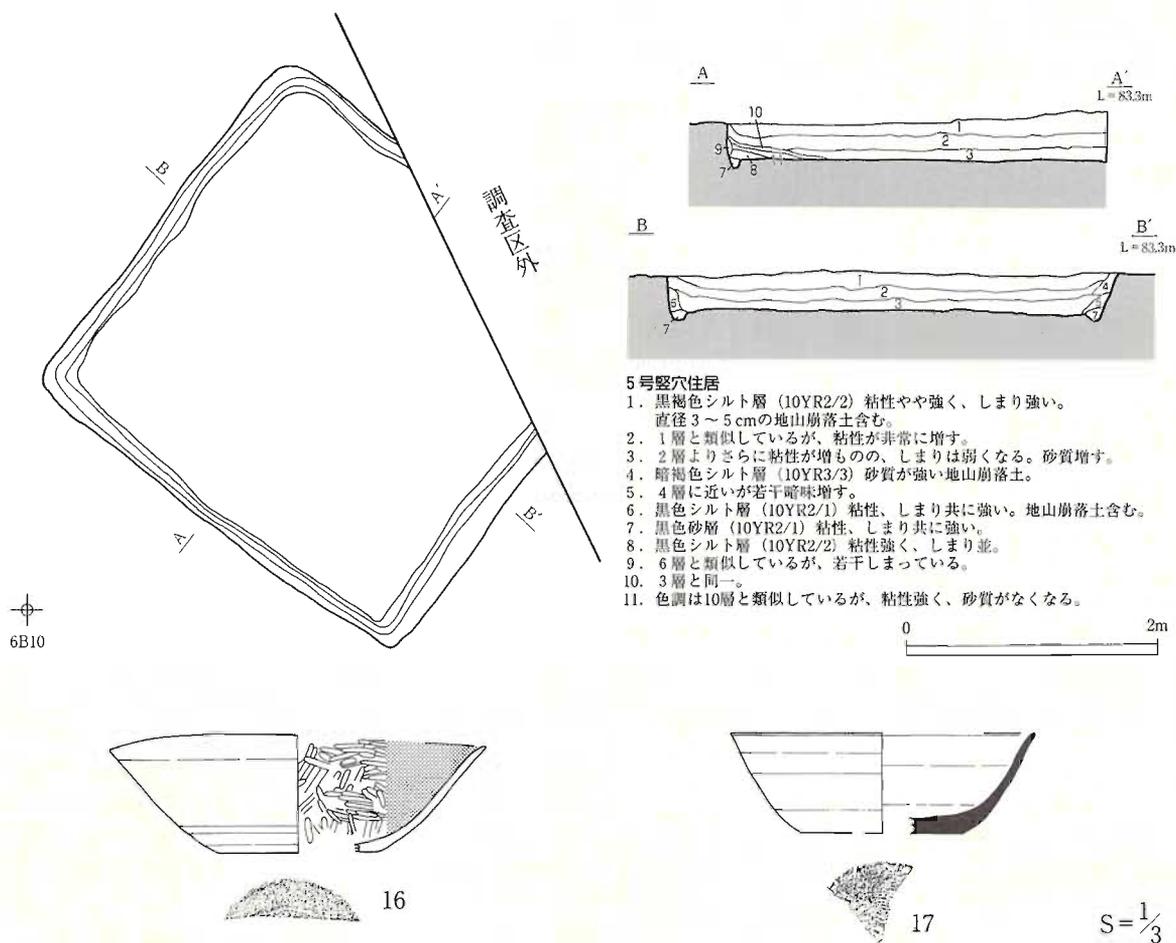
〈床の状態〉Ⅳ層である礫層との境を床面とし、ほぼ平坦である。部分的に礫が浮き上がっているのを確認できた。床面では硬化面や貼り床は確認できなかった。

〈カマド〉調査区外の南東壁側に存在しているものと思われる。

〈周溝〉検出した住居内には周溝が確認できた。断面がU字形ないし逆台形を呈し、深さ約6～8cmのものである。

〈出土遺物〉土師器と須恵器が出土している。16は内面に黒色処理とミガキが施された土師器・坏、17は須恵器の坏である。16の体部は膨らみながら立ち上がり、口縁は外反する。17は体部から口縁まで外傾して立ち上がる。16・17の底部は再調整が施されている。

〈遺構時期〉9世紀後半の所属である。



第14図 5号竪穴住居・出土遺物

[6号竪穴住居]

〈位置〉 5 B19グリッドに位置する。

〈検出面〉 II層。

〈検出状況〉 遺構検出時に住居プランとカマドと思われる焼土範囲が確定できたことにより、精査に着手する。

〈規模〉 規模は3.35m×2.66mである。

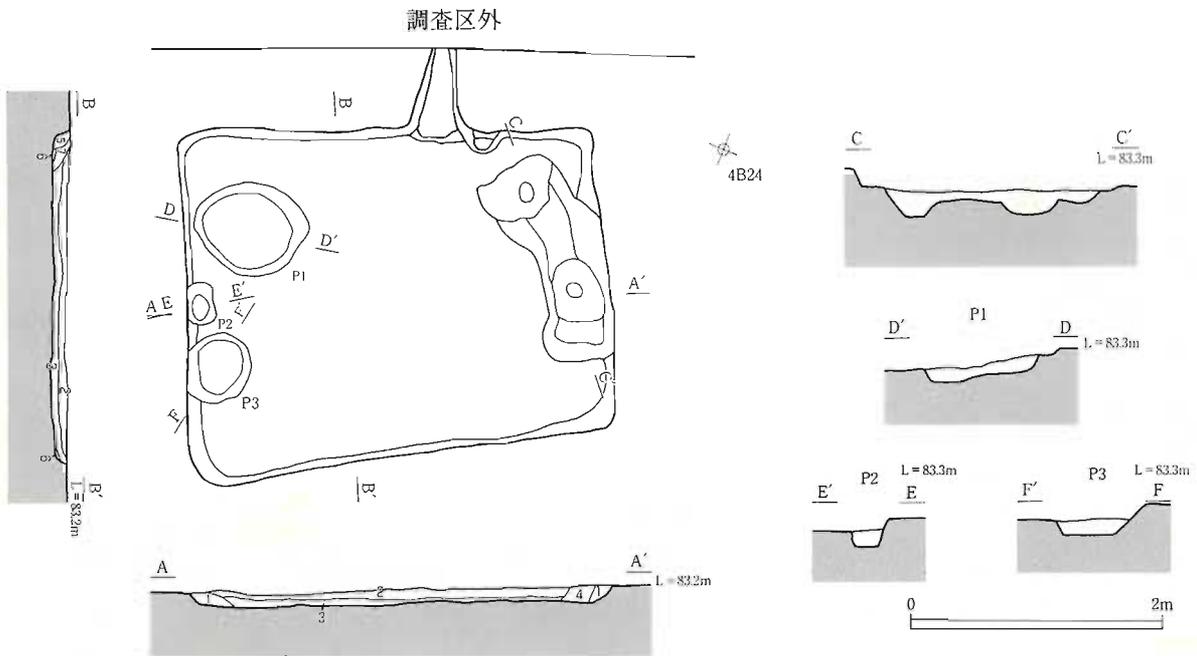
〈平面形〉 平面形は隅丸方形を呈する。

〈埋土〉 黒褐色シルト層が主体で、7層に分けられる。1層下部に十和田a降下火山灰が層状に堆積している。〈壁の状況〉 上半部は削平され残存状態は良くないが、外傾しながら立ち上がる。確認できた壁高は10~14cmである。

〈床の状態〉 平坦な床は、II層を掘り込むように形成されている。貼り床等は確認されていない。

〈カマド〉 カマドは東壁のやや南寄りに設置されている。住居上半部と共に大部分が削平され、右袖の下端部を残存するだけで、袖は暗褐色シルト層で構築されている。燃焼部は平坦で、やや堅く締まっている。

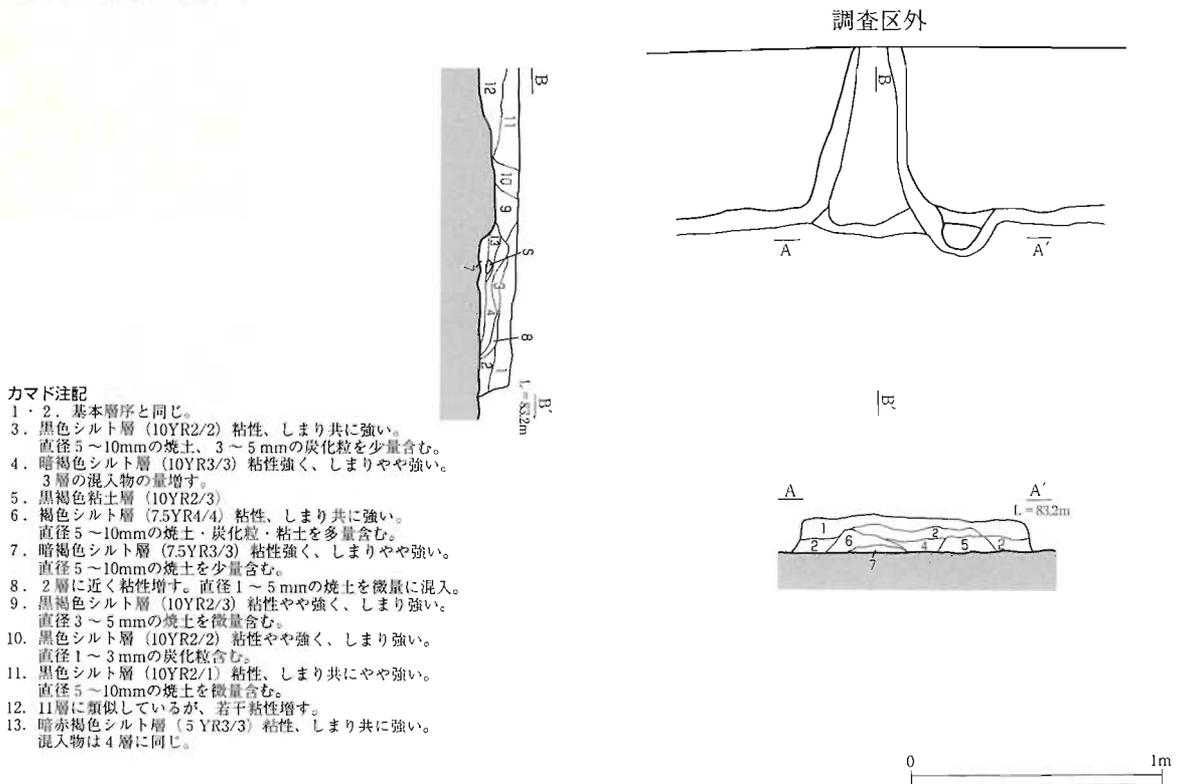
煙道部は確認できた長軸は0.75mある。煙道部は燃焼部から緩やかに傾斜していくが、煙り出し部は調査区外に延びていくため不明である。



6号竪穴住居

1. 黒色粘土層 (10YR2/2) 粘性、しまり共に強い。
2. 黒色シルト層 (10YR2/2) 粘性やや強く、しまり強い。本層下部に十和田 a 降下火山灰が層状を成している。直径1~15mmの炭化粒がやや多く、直径5mm前後の焼土と粘土を微量含む。
3. 黒色粘土層 (10YR2/2) 粘性、しまり共に強い。地山崩落土を少量含む。2層に比べて混入物増す。
4. 黒色シルト層 (10YR2/1) 粘性やや強く、しまり強い。直径10mmの炭化粒を微量含む。
5. 1層と類似。
6. 褐色砂質シルト層 (10YR4/2) 地山崩落土。粘性やや弱く、しまり並。
7. 黒色シルト層 (10YR2/1) 粘性強い。直径3~5mmの焼土、直径1~5mmの炭化粒を少量含む。

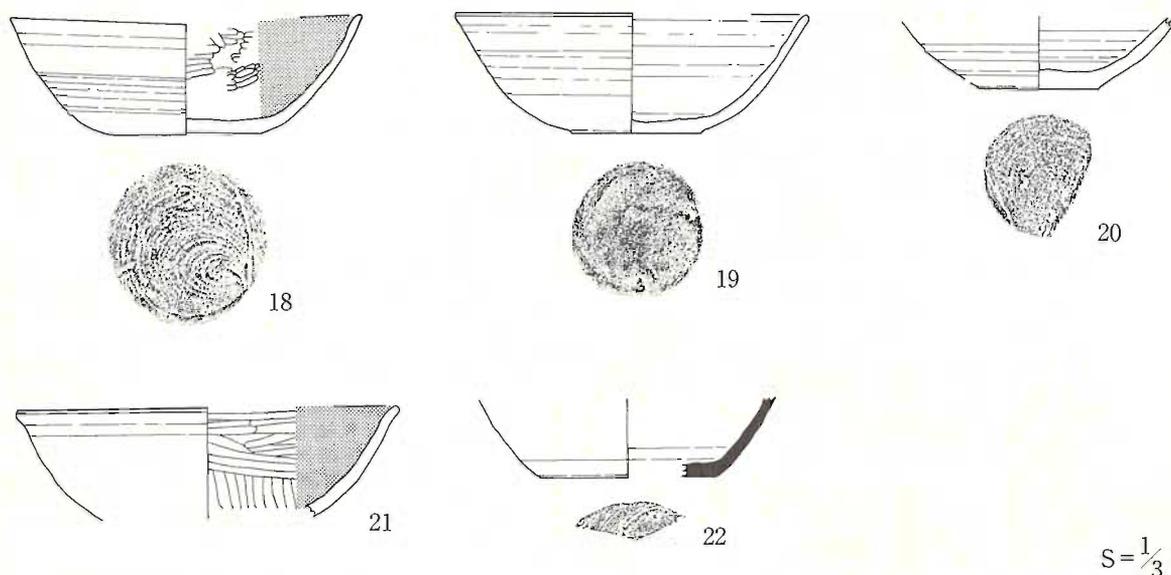
柱穴1~5. 黒色シルト層 (10YR2/2) 粘性強く、しまりやや強い。直径5~10mmの炭化粒を微量含む。



カマド注記

- 1・2. 基本層序と同じ。
3. 黒色シルト層 (10YR2/2) 粘性、しまり共に強い。直径5~10mmの焼土、3~5mmの炭化粒を少量含む。
4. 暗褐色シルト層 (10YR3/3) 粘性強く、しまりやや強い。3層の混入物の量増す。
5. 黒褐色粘土層 (10YR2/3)
6. 褐色シルト層 (7.5YR4/4) 粘性、しまり共に強い。直径5~10mmの焼土・炭化粒・粘土を多量含む。
7. 暗褐色シルト層 (7.5YR3/3) 粘性強く、しまりやや強い。直径5~10mmの焼土を少量含む。
8. 2層に近く粘性増す。直径1~5mmの焼土を微量に混入。
9. 黒褐色シルト層 (10YR2/3) 粘性やや強く、しまり強い。直径3~5mmの焼土を微量含む。
10. 黒色シルト層 (10YR2/2) 粘性やや強く、しまり強い。直径1~3mmの炭化粒含む。
11. 黒色シルト層 (10YR2/1) 粘性、しまり共にやや強い。直径5~10mmの焼土を微量含む。
12. 11層に類似しているが、若干粘性増す。
13. 暗赤褐色シルト層 (5YR3/3) 粘性、しまり共に強い。混入物は4層に同じ。

第15図 6号竪穴住居



第16図 6号竪穴住居出土遺物

〈土坑・柱穴〉柱穴は北壁に3基、南壁に1基の合計4基ある。南壁に形成された土坑は、底面において2基分の柱穴を確認できる。

〈出土遺物〉18～21は土師器・坏で、22は須恵器・坏である。18・21は内面に黒色処理とミガキが施されている。土師器・坏は、体部が膨らみながら立ち上がるが、18・19の口縁が直線的なもの、21の口縁が外反するものに分けられる。底部は糸切りのもの（18）と糸切り後再調整がされているもの（19・20）がある。

〈遺構時期〉10世紀前半の所属である。

[8号竪穴住居]

〈位置〉6 B 15・6 C 11グリッドに位置する。

〈検出面〉Ⅱ層。

〈検出状況〉1号竪穴住居と同様に試掘トレンチを入れた結果、本遺構を認識できた。試掘当初は、表土が厚く堆積し、その表土は攪乱を受けており住居埋土と判別できなかった。そのトレンチの範囲を広げていった結果、遺物が多く見られ地山において遺構プランを確認できたことから精査に入る。精査はほぼ床面のみとなった。

〈規模〉確認できた北壁4.23m、東壁2.23m、西壁1.79mである。

〈平面形〉確認できた北東・北西隅は隅丸方形を呈する。

〈埋土〉比較的硬化した暗褐色シルト層は2層に分けられる。貼り床等は確認されていない。

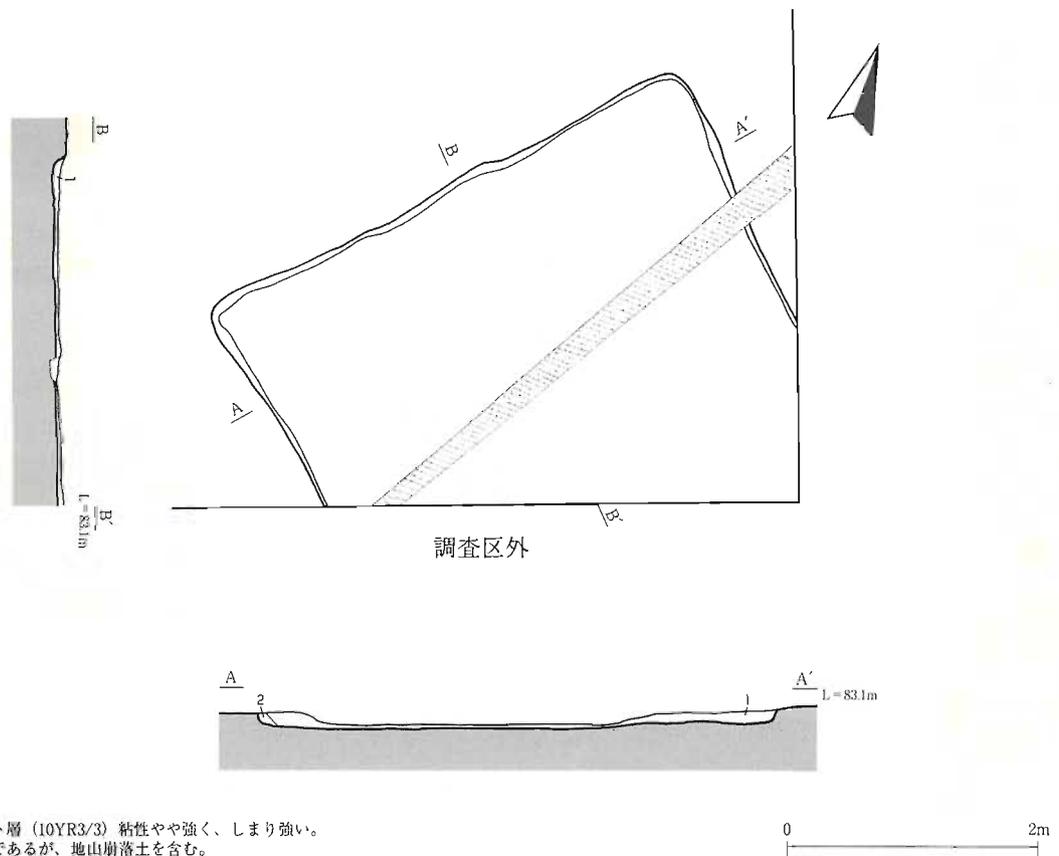
〈壁の状況〉ほぼ床面での検出で、壁の残存状況が悪い。確認できた壁高は10～12cmで、ほぼ垂直に立ち上がる。

〈床の状態〉Ⅱ層を掘り込むように形成された床は、平坦である。

〈カマド〉不明。

〈出土遺物〉土師器が出土しているが、磨滅したものが大半であり掲載不可能であった。

〈遺構時期〉9～10世紀に所属する可能性がある。



8号竪穴住居

1. 黒褐色シルト層 (10YR3/3) 粘性やや強く、しまり強い。
2. 1層と同じであるが、地山崩落土を含む。

第17図 8号竪穴住居

[9号竪穴住居]

〈位置〉 3 G 11グリッドに位置する。

〈検出面〉 II層。

〈検出状況〉 遺構精査によりカマド煙道部分を確認し、サブトレンチを入れ住居プランを確定したことから住居と判断し、精査に着手した。

〈規模〉 調査区内で確認できた東壁と南壁は、2.58m・2.72mである。

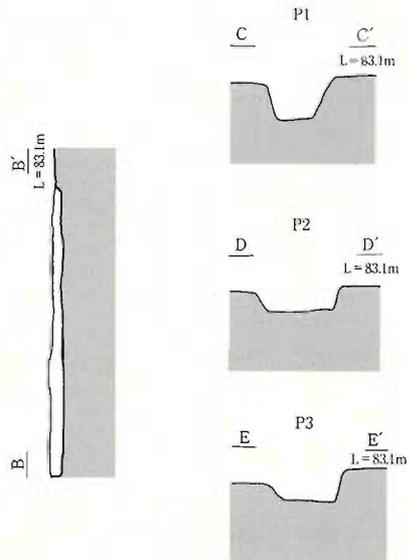
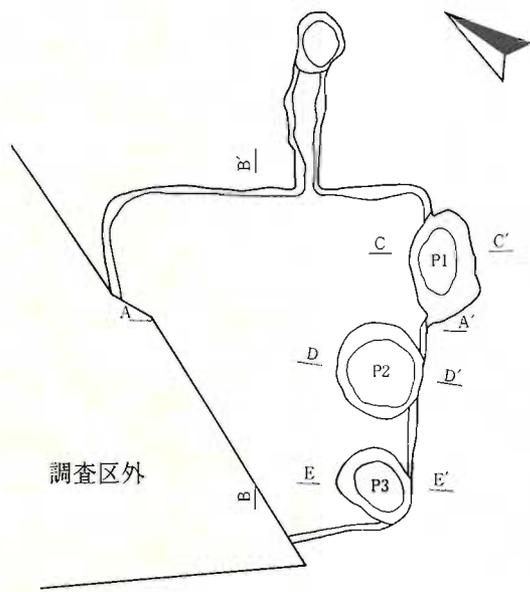
〈平面形〉 平面形は方形を呈する。

〈壁の状況〉 ほぼ床面での検出であったため、壁の残存状況は極めて悪い。確認できた壁高は5～8cmで、外傾しながら立ち上がる。

〈床の状態〉 II層を掘り込むように形成された床は、ほぼ平坦である。硬化面や貼り床等は確認されていない。

〈カマド〉 西壁のほぼ中央に設置されている。住居が削平され床面のみを検出であったため、カマド本体及び燃烧部は把握できない。煙道部と煙り出し穴のみ残存しており、確認できた煙道部の長さは1.45mである。燃烧部から煙道はほぼ平坦に作られ、楕円形を呈する煙り出し部 (0.48m×0.39m) の手前で緩やかに傾斜していく。

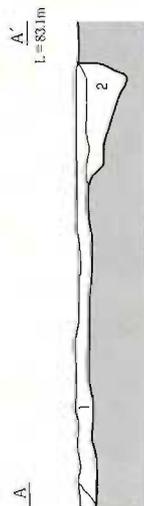
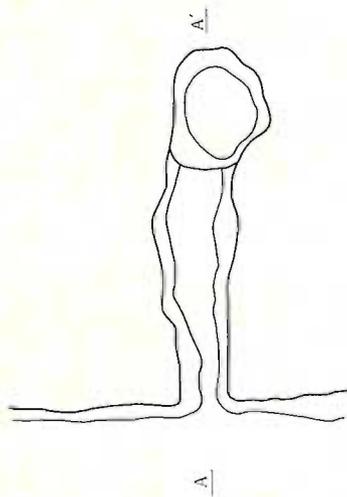
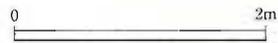
〈埋土〉 堅く締った暗褐色シルト層が主体である。



9号竪穴住居

1. 暗褐色シルト層 (10YR3/3) 粘性やや強く、しまり強い。
地山ブロックを多く混入。

柱穴 1～3. 暗褐色シルト層 (10YR3/4) 粘性やや強く、しまり強い。
直径 3～20mmの焼土と直径 5～20mmの炭化粒をやや多く含む。土器出土。

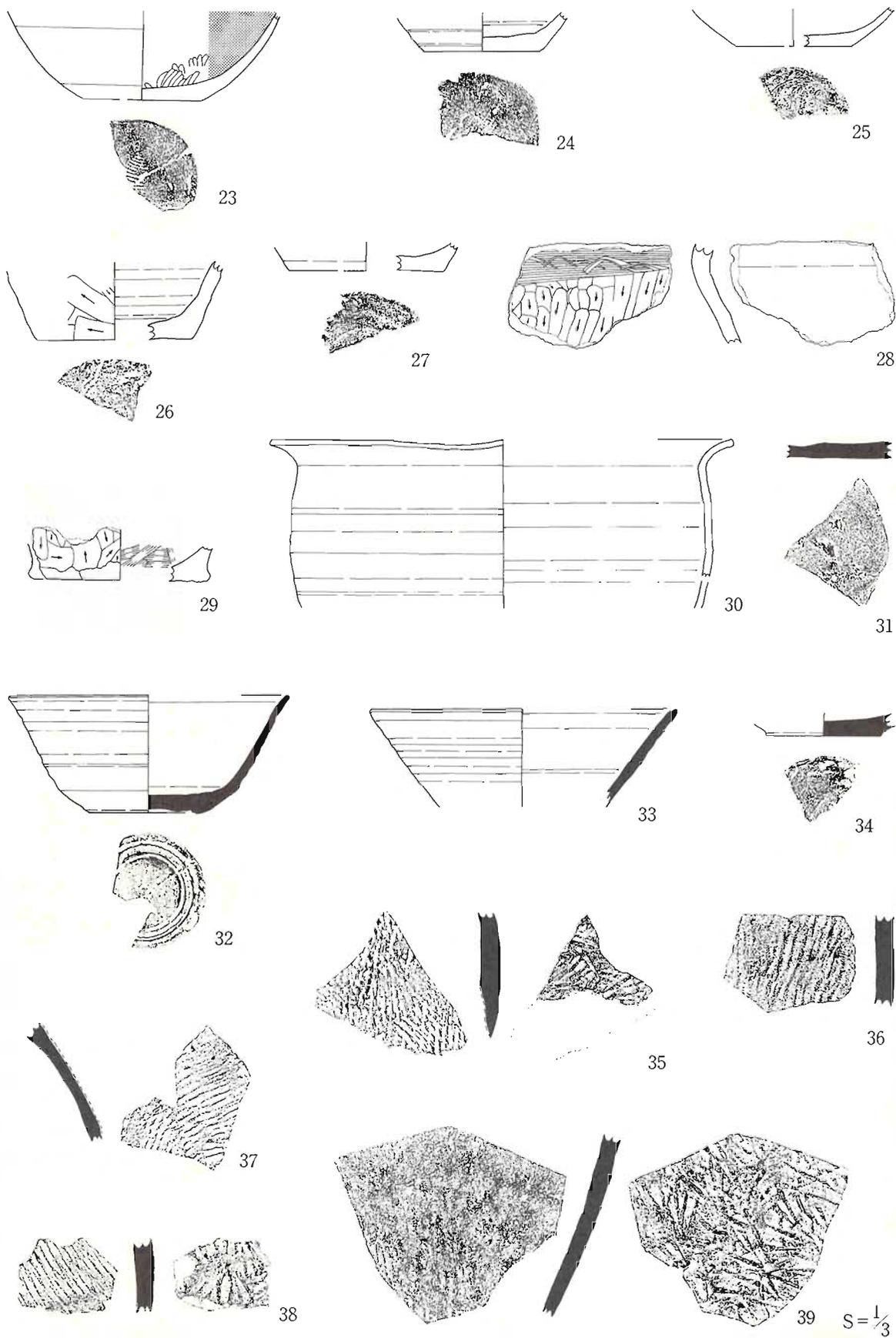


カマド

1. 暗褐色シルト層 (10YR3/4) 粘性やや弱く、しまりやや強い。
直径 5 mm前後の焼土ブロックを少量含む。
2. 黒褐色シルト層 (10YR3/2) 粘性強く、しまりやや強い。
直径 5～20mmの焼土ブロックを並含む。



第18図 9号竪穴住居



第19图 9号竖穴住居出土遗物(1)



第20図 9号竪穴住居出土遺物(2)

〈柱穴〉南壁に3基柱穴が確認された。P1が壁の外に広がりを見せるものの、P1～3は類似した規模と平面形を呈している。

〈出土遺物〉23～25・27は土師器・坏、26・28～30は土師器・甕、31～34は須恵器・坏、35～42は須恵器・甕で床面や柱穴から出土している。23は内面に黒色処理とミガキが施されている。23・25の体部は膨らみながら立ち上がるものと24・27は直線的に立ち上がるものに分けられるが、底部は糸切り(23・25)やヘラ切り(24・27)後に再調整されている。32は高台坏である。

〈遺構時期〉9世紀後半の所属である。

[1号水路]

〈出土位置〉6 A13・14・15・19・20グリッドに位置する。

〈検出面〉Ⅱ層。

〈検出状況〉遺構検出を行っていた当初は、水の影響を受けた地山と埋土の区別ができなかった。そのため調査区南北の壁面にトレンチを入れ、調査区断面より遺構の立ち上がりを確認したことから、溝と判断し精査を進めた。さらに精査を進めていくと本遺構の底面より35～40cm上位で木が検出されたことから、それを樋と判断し改めて水路として調査を行った。

〈規模〉検出長10.26m、上端2.12～2.41m、下端0.47～1.02mである。

〈平面形〉上端・下端共に平行で、部分的に膨らみが見られるものの全体的にはほぼ真っ直ぐである。若干北壁近くなるにつれ上端が広がっている。

〈軸線方向〉N-55°-Wである。

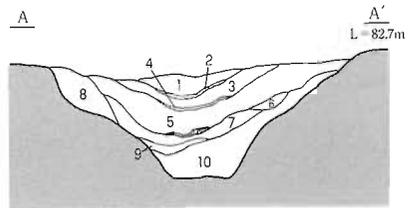
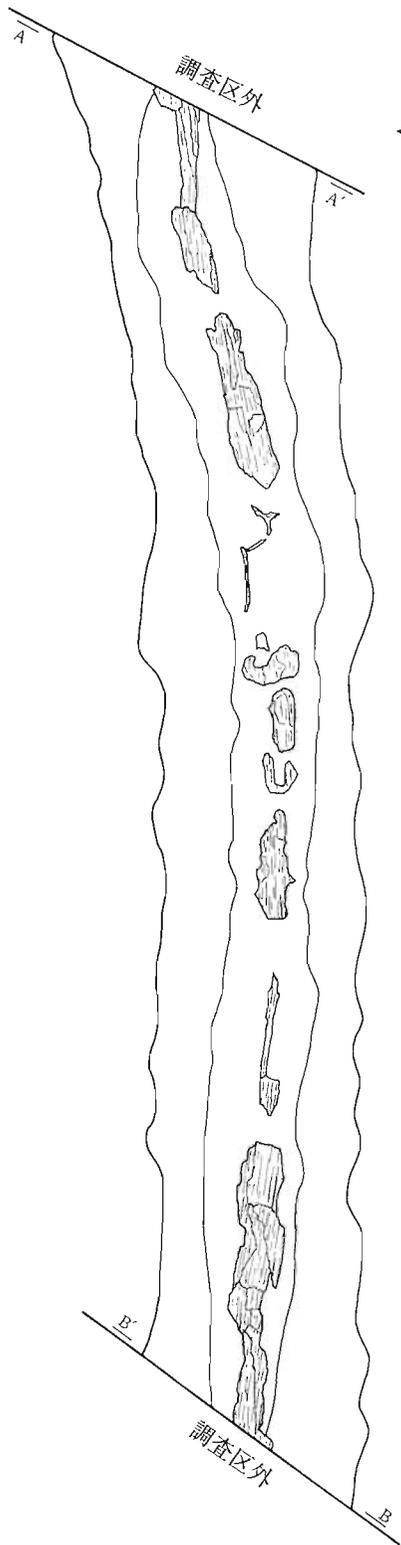
〈樋〉底面より35～40cmの上位において樋が直線に敷かれている。北壁と南壁の比高差は5cmで、わずかに南壁が低い。樋は腐食が進んでいるため、加工の有無は判断できなかったが、おそらく流木を利用したものと思われる。

〈埋土〉黒～暗褐色シルト層主体で、北壁が10層、南壁が8層に分けられる。十和田a降下火山灰が北壁で2層と4層、南壁では1・2層中にブロック状で検出されている。分析結果では、北壁で検出された2層は自然堆積層、4層は二次堆積によるものである。

〈出土遺物〉43は須恵器・甕である。

〈遺構時期〉9世紀後半に所属する。

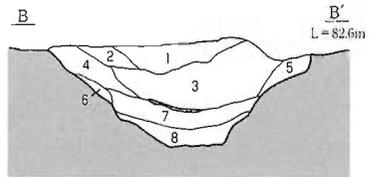
〈備考〉水路として機能した以前は、樋と底面間の埋土層から水性堆積層が観察されることから、溝として機能していたものと思われる。



1号水路

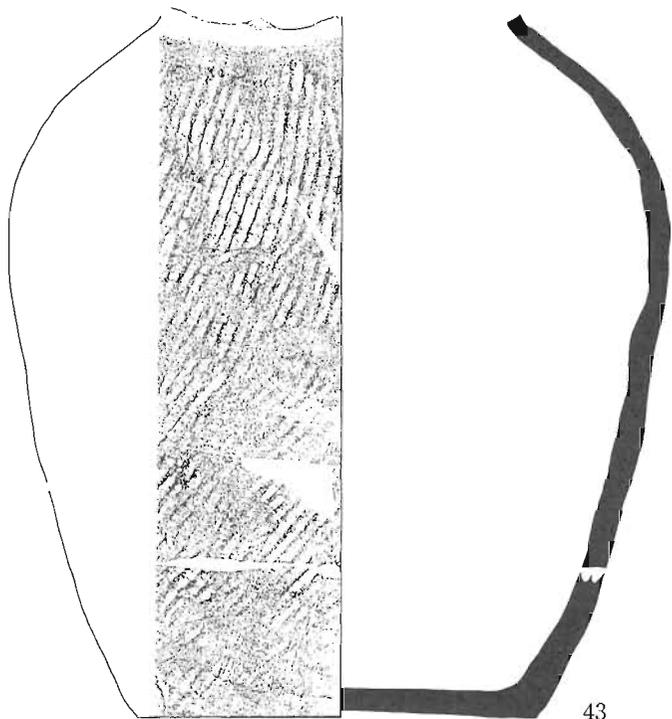
北壁

1. 黒褐色シルト層 (10YR3/2) 粘性、しまり共に強い。
2. 十和田 a 降下火山灰層 (10YR8/1)
3. 黒色シルト層 (10YR2/1) 粘性、しまり共に強い。
4. 十和田 a 降下火山灰層 (10YR8/1)
5. 黒褐色シルト層 (10YR2/3) 粘性強く、しまりやや強い。
6. 黒褐色シルト層 (10YR3/2) 粘性、しまり共に強い。
7. 6層に色調は類似しているが、粘性、しまり共に増す。
8. 6層に類似しているが、黒味としまりが増す。
9. 暗赤褐色砂質シルト層 (2.5YR3/2) 粘性強く、しまり並。
10. 黒褐色砂質シルト層 (5YR3/1) 粘性強く、しまり並。



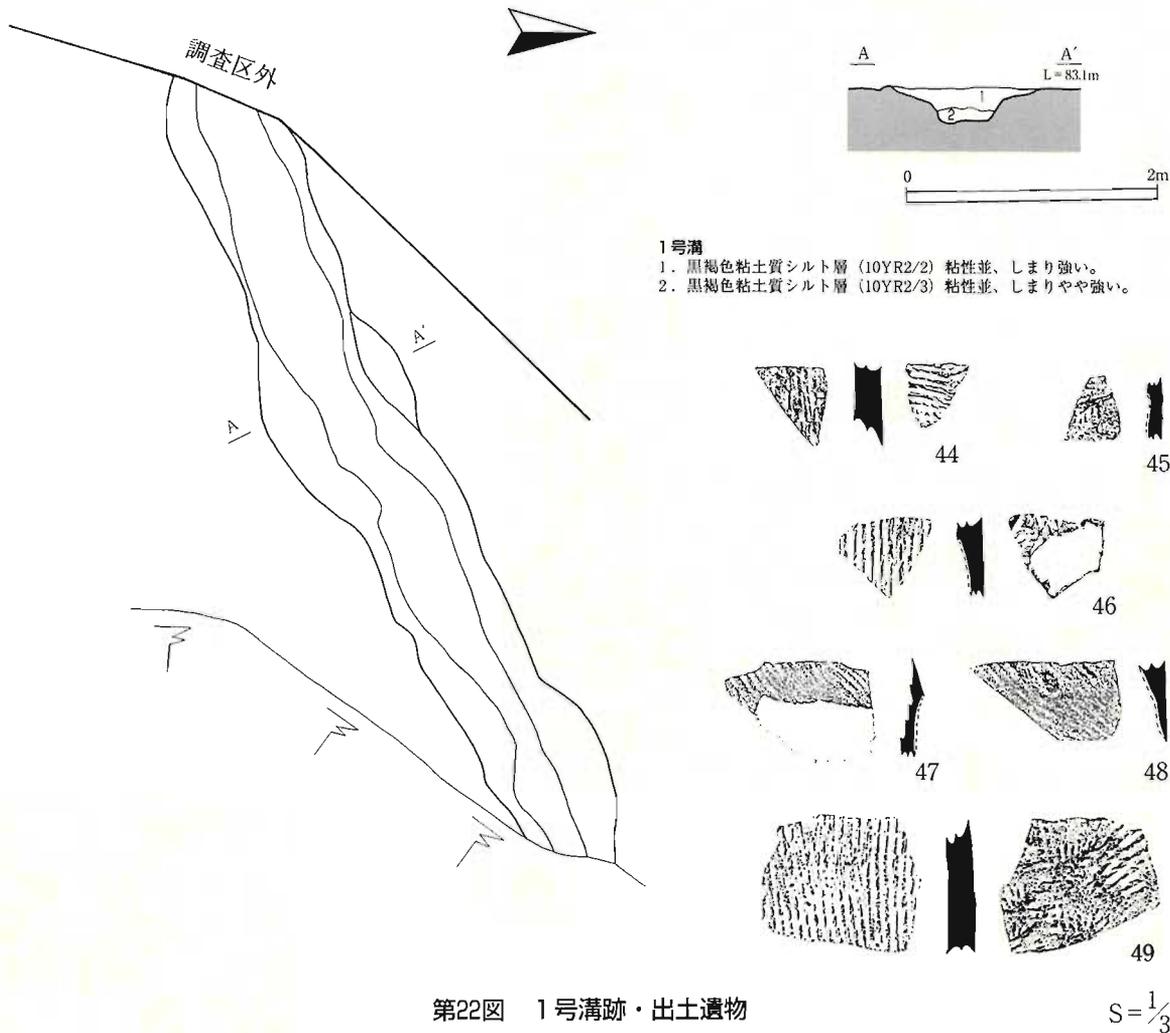
南壁

1. 黒色シルト層 (10YR1.7/1) 粘性、しまり共に強い。
十和田 a 降下火山灰がブロック状に混入。
2. 黒褐色シルト層 (10YR3/2) 粘性強く、しまりやや強い。
十和田 a 降下火山灰がブロック状に混入。
3. 黒褐色シルト層 (10YR2/3) 粘性強く、しまりやや強い。
4. 黒色シルト層 (10YR2/1) 粘性やや強く、しまり強い。
5. 黒褐色シルト層 (10YR2/2) 粘性強く、しまり並。
6. 黒褐色砂質シルト層 (10YR2/2) 粘性強く、しまり並。
7. 暗赤褐色砂質シルト層 (2.5YR3/2) 粘性強く、しまり並。
8. 黒褐色砂質シルト層 (5YR3/1) 粘性強く、しまり並。



$S = \frac{1}{3}$

第21図 1号水路跡・出土遺物



[1号溝]

〈出土位置〉3G7・11グリッドに位置している。

〈検出面・検出状況〉Ⅱ層。9号竪穴住居の北側で検出され、崖に向かって延びており、それと接する部分で遺構は終息した状況で確認した。

〈規模〉検出長6.46m、上端0.73~1.19m、下端0.24~0.64mである。

〈平面形〉上端・下端共に若干膨らむがほぼ平行で、真っ直ぐである。

〈軸線方向〉N-113°-Sである。

〈埋土〉黒褐色シルト層が主体で、2層に分けられる。

〈出土遺物〉土師器や須恵器等が出土し、磨滅したものが大半で図面掲載不可能であった。44~49は須恵器・甕である

〈遺構時期〉9世紀後半の所属と思われる。

〈性格〉遺構の性格は、土層断面より水性堆積物が確認されなかったことから、区画溝として用いられていたものと思われる。

〈備考〉遺構時期は遺物の所属時期と埋土主体層が9号住居と類似していることから、同時期と判断した。

[1号土坑]

- 〈出土位置〉 5 B20グリッドに位置する。
- 〈検出面〉 II層。
- 〈規模・平面形〉 規模は1.13m×1.00m、深さ0.28mで、平面形は円形を呈する。
- 〈底面・壁〉 底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。
- 〈埋土〉 黒褐色粘土質シルト層主体で、5層に分けられる。2層中に十和田 a 火山灰をブロック状に含んでいる。
- 〈出土遺物〉 50・51は須恵器・坏、52は土師器・坏である。50～52の底部はヘラ切り後に再調整が施されている。
- 〈遺構時期〉 9～10世紀に属する。

[2号土坑]

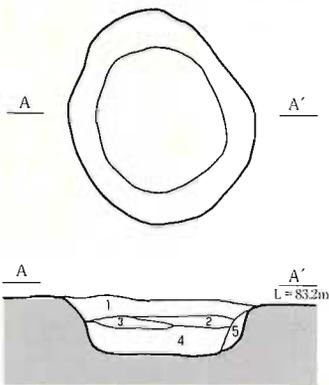
- 〈出土位置〉 6 B14グリッドに位置する。
- 〈検出面〉 II層。
- 〈規模・平面形〉 規模は0.91m×0.88m、深さ0.21mで、平面形は円形を呈する。
- 〈底面・壁〉 IV層の礫層まで掘り下げられ、底面は平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。
- 〈埋土〉 暗褐色砂質シルト層が主体で、3層に分けられる。
- 〈出土遺物〉 なし。
- 〈遺構時期〉 9～10世紀に属する。
- 〈備考〉 3・4号土坑の埋土主体層から同一時期とした。

[3号土坑]

- 〈出土位置〉 6 B14グリッドに位置する。
- 〈検出面〉 II層。
- 〈規模・平面形〉 規模は0.91m×0.88m、深さ0.37mで、平面形は円形を呈する。
- 〈底面・壁〉 IV層の礫層まで掘り下げられ、底面は平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。
- 〈埋土〉 暗褐色砂質シルト層が主体で、4層に分けられる。2層から十和田 a 降下火山灰をブロック状に混入しているのを確認した。
- 〈出土遺物〉 なし。
- 〈遺構時期〉 9～10世紀に属する。
- 〈備考〉 埋土主体層から、2・4号土坑と同一時期とした。

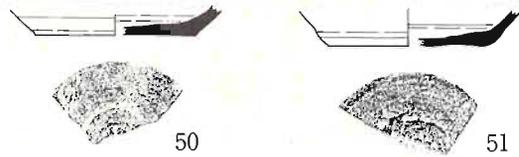
[4号土坑]

- 〈出土位置〉 6 B14グリッドに位置する。
- 〈検出面〉 II層。
- 〈規模・平面形〉 規模は0.91m×0.88m、深さ0.44mで、平面形は円形を呈する。
- 〈底面・壁〉 IV層の礫層まで掘り下げられ、底面は平坦である。壁はほぼ垂直に立ち上がる。
- 〈埋土〉 暗褐色砂質シルト層が主体で、5層に分けられる。
- 〈出土遺物〉 なし。

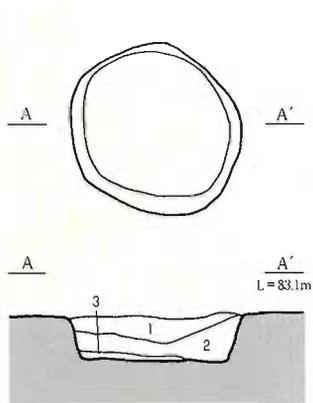


1号土坑

1. 黒褐色粘土質シルト層 (10YR2/2) 粘性やや強く、しまり強い。
直径3~5mmの焼土を微量含む。
2. 黒褐色粘土層 (10YR2/2) 粘性、しまり共に強い。1層より粘性増す。
十和田a火山灰ブロックを少量混入。直径3~5mmの焼土を微量含む。
3. 2層に類似するが、混入物は見られない。
4. 黒褐色粘土層 (10YR2/2) 酸化鉄を多く含む。
直径3~5mmの焼土と炭化粒を微量含む。
5. 黒褐色粘土層 (10YR3/2) 粘性、しまり共に強い。地山ブロックを少量含む。

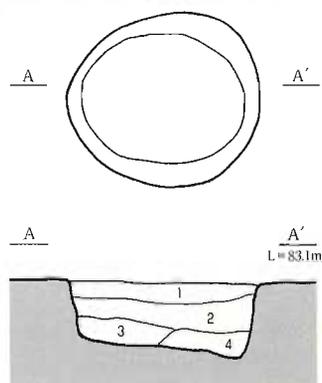


$S = \frac{1}{3}$



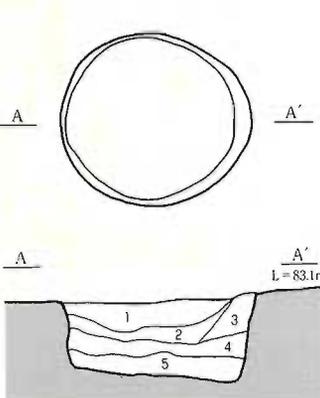
2号土坑

1. 褐色砂層 (10YR4/4) 粘性弱く、しまりやや強い。
2. 黒褐色砂層 (10YR3/4) 粘性弱く、しまりやや強い。
3. 黒褐色砂層 (10YR3/3) 粘性弱く、しまり強い。



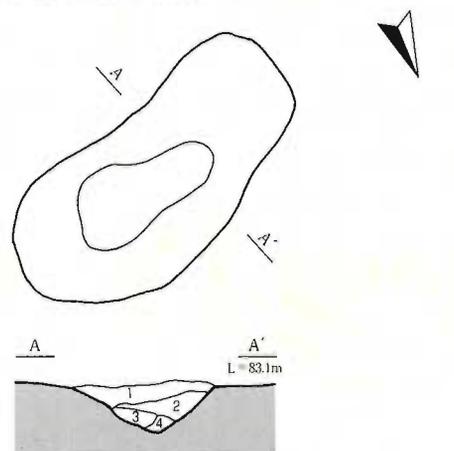
3号土坑

1. 褐色砂層 (10YR4/4) 粘性弱く、しまりやや強い。
2. 暗褐色砂層 (10YR3/4) 粘性弱く、しまりやや強い。
十和田a火山灰がブロック状に混入。
3. 暗褐色砂質シルト層 (10YR3/3) 粘性弱く、しまりやや強い。
4. 3層に類似。若干粘性増す。



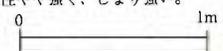
4号土坑

1. 褐色砂層 (10YR4/4) 粘性弱く、しまりやや強い。
2. 暗褐色砂層 (10YR3/4) 粘性弱く、しまりやや強い。
3. 2層に類似しているが、しまり増し。地山崩落土含む。
4. 暗褐色砂質シルト層 (10YR3/3) 粘性弱く、しまりやや強い。
5. 3層に類似。若干粘性増す。



6号土坑

1. 黒色シルト層 (10YR2/1) 粘性やや強く、しまり強い。
直径1~3mmの炭化粒を微量含む。
2. 1層と類似するが、混入物が増す。
3. 黒褐色シルト層 (10YR3/2) 粘性やや強く、しまり強い。
4. 黒色シルト層 (10YR2/1) 粘性やや強く、しまり強い。



第23図 1・2・3・4・6土坑・1号土坑出土遺物

〈遺構時期〉 9～10世紀に属する。

〈備考〉 埋土主体層から、2・3号土坑と同一時期とした。

[6号土坑]

〈出土位置〉 6 B 5・10グリッドに位置する。

〈検出面〉 II層。

〈規模・平面形〉 規模は1.73m×0.82m、深さ0.25mで、平面形は楕円形を呈する。

〈底面・壁〉 底面は、緩やかに傾斜する部分も見られるが、平坦に近い。壁は外傾して立ち上がる。

〈埋土〉 黒色・黒褐色シルト層が主体で、4層に分けられる。

〈出土遺物〉 なし。

〈遺構時期〉 不明。

〈備考〉 7・8号土坑と埋土主体層が近似している。

[7号土坑]

〈出土位置〉 6 B 9グリッドに位置する。

〈検出面〉 II層。

〈規模・平面形〉 規模は0.82m×0.74m、深さ0.16mで、平面形は円形を呈する。

〈底面・壁〉 底面はほぼ平坦で、壁は外傾して立ち上がる。

〈埋土〉 黒色シルト層が主体で、2層に分けられる。

〈出土遺物〉 なし。

〈遺構時期〉 不明。

〈備考〉 6・8号土坑と埋土主体層が近似している。

[8号土坑]

〈出土位置〉 6 B 9・14グリッドに位置する。

〈検出面〉 II層。

〈規模・平面形〉 規模は1.18m×1.14m、深さ0.26mで、平面形は円形を呈する。

〈底面・壁〉 底面は傾斜している部分が見られるもののほぼ平坦である。壁は外傾して立ち上がる。

〈埋土〉 黒色シルト層が主体で、3層に分けられる。

〈出土遺物〉 なし。

〈遺構時期〉 不明。

〈備考〉 6・7号土坑と埋土主体層が近似している。

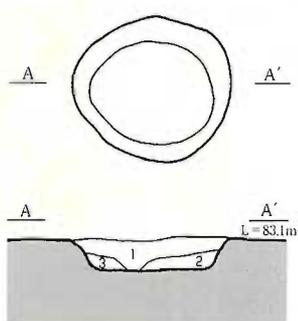
[9号土坑]

〈出土位置〉 6 B 19・24グリッドに位置する。

〈検出面〉 II層。

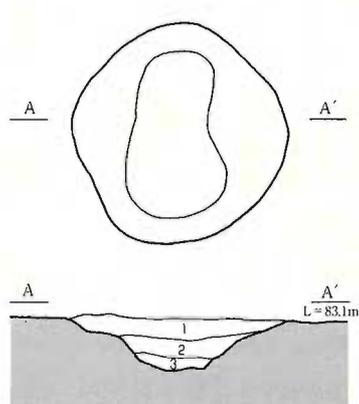
〈規模・平面形〉 規模は1.16m×0.8m、深さ0.29mで、平面形は楕円形を呈する。

〈底面・壁〉 底面は比較的平坦で、壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。



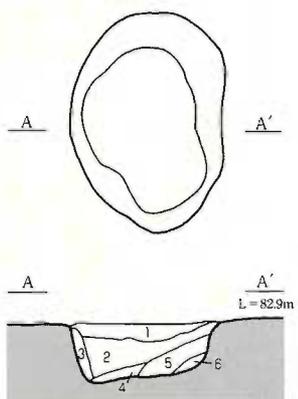
7号土坑

1. 黒色シルト層 (10YR2/1) 粘性やや強く、しまり強い。
直径1～3mmの炭化粒を微量含む。地山崩落土を少量含む。
2. 黒褐色シルト層 (10YR3/2) 粘性強く、しまりやや強い。



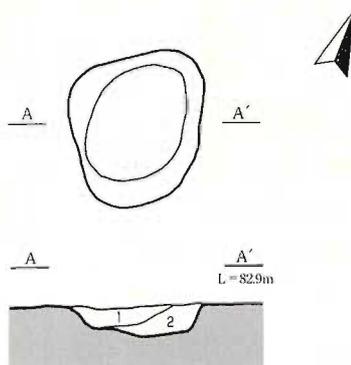
8号土坑

1. 黒色シルト層 (10YR2/1) 粘性やや強く、しまり強い。
直径1mmの前後の白色粒子を多く、直径1～3mmの炭化粒を微量含む。
2. 黒褐色シルト層 (10YR3/2) 粘性しまり共に強い。上下の中間的な層。
3. 黒褐色シルト層 (10YR3/2) 粘性やや強く、しまり強い。



9号土坑

1. 黒色シルト層 (7.5YR2/1) 粘性やや強く、しまり強い。
2. 黒色シルト層 (10YR2/1) 粘性やや強く、しまり強い。
直径3～5mmの炭化粒を微量含む。
3. 黒褐色シルト層 (10YR2/2) 粘性強く、しまり並。
4. 暗褐色粘土質シルト層 (10YR3/4) 粘性、しまり共にやや強い。
地山崩落土をやや多く含む。
5. 暗褐色粘土質シルト層 (10YR3/4) 粘性、しまり共にやや強い。
地山崩落土をやや多く含む。
6. 褐色シルト層 (10YR4/4) 粘性並、しまりやや強い。地山崩落土。



10号土坑

1. 黒褐色シルト層 (10YR3/1) 粘性並、しまりやや強い。
地山崩落土が本層下部に多く見られる。
2. 暗褐色シルト層 (10YR3/3) 粘性、しまり共にやや強い。



第24図 7・8・9・10土坑

〈埋土〉黒色・暗褐色シルト層主体で、6層に分けられる。

〈出土遺物〉なし。

〈遺構時期〉不明。

[10号土坑]

〈出土位置〉6 B24グリッドに位置する。

〈検出面〉Ⅱ層。

〈規模・平面形〉規模は0.89m×0.74m、深さ0.15mで、平面形は不整形円形を呈する。

〈底面・壁〉底面は比較的平坦で、壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。

〈埋土〉黒・暗褐色シルト層主体で、2層に分けられる。

〈出土遺物〉なし。

〈遺構時期〉不明。

3. 近世の遺構と遺物

[1号掘立柱建物]

〈位置〉 4 D10・15・20、4 E16グリッドに位置する。

〈検出面〉 II層。

〈平面形式〉 プランは調査区外に延びていくため不明だが、確認できた桁行1303cm×梁行363cmの長方形を呈する。建物の空間は2つに分割されていたと思われる。

〈建物方位〉 N-25°-W。

〈柱間寸法〉 6尺（181cm）を基準としている。

〈出土遺物〉 なし。

〈遺構の性格〉 母屋と思われる。

〈遺構時期〉 4号掘立柱建物と埋土主体層が同じであることから近世である。

〈備考〉 他の建物との新旧関係は不明である。

[2号掘立柱建物]

〈位置〉 4 D10・15・20、4 E16グリッドに位置する。

〈検出面〉 II層。

〈平面形式〉 プランは調査区外に延びていくため不明だが、確認できたプランは桁行1436cm×梁行574cmの長方形を呈する。建物の空間は3つに分割されていたと思われる。

〈建物方位〉 N-25°-W。

〈柱間寸法〉 6尺（181cm）を基準としている。

〈出土遺物〉 なし

〈遺構の性格〉 母屋と思われる。

〈遺構時期〉 4号掘立柱建物と埋土主体層が同じであることから近世である。

〈備考〉 他の建物との新旧関係は不明である。

[3号掘立柱建物]

〈位置〉 4 D10・15・20、4 E16グリッドに位置する。

〈検出面〉 II層。

〈平面形式〉 プランは調査区外に延びていくため不明だが、確認できたプランは桁行1485cm×梁行227cmの長方形を呈する。建物の空間は3つに分割されていたと思われる。

〈建物方位〉 N-25°-W。

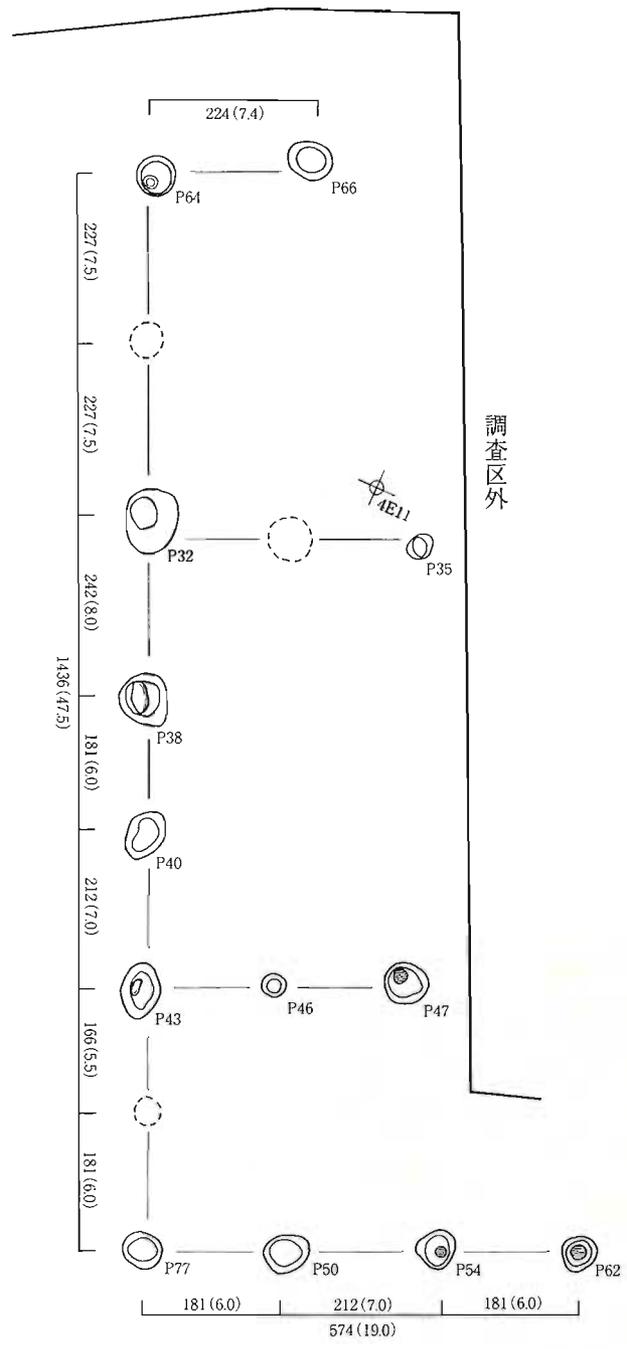
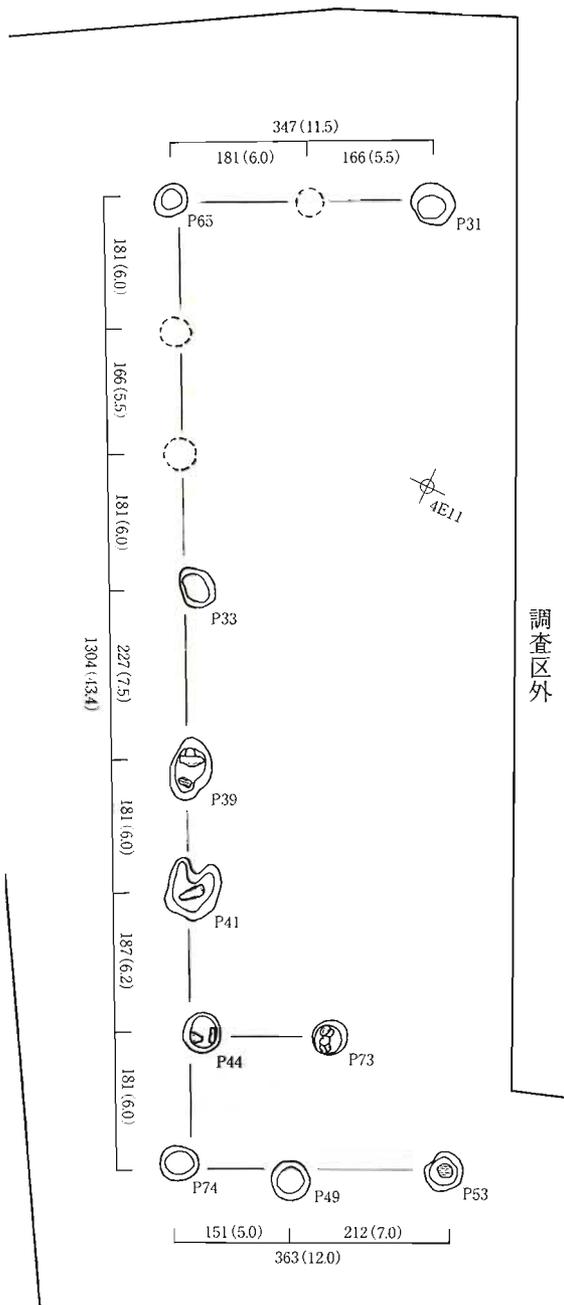
〈柱間寸法〉 6尺（181cm）を基準としている。

〈出土遺物〉 なし

〈遺構の性格〉 母屋と思われる。

〈遺構時期〉 4号掘立柱建物と埋土主体層が同じであることから近世である。

〈備考〉 4号建物より新しいが、他の建物との新旧関係は不明である。



1号掘立柱建物

柱穴No	長軸	短軸	深さ	標高(m)
31	62	55	32	82.61
33	60	50	70	82.24
39	85	55	19	82.6
41	85	68	34	82.47
44	56	47	22	82.41
49	53	52	22	82.4
53	54	50	48	82.19
65	49	41	35	82.61
73	48	48	28	82.39
74	53	47	-	-

2号掘立柱建物

柱穴No	長軸	短軸	深さ	標高(m)
32	90	70	42	82.53
35	38	32	14	82.82
38	75	65	37	82.46
40	70	52	39	82.36
43	73	49	43	82.21
46	33	29	24	82.42
47	60	55	34	82.34
50	45	42	21	82.41
54	54	50	35	82.3
62	52	46	15	82.43
64	54	51	31	83.65
66	53	50	24	82.7
77	55	50	21	82.42



第26図 1・2号近世掘立柱建物

[4号掘立柱建物]

〈位置〉 4 D10・15・20、4 E16グリッドに位置する。

〈検出面〉 II層。

〈平面形式〉 プランは調査区外に延びていくため不明だが、確認できたプランは桁行1587cm×梁行382cmの長方形を呈する。建物の空間は2つに分類されていたと思われる。

〈建物方位〉 N-25°-W。

〈柱間寸法〉 6.5尺（196cm）を基準としている。

〈出土遺物〉 図面掲載できなかったが、近世陶磁器が出土している。

〈遺構の性格〉 母屋と思われる。

〈遺構時期〉 柱穴から近世陶磁器が出土していることから、近世に属するものと思われる。

〈備考〉 3号建物より古いが、1・2号建物との新旧関係は不明である。

[1号水路]

〈出土位置〉 4 E18・23グリッドに位置する。

〈検出面・検出状況〉 II層。遺構検出段階で木製の杭や樋が確認できたことから、遺構と判断し精査を行う。

〈規模〉 検出長7.07m、上端0.54~1.35m、下端0.12~0.57mである。

〈平面形〉 上端・下端はほぼ平行し真っ直ぐ延びていくが、調査区南側で上下端共に若干広がる。

〈樋〉 板材は断面がV字形を呈するように設置され、長軸約0.8mある。

〈主軸方位〉 N-27°-W。

〈埋土〉 暗・黒褐色シルト層が主体で、2層に分層される。

〈出土遺物〉 なし。

〈遺構時期〉 近世に属する。

〈備考〉 遺構時期は、掘立柱建物を構成する柱穴や2号土坑と同じ埋土主体層から、同時期と判断した。また、本遺構は細長い丸材を水路の枠として使用し、その後に樋を設置している。遺構の上・下端の比高差から北から南に流れていたと考えられる。

[2号水路]

〈出土位置〉 4 D13・18グリッドに位置する。

〈検出面・検出状況〉 II層。旧河道内において、本時期の遺構検出面で本遺構の存在に気づかずに重機で地山まで掘り下げを行ったため、調査区断面のみに本遺構の存在を確認するに至った。

〈規模〉 検出長3.37m、上端0.34m、下端0.17mである。

〈平面形〉 平面形は不明だが、南北の両断面から判断すると、ほぼ同じ幅で存在していたと思われる。

〈樋〉 木製の樋は、断面はU字形ないし凹形を呈し、削り抜かれて作られている。

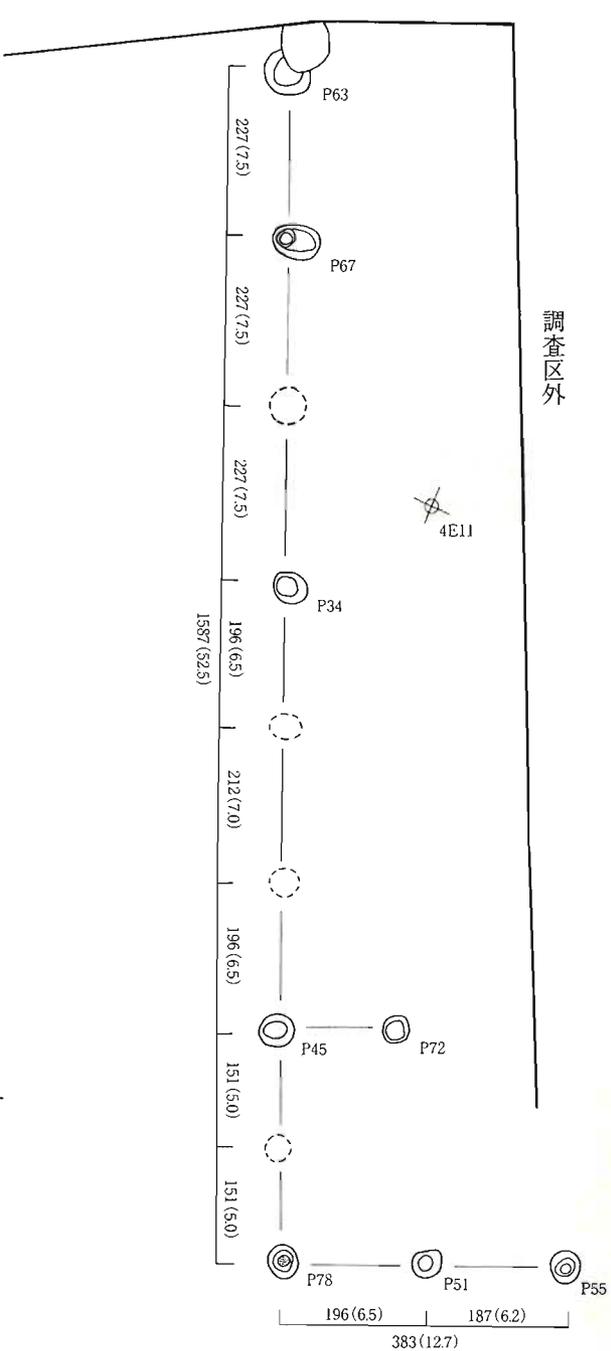
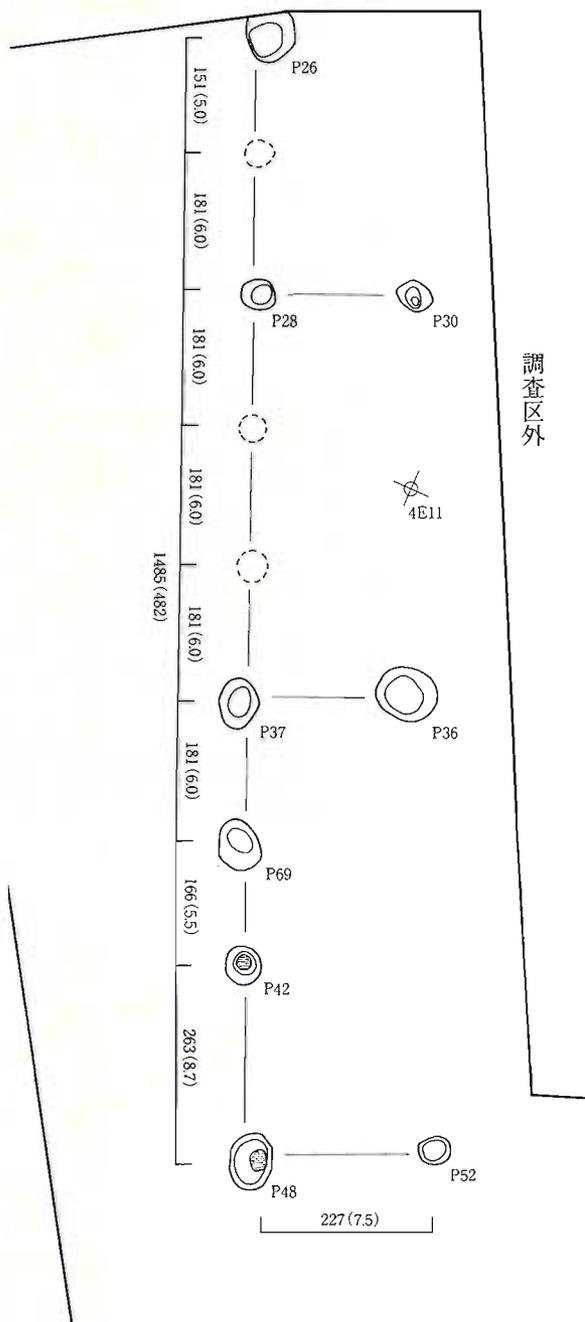
〈主軸方位〉 N-55°-W。

〈埋土〉 水路の埋土と掘り方の埋土との区別ができなかったため、今回のような単一層となった。

〈出土遺物〉 なし。

〈遺構時期〉 不明。

〈備考〉 遺構時期は不明としたが、遺構検出面等から中世~近世に相当すると思われる。



3号掘立柱建物

柱穴No	長軸	短軸	深さ	標高(m)
26	73		50	82.43
28	48	43	45	82.51
30	48	37	46	82.48
36	81	70	49	82.35
37	65	55	66	82.15
48	77	58	36	82.35
42	53	50	23	82.44
52	42	38	29	82.37
69	70	53	58	82.13

4号掘立柱建物

柱穴No	長軸	短軸	深さ	標高(m)
34	50	40	56	82.68
45	49	43	27	82.38
51	60	53	22	82.36
55	44	40	26	82.34
63	66	35	40	82.53
67	65	45	30	82.66
72	40	34	26	82.4
78	36	36	33	82.38



第27図 3・4号近世掘立柱建物

[1号土坑]

〈出土位置〉 4 E15・16・21・22グリッドに位置する。

〈検出面・検出状況〉Ⅱ層。検出状況は地山より若干暗味と粘性が増した範囲が広がりを見せたことから、遺構として判断し精査に取りかかる。

〈規模・平面形〉規模は上端3.33m×3.01m・中端2.31m×2.29m・下端1.98m×1.97m、深さ0.45mである。平面形は円形を呈する。遺構中央に竹で編まれた1.91m×1.83mの規模を持つ桶枠が存在している。

〈底面・壁〉砂礫層との境に形成された底面は、平坦である。壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。

〈埋土〉暗・黒褐色シルト層主体で、12層に分層される。

〈出土遺物〉銭貨と木製品が出土している。53は寛永通宝（新寛永）で、54は桶材、55はえぶりである。

〈遺構時期〉遺物の所属時期から近世に属する。

〈備考〉遺構の性格は不明であるが、埋土の堆積状況からトイレ状遺構の可能性はある。

[2号土坑]

〈出土位置〉 4 E20グリッドに位置する。

〈検出面・検出状況〉Ⅱ層。検出状況は地山より若干暗味と粘質が増した部分が広がりを見せたことから、遺構として判断した。

〈規模・平面形〉規模は5.47m×1.81m、深さ0.32mで、平面形は楕円形を呈する。

〈底面・壁〉壁は底面から緩やかに外傾しながら立ち上がる。

〈埋土〉暗赤褐色シルト層が主体で、2層に分層される。

〈出土遺物〉近世陶磁器と木製品が出土している。56～60は肥前産磁器である。61は漆器椀、62は桶の底板、63は木槌である。

〈遺構時期〉遺物の所属時期から近世に属すると考えられる。

〈備考〉遺構の性格は不明である。

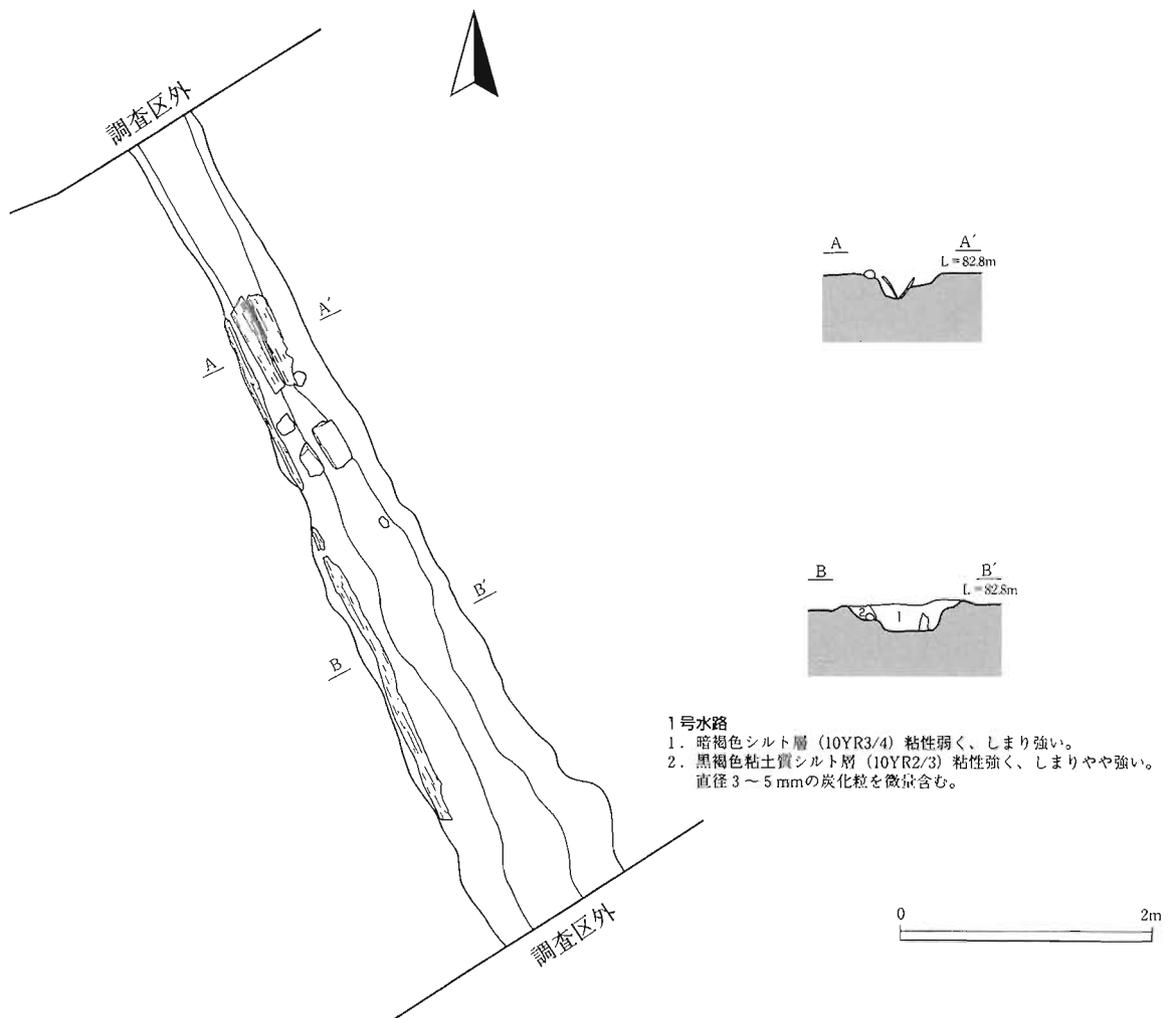
[柱穴]

掘立柱建物に成り得なかった柱穴をここでは扱う。5 D18グリッド付近で検出されたP56～61・P79～82は、近世掘立柱建物を構成する柱穴と埋土主体層が同じであることから所属時期を断定している。また、これらの中にも柱材が残存していることから建物を構成すると思われるが、その中心は調査区外にあるため、無理に建物を構築していない。

また、P1～25は、遺物が伴わず埋土主体層からも判断できなかったことから時期不明とした。また、建物等を構成することはできなかった。

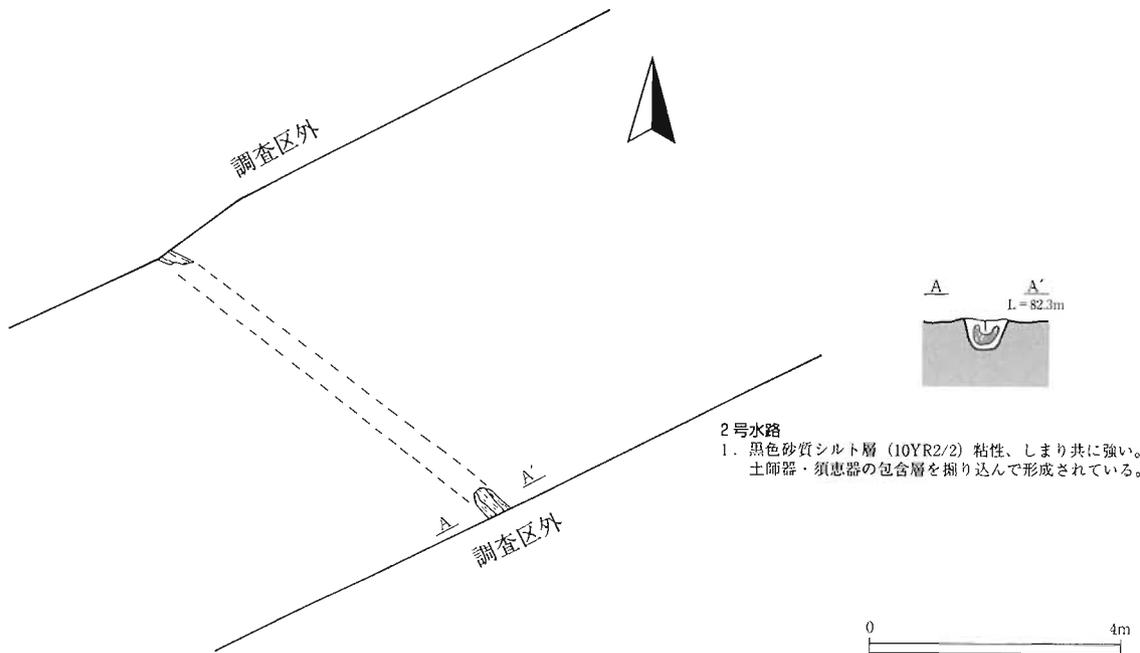
[遺構外遺物]

遺構外からは土師器や近世陶磁器などが出土しているが、土師器は磨滅し掲載不可能なことから、近世陶磁器のみ掲載した。64・66～69は肥前産で、皿、碗、小坏などがある。65・73・79は大堀相馬産の碗である。75は京・信楽産の碗である。70・78は在地産で、70は皿、78は壺である。



1号水路

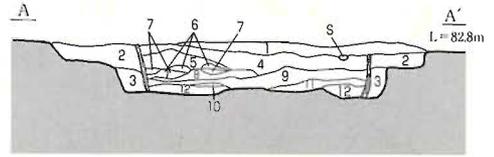
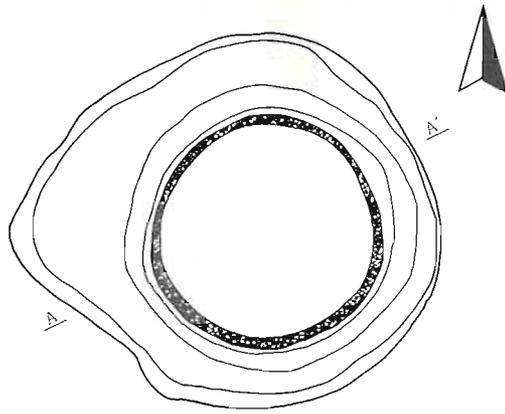
1. 暗褐色シルト層 (10YR3/4) 粘性弱く、しまり強い。
2. 黒褐色粘土質シルト層 (10YR2/3) 粘性強く、しまりやや強い。
直径3～5mmの炭化粒を微量含む。



2号水路

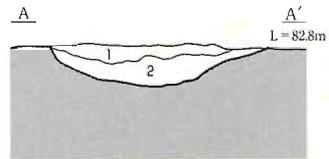
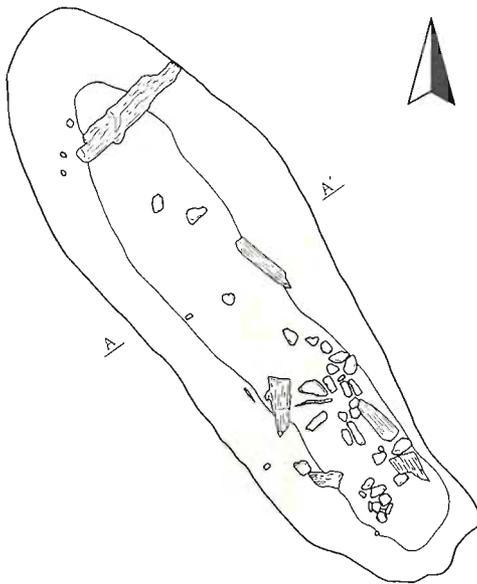
1. 黒色砂質シルト層 (10YR2/2) 粘性、しまり共に強い。
土師器・須恵器の包含層を掘り込んで形成されている。

第28図 1・2号水路跡



1号土坑

1. 黒褐色シルト層 (10YR2/2) 粘性弱く、しまり強い。
2. 暗褐色粘土質シルト層 (10YR3/4) 粘性やや強く、しまり強い。
3. 黒褐色粘土層 (10YR3/2) 粘性強く、しまりやや強い。
4. 暗褐色シルト層 (7.5YR3/4) 粘性、しまり共に強い。
5. 4層に近いが、若干粘性増す。また、直径1~5mmの炭化粒混入。
6. 黒色シルト層 (10YR1.7/1) 粘性、しまり共に弱い。
7. 褐色シルト層 (10YR4/4) 粘性強く、しまりやや強い。
8. 4層と9層の中間的な層。
9. 黒色シルト層 (10YR2/2) 粘性強く、しまりやや強い。
10. 11層と類似。
11. 黒褐色シルト層 (10YR3/1) 粘性強く、しまりやや強い。
12. 黒褐色シルト層 (10YR3/2) 粘性強く、しまりやや強い。

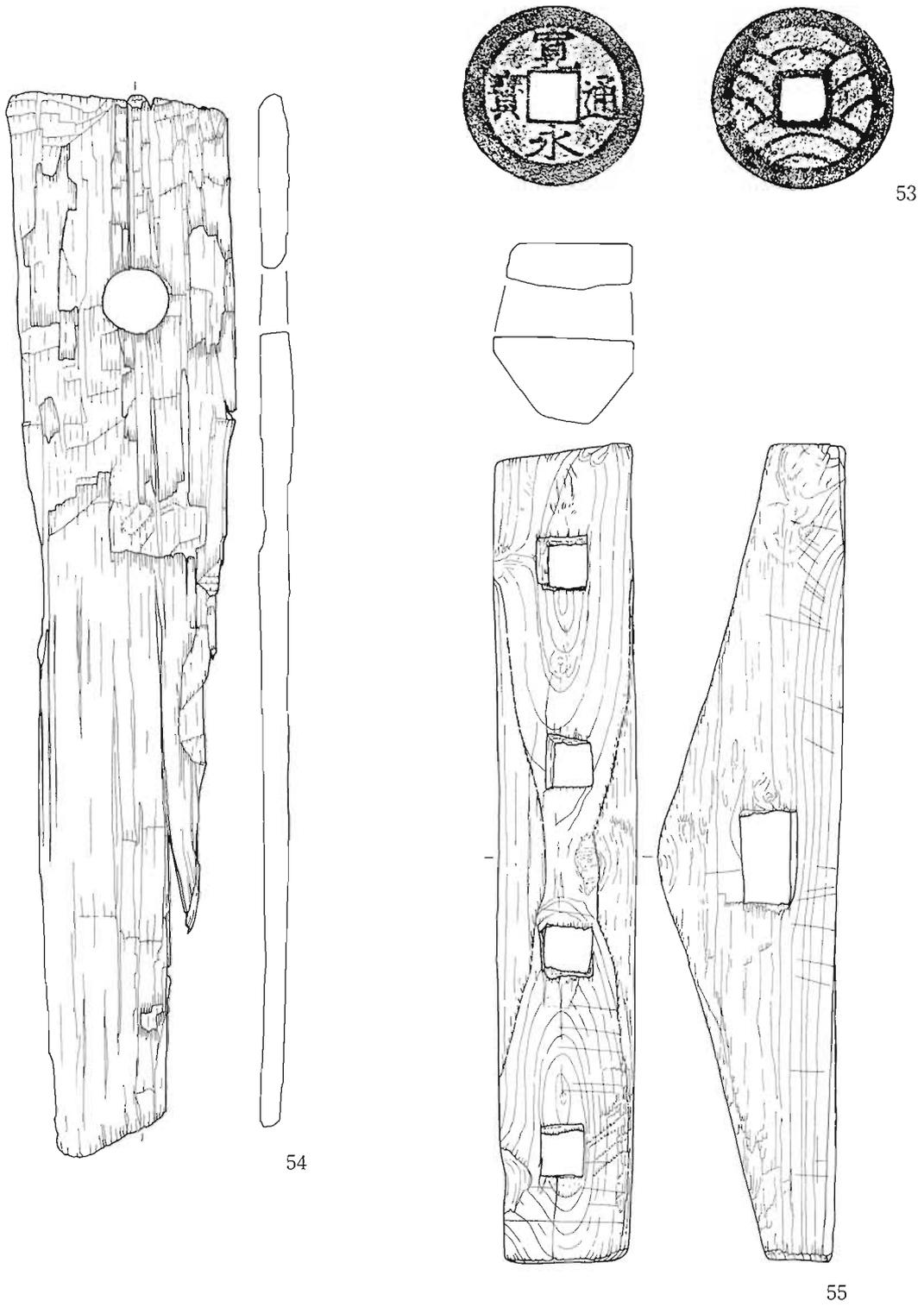


2号土坑

1. 暗赤灰色シルト層 (2.5YR3/1) 粘性やや強く、しまり強い。
2. 暗赤灰色シルト層 (2.5YR3/1) 粘性、しまり共にやや強い。
地山崩落土含む。



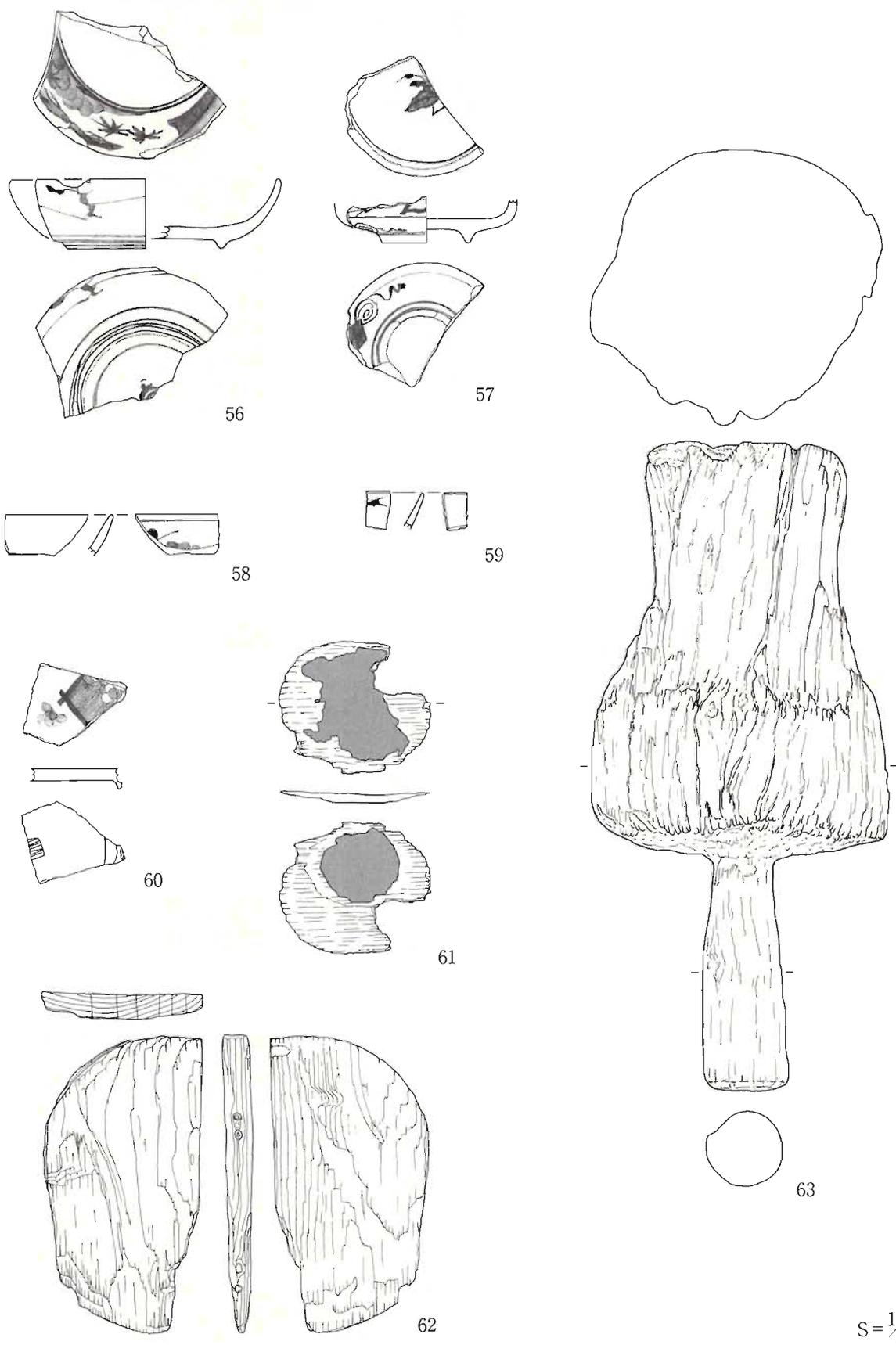
第29図 1・2号土坑



53 $S = \frac{1}{1}$

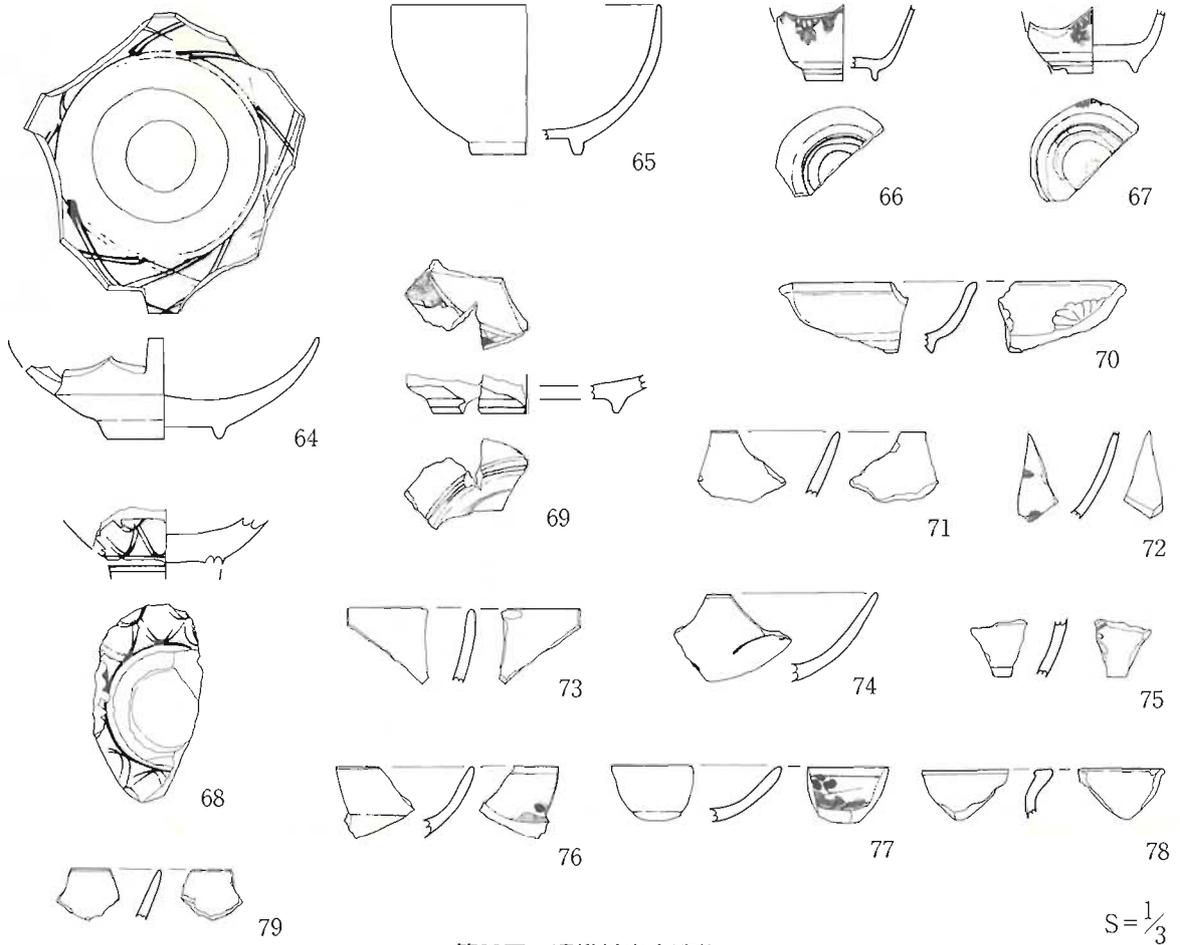
54 · 55 $S = \frac{1}{3}$

第30图 1·2号土坑出土遗物(1)



第31图 1·2号土坑出土遗物(2)

S=1/3



第32圖 遺構外出土遺物

柱穴番号	出土位置	長軸	短軸	深さ	標高(m)	形状	付属遺構	時期	その他
1	4 B 18	60	45	33	82.72	不整楕円形	-	不明	
2	5 B 2	65	47	49	82.56	楕円形	-	不明	
3	-	-	-	-	-	-	-	不明	
4	4 B 25	23	22	20	83.08	方形	-	不明	
5	4 B 24	90	48	12	83.13	楕円形	-	不明	
6	4 B 24	43	37	14	83.14	不整円形	-	不明	
7	4 B 25	51	32	-	-	楕円形	-	不明	
8	4 B 25	42	35	21	83.07	楕円形	-	不明	
9	4 B 25	46	42	18	83.09	不整円形	-	不明	
10	4 B 25	42	32	19	83.06	不整楕円形	-	不明	
11	4 C 21	50	40	35	82.9	方形	-	不明	
12	5 C 1	45	27	15	83.13	楕円形	-	不明	
13	5 B 5	32	29	15	83.14	不整楕円形	-	不明	
14	4 C 21	48	37	10	83.15	不整楕円形	-	不明	
15	4 C 21	47	36	12	83.1	不整楕円形	-	不明	
16	4 C 16	41	40	21	83.0	方形	-	不明	
17	4 C 16	33	33	32	82.89	方形	-	不明	
18	4 C 21	39	30	23	82.99	不整楕円形	-	不明	
19	4 C 21	47	42	29	82.94	不整方形	-	不明	
20	4 C 17	46	33	22	82.96	不整楕円形	-	不明	
21	4 C 17	39	31	12	83.05	不整楕円形	-	不明	
22	4 C 22	30	23	13	83.02	楕円形	-	不明	
23	4 C 18	36	36	-	-	不整円形	-	不明	
24	4 C 24	38	28	16	82.95	不整楕円形	-	不明	
25	4 C 24	81	75	20	82.9	不整円形	-	不明	
26	3 E 10	73		50	82.43	?	3号建物	近世	
27	3 E 10	74	67	46	82.5	不整円形		近世	柱材
28	3 E 10	48	43	45	82.51	不整円形	3号建物	近世	
29	3 E 10	42	32	67	82.29	楕円形		近世	柱材
30	3 E 10	48	37	46	82.48	楕円形	3号建物	近世	柱材
31	3 E 10	62	55	32	82.61	不整円形	1号建物	近世	
32	3 E 15	90	70	42	82.53	?	2号建物	近世	
33	3 E 15	60	50	70	82.24	方形	1号建物	近世	
34	3 E 15	50	40	56	82.68	?		近世	
35	4 E 11	38	32	14	82.82	楕円形	2号建物	近世	
36	4 E 11	81	70	49	82.35	楕円形	3号建物	近世	
37	3 E 15	65	55	66	82.15	楕円形	3号建物	近世	
38	3 E 15	75	65	37	82.46	?	2号建物	近世	礎石
39	3 E 15	85	55	19	82.6	楕円形	1号建物	近世	柱材・礎石
40	3 E 20	70	52	39	82.36	楕円形	2号建物	近世	
41	3 E 20	85	68	34	82.47	?	1号建物	近世	礎石

第2表 柱穴計測表(1)

柱穴番号	出土位置	長軸	短軸	深さ	標高(m)	形状	付属遺構	時期	その他
42	4 E 16	53	50	23	82.44	円形		近世	柱材
43	4 E 16	73	49	43	82.21	楕円形	2号建物	近世	柱材
44	4 E 16	56	47	22	82.41	楕円形	1号建物	近世	礎石
45	4 E 16	49	43	27	82.38	楕円形	4号建物	近世	
46	4 E 16	33	29	24	82.42	円形	2号建物	近世	
47	4 E 16	60	55	34	82.34	不整円形	2号建物	近世	柱材
48	4 E 16	77	58	36	82.35	楕円形	3号建物	近世	柱材
49	4 E 16	53	52	22	82.4	円形	1号建物	近世	
50	4 E 21	45	42	21	82.41	円形	2号建物	近世	
51	4 E 16	60	53	22	82.36	不整楕円形	4号建物	近世	
52	4 E 16	42	38	29	82.37	円形		近世	柱材
53	4 E 16	54	50	48	82.19	不整円形	1号建物	近世	柱材
54	4 E 17	54	50	35	82.3	不整円形	2号建物	近世	柱材
55	4 E 17	44	40	26	82.34	円形	4号建物	近世	柱材
56	4 E 18	60	50	27	82.36	不整円形		近世	柱材
57	4 E 19	58	57	41	82.2	円形		近世	
58	-	-	-	-		-	-	近世	-
59	4 E 13	80	58	27	82.33	不整円形		近世	礎石
60	4 E 13	56	40	19	82.46	?		近世	
61	4 E 13	75	55	33	82.33	不整円形		近世	柱材
62	4 E 17	52	46	15	82.43	不整円形	2号建物	近世	柱材
63	3 E 10	66	(35)	40	82.53	楕円形	4号建物	近世	
64	3 E 10	54	51	31	82.65	不整円形	2号建物	近世	
65	3 E 10	49	41	35	82.61	楕円形	1号建物	近世	
66	3 E 10	53	50	24	82.7	不整円形	2号建物	近世	
67	3 E 10	65	45	30	82.66	楕円形	4号建物	近世	
68	3 E 15	56	41	35	82.36	楕円形		近世	柱材
69	3 E 20	70	52	58	82.13	不整円形	3号建物	近世	
70	4 E 11	52	(25)	?				近世	
71	4 E 16	45	43	24	82.4	円形		近世	
72	4 E 16	40	34	26	82.4	楕円形	4号建物	近世	
73	4 E 16	48	48	28	82.39	円形	1号建物	近世	礎石
74	4 E 16	53	47	?		円形	1号建物	近世	
75	4 E 16	56	46	10	82.54	楕円形	3号建物	近世	
76	4 E 16	56	51	34	82.31	円形	3号建物	近世	
77	4 E 21	55	50	21	82.42	楕円形	2号建物	近世	
78	4 E 21	36	36	33	82.38	円形	4号建物	近世	柱材
79	4 E 18	55	50	26	82.39	円形		近世	
80	4 E 18	55	45	35	82.28	不整円形		近世	
81	4 E 19	57	55	16	82.44	円形		近世	礎石
82	4 E 18	60	60	17	82.49	円形		近世	

第3表 柱穴計測表(2)

観測番号	登録番号	種類	器種	部位	出土位置	口径	底径	器高	外面調整	内面調整	底部	残存度	色調	焼成	胎土	備考
1	1	土師器	坏	口~底部	1号住居床直	(14.4)	5.4	5.3	ロクロナデ	ミガキ・内黒処理	糸切り・再調整	ほぼ完形	にぶい黄褐色	良	細砂粒多	底部は回転糸切り
2	4	土師器	坏	体~底部	1号住居床上層	-	(6.0)	(2.9)	ロクロナデ	ミガキ・内黒処理	磨減により不明	1/6残存	にぶい黄褐色	良	細砂粒多	酸化焙焼成
3	5	須恵器	坏	口~体部	1号住居カマド	(13.8)	-	(2.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	-	-	灰	良	細砂粒多	
4	3	土師器	甕	口~体部	1号住居カマド	(24.0)	-	(7.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	-	1/8残存	浅黄褐色	やや良	細・粗砂粒多	
5	2	土師器	甕	体~底部	1号住居カマド	-	-	(23.9)	ロクロナデ・ヘラケズリ	ハケ	-	1/2残存	浅黄褐色	やや良	細・粗砂粒多	体部は袖の芯材、底部は脚部に転用
6	7	須恵器	甕	体部	1号住居カマド	-	-	-	-	-	-	-	灰	良	細砂粒多	内面にハケ
7	6	須恵器	甕	体部	1号住居床直	-	-	(3.3)	タタキ	-	-	-	灰	良	細砂粒多	外に自然釉、内面にハケ
8	8	須恵器	甕	体部	1号住居床直	-	-	(3.0)	タタキ	-	-	-	灰	良	細砂粒多	外に自然釉
9	9	土師器	坏	口~底部	2号住居床直	13.8	5.5	4.8	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り・再調整	完形	橙	やや良	細・粗砂粒多	酸化焙焼成、底部は磨減激しい
10	10	土師器	坏	口~底部	2号住居床直	(13.2)	5.2	(4.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り・再調整	1/3残存	浅黄褐色	やや良	細砂粒多	酸化焙焼成
11	12	土師器	坏	体~底部	2号住居カマド	-	(5.3)	(1.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り・再調整	2/3残存	橙	やや良	細・粗砂粒多	酸化焙焼成、底部は磨減激しい
12	11	土師器	甕	口~体部	2号住居カマド	(16.0)	-	(6.8)	ロクロナデ	ロクロナデ・ハケ	-	1/8残存	橙	やや良	細・粗砂粒多	
13	13	須恵器	甕	体部	2号住居カマド	-	-	(5.5)	タタキ	-	-	-	灰	良	細砂粒多	糸切り痕も残っている状態。
14	14	土師器	坏	口~底部	4号住居床直	13.7	6.8	4.5	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り・再調整	2/3残存	にぶい橙	やや良	細・粗砂粒多	酸化焙焼成
15	15	土師器	坏	口~底部	4号住居床直	14.6	7.4	4.9	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り・再調整	2/3残存	橙	良	細砂粒多	酸化焙焼成
16	16	土師器	坏	口~底部	5号住居床直	(15.0)	6.0	4.8	ロクロナデ	ミガキ・内黒処理	ヘラ切り・再調整	1/4残存	浅黄褐色	良	細砂粒多	酸化焙焼成
17	17	須恵器	坏	口~底部	5号住居床直	(11.4)	(5.8)	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り・再調整	1/8残存	灰	良	細砂粒多	周りのみ再調整
18	19	土師器	坏	口~底部	6号住居床直	(14.0)	6.0	4.8	ロクロナデ	ミガキ・内黒処理	糸切り・再調整	1/4残存	にぶい橙	良	細・粗砂粒多	糸切り・再調整
19	18	土師器	坏	口~底部	6号住居床直	(14.1)	4.7	4.8	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り・再調整	2/3残存	橙	良	細砂粒多	
20	20	土師器	坏	体~底部	6号住居床直	-	4.8	(2.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り・再調整	1/2残存	にぶい橙	良	細砂粒多	酸化焙焼成
21	23	土師器	坏	口~体部	6号住居床上層	(15.2)	-	(4.4)	ロクロナデ	ミガキ・内黒処理	-	1/6残存	にぶい橙	良	細砂粒多	
22	24	須恵器	坏	体~底部	6号住居床上層	-	(7.0)	(3.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り・	1/8残存	灰	良	細砂粒多	
23	29	土師器	坏	体~底部	9号住居床直	-	(6.0)	(4.7)	ロクロナデ	ミガキ・内黒処理	糸切り・再調整	1/4残存	にぶい橙	良	細砂粒多	
24	32	土師器	坏	体~底部	9号住居床直	-	6.0	(2.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り・再調整	1/4残存	橙	良	細砂粒多	酸化焙焼成
25	33	土師器	坏	体~底部	9号住居床直	-	(6.0)	(2.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り・再調整	1/8残存	橙	やや良	細・粗砂粒多	酸化焙焼成、底部は磨減激しい
26	31	土師器	甕	体~底部	9号住居床直	-	(8.0)	(4.0)	ヘラケズリ	ロクロナデ	-	1/6残存	浅黄褐色	やや良	細・粗砂粒多	
27	34	土師器	甕	底部	9号住居床直	-	(8.0)	(1.5)	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り・再調整	1/8残存	浅黄褐色	やや良	細・粗砂粒多	酸化焙焼成、底部は磨減激しい
28	36	土師器	甕	体部	9号住居床直	-	-	(5.4)	ナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ	-	-	橙	やや良	細・粗砂粒多	
29	28	土師器	甕	底部	9号住居床直	-	(9.5)	(2.7)	ヘラケズリ	ヘラナデ	-	2/3残存	橙	やや良	細・粗砂粒多	
30	42	須恵器	甕	底部	9号住居床直	-	(5.4)	(0.8)	-	ロクロナデ	ヘラ切り・再調整	1/4残存	褐色	良	細砂粒多	
31	26	土師器	甕	口~体部	9号住居床直	(24.0)	-	(8.7)	ロクロナデ	ロクロナデ	-	1/6残存	にぶい橙	やや良	細・粗砂粒多	
32	27	須恵器	高台坏	口~底部	9号住居床直	(14.7)	(6.5)	(6.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	-	1/3残存	灰白	良	細・粗砂粒多	
33	30	須恵器	坏	口~体部	9号住居床直	(16.0)	-	(5.1)	ロクロナデ	ロクロナデ	-	1/6残存	にぶい褐色	良	細砂粒多	
34	35	須恵器	坏	底部	9号住居床直	-	(6.0)	(1.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	糸切り・再調整	1/10残存	灰	良	細・粗砂粒多	糸切り痕も残っている状態。
35	38	須恵器	甕	体部	9号住居床直	-	-	(6.4)	タタキ	アテグ	-	-	にぶい黄褐色	良	細砂粒多	内面に剥落あり
36	40	須恵器	甕	体部	9号住居床直	-	-	(4.8)	タタキ	アテグ	-	-	灰	良	細砂粒多	外面に自然釉
37	39	須恵器	甕	体部	9号住居床直	-	-	(6.2)	タタキ	アテグ	-	-	灰	良	細砂粒多	外面に剥落あり
38	45	須恵器	甕	体部	9号住居床直	-	-	(4.0)	タタキ	アテグ	-	-	灰	良	細砂粒多	外面に自然釉
39	37	須恵器	甕	体部	9号住居床直	-	-	(9.4)	タタキ	アテグ	-	-	外オリーブ黒	良	細砂粒多	内面灰色、外面に自然釉
40	41	須恵器	甕	体部	9号住居床直	-	-	(4.4)	タタキ	-	-	-	暗緑灰	良	細砂粒多	内外面に自然釉
41	44	須恵器	甕	体部	9号住居床直	-	-	(6.5)	タタキ	-	-	-	黄灰	良	細砂多・粗砂少	外面に剥落あり、内面ハケ
42	43	須恵器	甕	体部	9号住居床直	-	-	(4.8)	タタキ	-	-	-	灰白	良	細砂粒多	
43	50	須恵器	甕	頭~体部	1号水路埋土	-	(16.2)	(28.0)	タタキ	-	-	1/3残存	灰白	良	細砂粒多	
44	57	須恵器	甕	体部	1号溝埋土	-	-	(3.2)	タタキ	アテグ	-	-	灰	良	細砂粒多	
45	58	須恵器	甕	体部	1号溝埋土	-	-	(2.5)	タタキ	-	-	-	灰	良	細砂粒多	内面に剥落あり
46	56	須恵器	甕	体部	1号溝埋土	-	-	(3.2)	タタキ	アテグ	-	-	灰	良	細砂粒多	
47	54	須恵器	甕	体部	1号溝埋土	-	-	(4.0)	タタキ	-	-	-	にぶい橙	やや不良	細砂粒多	内外面に剥落あり
48	55	須恵器	甕	体部	1号溝埋土	-	-	(3.2)	タタキ	-	-	-	にぶい橙	やや不良	細砂粒多	内面に剥落あり、54と同一個体
49	49	須恵器	甕	体部	1号土坑埋土	-	-	(5.4)	タタキ	-	-	-	灰	良	細砂粒多	
50	48	須恵器	坏	体~底部	1号土坑埋土	-	(6.4)	(1.2)	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り・再調整	1/7残存	暗緑灰	良	細砂粒多	
51	47	須恵器	坏	体~底部	1号土坑埋土	-	(6.4)	(1.4)	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り・再調整	1/6残存	浅黄褐色	良	細砂粒多	
52	46	土師器	坏	体部	1号土坑埋土	-	6.6	(1.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	ヘラ切り・再調整	1/2残存	橙	良	細砂粒多	

第4表 遺物観察表(1)

遺物番号	登録番号	種類	器種	出土位置	重さ	備考							
53	81	銭貨	寛永通宝	近世1号土坑埋土									
	登録番号	種類	器種	出土位置	長さ	幅	厚さ	備考					
54	84	木製農具	桶・樽	近世1号土坑埋土	49.6	10.2	1.5						
55	85	木製農具	えぶり	近世1号土坑埋土	38.1	6.4	5.4						
遺物番号	登録番号	種類	器種	出土位置	口径	底径	器高	胎土	文様	製作地	製作年代	備考	
56	66	磁器染付	皿	近世2号土坑埋土	(13.7)	3.5	8.0	白色	松竹梅文	肥前	IV期		
57	67	磁器染付	皿	近世2号土坑埋土	-	(4.5)	(2.4)	灰白色	草花文	肥前	IV期		
58	68	磁器染付	皿	近世2号土坑埋土	-	-	(1.7)	白色	梅樹文	肥前	IV～V期		
59	69	磁器染付	碗	近世2号土坑埋土	-	-	(1.8)	白色	不明	肥前	?		
60	71	磁器染付	皿	近世2号土坑埋土	-	-	(1.1)	白色	梅樹文	肥前	III期		
	登録番号	種類	器種	出土位置	口径	底径	器高	備考					
61	83	木製農具	碗	近世2号土坑埋土	7.7	4.0	0.5						
	登録番号	種類	器種	出土位置	長さ	幅	厚さ	備考					
62	82	木製農具	底	近世2号土坑埋土	15.2	8.9	1.6						
63	86	木製農具	桶	近世2号土坑埋土	33	15.3	14.1						
遺物番号	登録番号	種類	器種	出土位置	口径	底径	器高	胎土	文様	製作地	製作年代	備考	
64	73	磁器染付	皿	4 E16・21-Ⅱ層	(12.5)	4.6	4.0	灰白色	斜格子文	肥前	IV～V期		
65	74	磁器	碗	4 E16・21-Ⅱ層	(10.6)	(4.2)	6.0	灰色		大堀相馬	18世紀末～19世紀初		
66	75	磁器染付	猪口	4 E16・21-Ⅱ層	-	(3.0)	(3.0)	白色	草花文	肥前	IV期		
67	70	磁器染付	猪口	P55埋土	-	-	(2.6)	白色	草花文	肥前	IV期		
68	59	磁器染付	碗	3 G11-Ⅱ層	-	-	(2.8)	灰白色	二重網目文	肥前	IV期		
69	63	磁器染付	碗	3 G11-Ⅱ層	-	(7.5)	(1.5)	白色	不明	肥前	IV～V期		
70	76	磁器	小皿	4 E16・21-Ⅱ層	-	-	(2.9)	灰色		在地産	?		
71	72	磁器	碗	4 E16・21-Ⅱ層	-	-	(2.5)	灰色		肥前	?		
72	80	磁器染付	碗	4 E16・21-Ⅱ層	-	-	(3.4)	灰色	梅花文?	肥前	IV期		
73	77	磁器	碗	4 E16・21-Ⅱ層	-	-	(3.0)	灰色		大堀相馬	18世紀末～19世紀初		
74	60	磁器	碗	3 G11-Ⅱ層	-	-	(3.5)	白色	不明	肥前	IV～V期		
75	79	磁器	碗	4 E16・21-Ⅱ層	-	-	(2.3)	灰褐色		京信楽	?		
76	62	磁器	碗	3 G11-Ⅱ層	-	-	(2.9)	白色	梅花文?	肥前	IV期		
77	61	磁器染付	皿	3 G11-Ⅱ層	-	-	(2.2)	白色	梅樹文	肥前	IV期		
78	64	磁器	壺	3 G11-Ⅱ層	-	-	(2.0)	灰褐色		在地産	?		
79	65	磁器	碗	3 G11-Ⅱ層	-	-	(2.0)	灰色		大堀相馬	18世紀末～19世紀初		

第5表 遺物観察表(2)

第5章 ま と め

1. 平安時代

1. 遺構

遺跡が立地していた当該期の地形は、北上川に向かって南東方向に張り出した緩やかに傾斜する段丘面の中央に旧河道が存在し、その両岸に2つの舌状地が形成されていたと考えられる。当該期の遺構はこの双方の舌状地に存在しており、おそらくそれらの中央部に集落の中心部が形成されているものと思われる。

今回の調査は、その各段丘の縁辺部のみ行い、集落の一部を発掘したにすぎないが、集落の構成要素を少なからず把握する事ができた。まず、所属時期を特定できた住居や水路についてまとめていきたい。

竪穴住居

竪穴住居は、後世により削平を受け、調査区外に延びていくため不明な点が多い。確認できた所属時期や主軸方位などの各要素を比較した結果、差異や傾向を抽出することはできなかったが、以下にその項目ごとにまとめておく。(以下竪穴住居を住居とし、床面積の(○)括弧は残存値を示している。)

	平面形	床面積	所属時期	主軸方位	備 考
1号住居	方 形	7.25㎡・8.73㎡	9世紀後半	N-90°-S	建て替え
2号住居	隅丸方形	(3.62㎡)	9世紀後半	N-180°-S	
4号住居	方 形	13.97㎡	9世紀後半	N-25°-S	焼失住居
5号住居	方 形	(8.34㎡)	9世紀後半	N-40~120°-S?	
6号住居	隅丸方形	11.12㎡	10世紀初頭	N-65°-S	
8号住居	隅丸方形	(10.53㎡)	9~10世紀	不明	
9号住居	方 形	(4.74㎡)	9世紀後半	N-55°-S	

1号水路・1号溝・旧河道

1号水路は、底面より0.35~0.4m上に樋が存在し、主軸方位はN-55°-Wのものである。所属時期は9世紀後半で、周辺にある住居と同時期である。水路として用いられていた以前は、樋と底面との間に堆積した層から水性堆積であると思われることから、溝として利用されていたものと考えられ、年代の上限はおそらく9世紀前半に位置づけるのが妥当と思われる。また、年代の下限は十和田a降下火山灰が堆積した10世紀前半で、廃絶された状態にあったと考えられる。このことは分析結果でも同様の結果が得られている(P66参照)。水路として機能していた時期は、9世紀後半とするのが妥当と思われる。

調査区が設定されている場所は段丘の縁の頂頭部にあたり、南北方向に落ちていくような地理的な環境であったことと、検出した樋の標高に差がわずかにしか認められなかったことなどから、調査段階ではどちらの方向に水が流れていったのか判断できなかった。しかし、水路掘り方の下端の標高差はわずかに南壁の方が標高が低いことから判断すると、旧河道と同様、南東方向に流れる排水機能を持っていたものと考えられる。

1号溝は、主軸方位はN-113°-Sで、9世紀後半に所属すると思われる。断面より水性堆積を判断させ

る材料が得られなかったことから、区割りのな役割を果たしていたと考えられる。

旧河道は、平安期の底面は現遺構検出面と約1.5mの比高差、当該期には1mの比高差を持つ。調査区が狭いことから主軸方位について把握することはできないが、近世の2号溝の存在と現地形に旧河道と若干入り込む谷部の地形に流れていたとするとN-40~55°-Wと思われる。

以上のことから、それらが所属していた9世紀後半におけるそれぞれの関係について軸線方向から検討したい。旧河道と1号水路はほぼ平行した軸線方向を持つもので、1号溝は旧河道にはほぼ直交するものと捉えられる。この検出された遺構から遺跡が立地している段丘と合わせてみると、旧河道を中心として段丘は東西に分断され、西側ではさらに東西を二分するように水路があり、東側では南北を二分するように溝が存在している。この成果から現時点で旧河道を中心として段丘は4分割されていたことが窺える。

2. 遺物

ここでは8号住居以外の各住居で得られた土師器・坏を中心とした土器の分類を行う。完形のものはいくつか、まとめることで特徴を抽出したい。

土師器・坏は計16点出土しているが、すべて酸化焰焼成のものである。それらはロクロ成形のみの坏（10点）と内面黒色処理された坏（6点）に分けられ、以下のように細分できる。

内面黒色処理された坏・ロクロ成形のみの坏

・体部がやや膨らみながら立ち上がる。・・・①

・体部が直線的に立ち上がる。・・・・・・②

①・② ┌ 口縁が外傾するもの・・・回転糸切り-再調整有無・ヘラ切り-再調整有
└ 口縁が直線的なもの・・・回転糸切り-再調整有無・ヘラ切り-再調整有

土師器・甕は本遺跡から出土した点数は少なく、分類は不可能であったため、出土した甕の特徴のみ抽出しておく。それらはロクロ成形で、大型と小型が存在している。口縁は外傾するものと外傾させ口唇部を上へに摘み出すものがある。調整は底部を中心にケズリを行うものと頸部まで行うものがある。

須恵器は、坏と高台付坏が計8点出土している。体部は直線的に立ち上がりを見せ、底部は回転糸切り1点以外は再調整されている。

最後に上述した土師器・坏を中心とした所属時期の把握を行う。土師器・坏の内面黒色処理されたものとされていないものがあった。体部は膨らみながら立ち上がるものと直線的に立ち上がるものに分けられる。底部は糸切りやヘラ切り後に再調整が行われているものがあることは先述したが、その底径は平均5.85cmあり、8割以上が再調整されている。各住居で見ると体部の立ち上がりでは変化は見られないものの、底部では6号住居のみ5cm以下の底径を持ち、回転糸切りと再調整の両者が存在している。

これらから、土器の大半は9世紀後半の範疇で捉えられるが、6号住居出土の土器は10世紀初頭に位置づけられる（高橋1982・八木1992・伊藤1990）。

また、分類した土器を各住居と併せて考えてみたが、各住居での差異は抽出されなかった。

2. 近世

1. 遺構

掘立柱建物

調査区中央グリッド付近で4棟検出したが、すべての建物が調査区外に延びていくため全容は不明である。この建物は、確認できた範囲では長方形を呈し、主軸方位はN-25°-Wと同じである。2号掘立柱建物が6間×3間以外は、5間×2間の同規模のものである。遺構時期は、切り合い関係から4号掘立柱建物が古く、3号掘立柱建物が新しい。ただしその他の新旧は不明である。これらの建物は、基本的に建て替えを複数回行われた結果によるものと考えられる。

水路

掘立柱建物を挟むように東西で水路2条を検出した。共に調査区外に延びていくため、全容は不明である。

1号水路は掘立柱建物群の東側、ほぼ平行するように設定されている。板材を部分的に断面をV字形に合わせた木製樋が確認されている。主軸方位はN-27°-Wである。

2号水路は所属時期を不明としたが、1号建物と同様木製の樋が検出されていることから、近世建物と関係性があるものと判断したためここで扱う。掘立柱建物群の西側、旧河道上に設定されている。刳り抜き式で断面U字形の木製樋が調査区の両端で確認されている。主軸方位はN-55°-Wである。旧河道が従来の排水機能を果たさなくなったため、旧河道部分に作られたものと考えられる。使用された2本の時期差は遺物や埋土主体層からは明確に出来なかった。

これらの両水路の機能は、おそらく排水の役割を果たしていたと思われる。

土坑

1・2号土坑共に所属時期は、掘立柱建物と同時期のものと捉えた。両遺構共に性格は、掘立柱建物周辺に存在する遺構との関係と埋土の状況から、1号土坑は埋土状況からトイレ状遺構の可能性が高く、2号土坑は不明とした。両遺構から検出された木製品などの保存状況や埋土の堆積状況から、何らかの形で水を使用した遺構の可能性が高いと思われる。今後このような建物との配置の類例が増加することで明らかになることを期待したい。

2. 遺物

近世陶磁器と木製品が出土している。近世陶磁器に関しては、大半が遺構外からの出土であり、遺物量も少ない。ここでは生産地と時期だけをまとめておく。まず肥前産磁器に関しては大橋編年を使用し分類を行っている(大橋2001)。肥前産はⅢ～Ⅴ期まで確認され、大半はⅣ期ないしⅣ～Ⅴ期に相当するものが大半を占める。大堀相馬産は18世紀末～19世紀初頭に属し、京・信楽産は不明である。

木製品は点数は少ないものの近世1・2号土坑内から出土している。漆塗りの椀・木槌・えぶり・曲物の底板、桶板の計5点である。

3. まとめ

最後に本遺跡の平安時代・近世の各時期についてまとめておく。

平安時代

本遺跡に見られる集落は、遺物の所属時期から9世紀後半期を中心に成立し、一部10世紀初頭まで存在していたが、この10世紀前半には大半が機能していなかったと考えられる。今回のように、一般的な集落遺跡から排水機能の役割を果たし木製の樋を持つ水路の検出例は県内でも少なく（伊藤1998）、また先述したような集落において水路と溝と旧河道によって排水機能の役割と区画的な役割を果たした例も稀なことから、集落構成を考えていく上で確認された意義は大きいものと思われる。本遺跡が立地していた段丘面上において区割りと住居との関係は得られなかったが、利水を含めて計画的に営まれていたことが想定できる。

このような水路・溝・旧河道を利用した利水方法と区画的利用法と「9世紀後半には胆沢城の地域支配下にあった三郡は白米等の貢納体系が確立していた」（西野1998）というの論考と合わせて考えてみると、本遺跡は、この食料生産地において計画的な集落造りが行われた結果、形成されたものと捉えることができよう。

上記のことから本遺跡の使用時期において比較的平坦な低地が続くこの北上川両岸は、現時点で水田や畑などの遺構等は検出されていないが、現代同様生産基盤の主要な土地で、良好な環境が存在していたことが想定される。これは北上川の低位段丘に遺跡が多いことも関係しているものと思われる。

今後、周辺遺跡の調査事例の増加を待ち、当該期における稗貫郡の果たした役割や集落構造が明らかになるものと期待したい。

近世

今回の調査から、18世紀～19世紀にかけて掘立柱建物とその周辺に機能していた遺構や遺物を確認出来た意義は大きい。調査区が狭く遺構自体が調査区外に延び、その一端しか把握出来なかったのは残念なもの、近世集落研究を進めていくうえで貴重な資料になるものと思われる。

今後、建物以外の遺構やそれを含めた遺構配置の資料が増加していくことで、今回得られた資料の基本的構造が明らかにされるものと思われる。

〔引用・参考文献〕

- 伊藤博幸 1980 「胆沢城と古代村落－自然村落と計画村落－」 『日本史研究』 215
- 伊藤博幸 1990 「陸奥国における黒色土師器－その展開と終焉－」 『東国土器研究』 第3号
- 伊藤博幸 1997 「律令期村落の基礎研究－胆沢城周辺の平安期集落－」 『岩手史学研究』 80
- 伊藤博幸 1998 「岩手県」 『治水・利水を考える』 福島県考古学会
- 井上雅孝 1996 「岩手県における古代末期から中世前期の土器様相（素描）」 中近世土器の基礎研究 XI
- 伊藤博幸 1990 「陸奥国における黒色土師器－その展開と終焉」 東国土器研究第3号
- 高橋信雄 1982 『岩手の土器』 岩手県立博物館
- 西野 修 1998 「北上盆地北部の様相」 第24回古代城柵官衙遺跡検討会資料集
- 八木光則 1992 「古代斯波郡と爾薩体の土器様相」 第18回古代城柵官衙遺跡検討会資料集

- 小泉和子 1999 『道具と暮らしの江戸時代』 吉川弘文館
- 大橋康二 2001 「北海道・東北地方出土の肥前陶磁」 『国内出土の肥前陶磁』 九州近世陶磁学会
- 大橋康二 2001 『肥前陶磁』 ニューサイエンス社
- 関根達人 1998 「相馬藩における近世窯業生産の展開」 東北大学埋蔵文化財調査年報10
- 九州近世陶磁学会『国内出土の肥前陶磁』 九州近世陶磁学会
- 高橋與右衛門 1990 「岩手県における中世末から近世の遺跡の概要」 『中世末から近世のまち・むらと都市』 第27回 埋蔵文化財研究集会
- 第7回 東日本埋蔵文化財研究会 1998 『治水・利水を考える』
- 草野和夫 1992 『近世民家成立過程』 中央公論美術出版
- 福島県考古学会 2000 『東北地方南部における中近世集落の諸問題』

分 析 鑑 定

1. 石鳥谷町島岡Ⅱ遺跡出土材の樹種

高橋利彦（木工舎「ゆい」）

1. 試料

試料は材10点（No.1、2 a、2 b、3～6、8～10）と炭化材2点（No.11、12）の計12点である。No.1～8は近世のものとされる土坑・水路・柱穴から、No.9～12は平安時代のものとしてされる水路と竪穴住居跡からそれぞれ検出されたものである（表1参照）。

遺跡は北上川右岸の河岸段丘縁（標高約82m）に立地している。平安時代と近世の複合遺跡で、平安時代のいくつかの竪穴住居跡の埋土からは十和田 a 降下火山灰が確認されている。また、平安時代頃には調査区中央に沢が流れていたことが明らかになっている。

2. 方法

同定には、調査担当者の立ち会いのもとで筆者が遺物から採取した材片を用いた。材試料は、剃刀の刃を用い、木口（横断面）・柁目（放射断面）・板目（接線断面）3面の徒手切片を作製し、これをガムクロールで封入したプレパラートを、生物顕微鏡で観察・同定した。炭化材試料は、室内で自然乾燥させたのち、木口・柁目・板目3面の徒手切片プレパラートを作製し生物顕微鏡で観察する方法^{註1)}と、3断面を実体顕微鏡と走査型電子顕微鏡（SEM、加速電圧10kV）で観察する方法を併用して同定した。併せて各分類群1点の顕微鏡写真図版を作成した（図版1-3）。SEM観察にあたっては（株）ニッテツ・ファイン・プロダクツ釜石試験分析センターのご協力をいただいた。記して感謝いたします。作製したプレパラートと残った炭化材片はすべて木工舎「ゆい」に保管されている。

3. 結果

試料は以下の9分類群（ここでは亜科・属・節・種の異なった階級の分類単位を総称している）に同定された。試料の主な解剖学的特徴や一般的な性質は次のようなものである。なお、学名と配列は「日本の野生植物 木本Ⅰ・Ⅱ」（佐竹ほか 1989）にしたがい、県内での自然分布については「岩手県植物誌」（岩手植物の会 1970）を参照した。また、一般的性質などについては「木の事典 第2・4・7・10・16巻」（平井 1979-1982）も参考にした。

・アスナロ（*Thujopsis dolabrata*）ヒノキ科 No.1、2 a

早材部から晩材部への移行は緩やかで、年輪界は明瞭。樹脂細胞はあるが樹脂道はない。放射組織は柔細胞のみよりなる。分野壁孔は小型のヒノキ型（Cupressoid）～スギ型（Taxodioid）で分野当たり1-6個。放射組織は単列、1-15細胞高であるが5細胞高前後のものが多い。

アスナロは本州・四国・九州に自生する日本特産の常緑高木で、時に植栽される。「岩手県植物誌」では、県内に自生するのは変種ヒノキアスナロ（ヒバ）（*T. dolabrata* var. *hondai*）であるとしている。材はやや軽軟で保存性は高い。建築・土木・家具・器具材など各種の用途が知られている。

・アサダ (*Ostrya japonica*) カバノキ科 No.9

散孔材で、管孔は単独または放射方向に2-4個が複合、横断面では楕円形。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列する。放射組織は(同性~)異性、1-4細胞幅、1-30(50)細胞高。柔組織は短接線状。年輪界はやや不明瞭。

アサダは北海道(中南部)から九州に分布する落葉高木である。材は重硬で、割裂性は小さく、加工は困難である。器具・家具・機械・建築材などに用いられ、強度を必要とする用途に適している。

・ブナ属 (*Fagus* sp.) ブナ科 No.3

散孔材で、管孔は単独または複合、横断面では多角形。道管は単穿孔をもつ。放射組織は単列・数細胞高のものから複合組織まである。柔組織は短接線状。変形・劣化が進んでいる。

ブナ属はブナ (*Fagus crenata*) とイヌブナ (*F. japonica*) の2種がある。ブナは北海道南西部(黒松内低地帯以南)・本州・四国・九州に、イヌブナは本州(岩手県以南)・四国・九州の主として太平洋側に分布する。イヌブナの方がブナより低標高地から生育し、またブナのような大群落を作ることはない。ブナは日本の冷温帯落葉樹林を代表する樹木である。材はやや重硬で、強度は大きい加工はそれほど困難ではなく、耐朽性は低い。木地・器具・家具・薪炭材などの用途があったが、最近では各種の用途に用いられている。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus* sp.) ブナ科 No.12

環孔材で孔圏部は1-3列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は横断面では円形~楕円形、小道管は横断面では多角形、ともに単独で配列する。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状となる。放射組織は同性、単列、1-20細胞高のものと複合組織がある。柔組織は短接線状、周囲状。年輪界は明瞭。

コナラ節はコナラ亜属(落葉ナラ類)の中で果実(ドングリ)が開花の年に熟すグループで、カシワ (*Quercus dentata*) ・ミズナラ (*Q. crispula*) ・コナラ (*Q. serrata*) ・ナラガシワ (*Q. aliena*) といくつかの変・品種がある。県内には4種とも自生するが、平地で普通にみられるコナラは樹高20mになる落葉高木で、古くから薪炭材として利用され、植栽されることも多かった。材は重硬で、加工は困難、器具・機械・櫛材などの用途があり、薪炭材としてはクヌギに次ぐ優良材である。

・クリ (*Castanea crenata*) ブナ科 No.5、8

環孔材で孔圏部は1~多列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減しながら火炎状に配列する。大道管は単独、横断面では楕円形~円形、小道管は単独および複合、横断面では角張った楕円形~多角形。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状~網目状となる。放射組織は同性、単(~2)列、1-15細胞高。柔組織は周囲状、短接線状。年輪界は明瞭。

クリは北海道南西部から九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。県内各地に普通にみられる。材はやや重硬で、強度は大きく、耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材、櫛木などに用いられる。

・ケヤキ (*Zelkova serrata*) ニレ科 No.6、11

環孔材で孔圏部は1-2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち漸減し、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。大道管は横断面では円形～楕円形、単独。小道管は横断面では多角形で複合管孔をなす。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-10細胞幅、1-30(60)細胞高で、しばしば結晶を含む。柔組織は周囲状。年輪界は明瞭。

ケヤキは本州・四国・九州の谷沿いの肥沃地などに自生し、また屋敷林や並木として植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きい、加工は困難でなく、耐朽性が高く、木理が美しい。建築・造作・器具・家具・機械・彫刻・薪炭材など各種の用途に用いられ、国産広葉樹材の中で最良のものの一つにあげられる。

・サイカチ (*Gleditsia japonica*) マメ科 No.4

環孔材で孔圏部は多列、孔圏外で管径を減じたのち漸減させ、しだいに塊状に複合する。大道管は管壁は厚く、横断面では円形～楕円形、単独または複合、小道管は管壁は中庸～薄く、横断面では多角形で複合管孔となる。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、内腔にゴム状物質を含む。小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1-15細胞幅、1-100細胞高。柔組織は周囲状～連合翼状。年輪界は明瞭。

サイカチは本州・四国・九州・山野や河原などに自生し、また植栽される落葉高木である。本州北部で見られるものは植栽か逸出とする見解もある。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難、耐朽性は高い。建築・器具・家具・薪炭材などに用いられる。

・ヤマウルシ (*Rhus tricocarpa*) ウルシ科 No.10

やや環孔性を帯びた散孔材で、年輪界付近でかなり管径を減ずる。管孔は横断面では楕円形～多角形で、単独または複合。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1-2細胞幅、1-20細胞高。柔組織は周囲状、散在状。年輪界はやや明瞭。乾燥による収縮と劣化が進んでいる。

ヤマウルシは北海道から九州の山地にごく普通の落葉小高木である。材は小径であるためまとまった用途はないが、薪材や小細工物・杭などの用途も知られる。

・イネ科タケ亜科 (Gramineae subfamily Bambusoideae sp.) No.2 b

中空の桿の基本組織の中に維管束が散在する不斉中心柱をもつ。

タケ亜科(タケ・ササ類)には多数の種が含まれるが、解剖学的特徴のみでは区別できない。

以上の同定結果を検出遺構や推定されている用途とともに一覧表で示す(表1)。

4. 考察

農具とされているもの(No.1)は、4本歯の「備中鋏」に当たるものと思う。柄と歯はなく、それらが入る通し穴が穿たれている。アスナロ製であった。備中鋏は江戸時代後期に、粘湿地の耕起用に開発されたと言われる金鋏であるが、その祖型はすでに弥生時代の木製農具にみられるという(飯沼・堀尾 1976)。試料

表1 島岡Ⅱ遺跡出土材の樹種

試料番号	検出遺構	用途	種名
1	1号近世土坑	農具	アスナロ
2 a	1号近世土坑	底板	アスナロ
2 b	1号近世土坑	木釘	イネ科タケ亜科
3	2号近世土坑	漆塗椀	ブナ属
4	2号近世土坑	槌	サイカチ
5	1号近世水路	槌	クリ
6	2号近世水路	槌	ケヤキ
8	P55柱穴	柱	クリ
9	1号平安水路	槌	アサダ
10	1号平安水路	槌	ヤマウルシ
11	4号住居跡Q2	炭化材	ケヤキ
12	4号住居跡土坑	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節

が備中鋤であるとしても、材質や構造からみて重粘質土壌の耕起に使用できたとは考えにくい。掻き出し作業に用いられたもの（熊手のような使い方）かと思う。なお、遺跡出土の木製鋤・鋤の用材は、国産材の中では最も硬いコナラ属（アカガシ亜属・コナラ亜属コナラ節・コナラ亜属コナラ節）の例が圧倒的多数を占めている（伊東ほか 1987、伊東 1990）。ただ、所属時期は異なるものの、試料と材質の似ているヒノキ属〔兵庫県長腰遺跡出土の古墳時代とされる鋤（嶋倉 1978）など〕や、スギ〔愛知県朝日遺跡出土の弥生時代とされる鋤（高木 1982）や島根県西川津遺跡出土の弥生時代中期とされる鋤（渡辺 1988）など〕の例^{註2）}もわずかながら報告されている（伊東ほか 1987、伊東 1990）。

底板（No.2 a）は発掘調査時には用途不明とされていたものであるが、その形状から、曲物か小型桶類の底板であろうと筆者が判断したものである。全体の半分よりやや大きい面積をもち、（検出されていない）もう1枚の板と矧ぎ合わされて底板をなしていたものであろう。アスナロ製であった。No.2 bは、この矧ぎ合わせのために打ち込まれていた「タケ釘」であった。釘穴は2カ所に2個ずつ認められることから、少なくとも1度は矧ぎ直されているようである。水沢市白井坂Ⅰ遺跡の近代以降のものとしてされる井戸跡からは桶底板（スギ製）の矧ぎ合わせに用いられていたタケ釘（高橋 1996）が、花巻市花巻城三之丸跡出土の17世紀とされる蓋？（ヒノキ属）と曲物底板（スギ）にもタケ釘が用いられていたことが確認されている（高橋 1998）。

ところで、桶の底板の接合にタケ釘が用いられるのは近世以降のこと（室町前期まではすべてが木釘が使用された）とされている（石村 1997）。鎌倉時代以降（成田 1990）、中国大陸から伝来したとされる籠物（結び物）（石村 1997）の職人たちが、タケの扱いに慣れてきたことの表れかと思う。試料が小型桶の底板であればこの見解と合致する。一方、曲物の底板であったとすればどうであろうか。曲物の側板と底板の結合は、古くは樹皮（いわゆる樺皮）で綴じていたものが、木釘・竹釘の使用にかわってきたとされているが（岩井 1994）、底板は基本的には一枚板で作られ、集成材すなわち矧ぎ合わせ板が使われるのは、籠物桶の技法が導入されてからのことであるらしい（石村 1997）。曲物の容量は、側板の幅で規定される容器の高さと、底板（一枚板）の大きさできまる。必然的に容量の大型化には制約がある。これに対して、幅の狭い

板を多数集成して作る側板と、同じく集成材の底板を組み合わせて作る籬物は、板の長さや枚数を変えることでどのような大きさ・容量にも応じることが可能である。籬物の出現によって大型化を迫られた曲物は、底板の集成で対応したとされるが（石村 1997）、そこで用いられていたタケ釘も併せて導入したものであろう。仮に、曲物でタケ釘の使用が先行していたとしても、新技法である籬物にも速やかに導入されたはずで、両者の使用開始時期にはほとんど差がないとみるのが妥当であろう。したがって、試料が曲物の底板であるとしても、これまでの知見と矛盾するものではないと考えている。

漆塗椀はブナ属製であった。県内の遺跡出土品で試料と近い時期とされている漆器では、平泉町志羅山遺跡第25次調査出土の近世～近代とされる椀4点（高橋 1995 a）、同町泉屋遺跡第13・15次調査出土の近世と近世～近代とされる椀・蓋6点（高橋 1997、財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1997 a、b）、湯田町白木野Ⅱ遺跡出土の17～20世紀とされる椀・蓋6点（高橋 1994）、花巻市花巻城三之丸跡出土の17世紀と17～18世紀とされる椀2点（高橋 1998）がいずれもブナ属に同定されている。

桶の用材は近世と平安時代とされる水路からそれぞれ2点ずつ検討されたが、近世試料はクリとケヤキで、木製品などとして用いられることの多い樹種であったのに対して、平安試料はアサダ・ヤマウルシの比較的検出されることの稀な樹種であった。両者の違いの意味するところはわからない。出土報告自体が一部の遺跡からのものに限られ、県内や隣県から類例の報告はないようである（伊東ほか 1987、伊東 1990）。用途は異なるが、東京都紀尾井町遺跡出土の江戸時代の上水道の木桶には、ツガ属・スギ・ヒノキ属のいずれも針葉樹が用いられていた（パリノ・サーヴェイ（株）1988）。

槌はサイカチ製であった。出土報告は稀であり、用材は重硬な広葉樹の例が多いが、針葉樹など軟質材の例も散見される（伊東ほか 1987、伊東 1990）。県内では柳之御所遺跡第31次調査出土の12世紀後半とされるミズキ属製の木槌の例（高橋 1995 b）を知るのみである。ちなみに、上記のように、サイカチの県内での自生を疑問視する見解もある（平井 1982）が、ここでは多数意見（岩手植物の会 1970、佐竹ほか 1989、上野 1991）にしたがっている。

平安時代の焼失住居とされる4号住居跡から検出された炭化材はケヤキとコナラ節に同定されている。この遺構の床面からは多数の炭化材が検出されているが、試料の用途は確定されていない。北上市藤沢遺跡の8～10世紀の住居構築材とみられている炭化材からは、コナラ属コナラ亜属クヌギ節をはじめとして、コナラ節・ケヤキなど11分類群が確認されている（高橋 2001）。その中には強度や耐朽性の期待できない樹種も含まれていることから、今回検討対象とされなかった試料の中にも、そうした軟質材が含まれている可能性もあろう。

注 1) 実体顕微鏡下で3断面を作製し、ここにシアノアクリレート接着剤（商品名アロンアルファ木工用）を塗布、剃刀の刃で切削し切片とする。切片はグリセリンで封入、パラフィンでシールしプレパラートとする。これは従来のセロイジン包埋法とその簡便法とされるアロンアルファを用いた方法（林 1988）を筆者が改良したものである。切削には熟練を要するが、①SEM観察よりはるかに簡便に同定ができる、②観察したプレパラートが保存されるなどの長所がある。一方、透過光で観察するためには通常の材より薄い切片を作製しなければならず（必然的に小さな切片での観察像を集成することになる）、また写真撮影にふさわしいプレパラートを作製することはほとんど望めない、などの欠点もある。

注 2) 手元の資料ではその構造まではわからない。

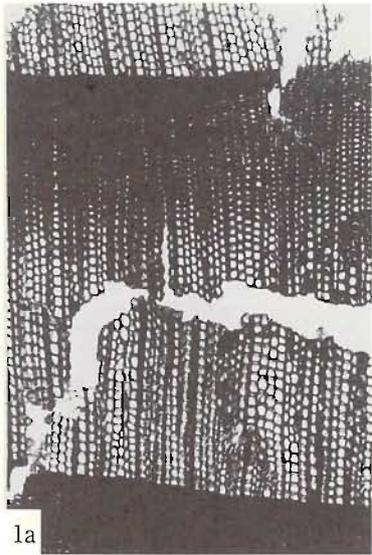
引用文献

- 林 昭三 1988 セロイジン包埋法、「日本の遺跡出土木製品総覧」(島地・伊東 編)、21-23、雄山閣。
- 平井信二 1979-1982 「木の事典 第2・4・7・10・16巻」、かなえ書房。
- 石村真一 1997 「もとの人間の文化史 82-I 桶・樽 I」、法政大学出版社、367pp。
- 伊東隆夫・山口和穂・林 昭三・布谷知夫・島地 謙 1987 日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途、木材研究・資料、第23号、42-210。
- 伊東隆夫 1990 日本の遺跡から出土した木材の樹種とその用途Ⅱ、木材研究・資料、第26号、91-189。
- 岩井宏實 1994 「ものと人間の文化史 75 曲物」、法政大学出版社、310pp。
- 岩手植物の会 1970 「岩手県植物誌」、703pp。
- 成田寿一郎 1990 「日本木工技術史の研究」、法政大学出版社、515pp。
- パリオ・サーヴェイ株式会社 1988 木製品の樹種同定、「東京都千代田区紀尾井町遺跡調査報告書 本文編」、524-534、千代田区紀尾井町遺跡調査会。
- 佐竹義輔・原 寛・亘理俊次・富成忠夫(編) 1989 「日本の野生植物 木本Ⅰ・Ⅱ」、平凡社、321・305pp。
- 嶋倉巳三郎 1978 長腰遺跡から出土した木質遺物の樹種の説明、「兵庫県文化財調査報告書 第12冊 姫路バイパス建設工事に伴う播磨・長腰遺跡 -昭和49・50年度調査報告書- (本文編)」、357-371、兵庫県教育委員会。
- 高橋利彦 1994 湯田町白木野Ⅱ遺跡出土材の樹種、「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第200集 白木野Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡発掘調査報告書 東北横断自動車道秋田線建設関連遺跡発掘調査」、226-237、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター。
- 高橋利彦 1995 a 平泉町志羅山遺跡25次調査出土材の樹種、「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第216集 志羅山遺跡第14・25次発掘調査報告書 一閑遊水地事業関連遺跡発掘調査」、115-118、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター。
- 高橋利彦 1995 b 柳之御所跡第23次・31次調査出土の樹種、「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第228集 柳之御所跡 一閑遊水地・平泉バイパス建設関連第21・23・28・31・36・41次発掘調査 (分冊1 本文・図版)」、423-432、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター。
- 高橋利彦 1996 水沢市白井坂Ⅰ遺跡出土の樹種、「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第248集 白井坂Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書 水沢東バイパス建設事業関連遺跡発掘調査」、331-334、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター。
- 高橋利彦 1997 平泉町泉屋遺跡第15次調査出土材の樹種、「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第247集 泉屋遺跡第10・11・13・15次発掘調査報告書 一閑遊水地事業関連遺跡発掘調査」、401-411、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター。
- 高橋利彦 1998 花巻城三之丸跡出土材の樹種、「花巻市埋蔵文化財調査報告書第18集 花巻城跡 一平成6年度三之丸発掘調査報告書-I」、126-149、花巻教育委員会。
- 高橋利彦 2001 藤沢遺跡出土炭化材の樹種、「北上市埋蔵文化財年報(1999年度)」、21-31、北上市立埋蔵文化財センター。
- 上野雄規(編) 1991 「北本州産高等植物チェックリスト」、東北植物研究会、365pp。
- 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1997 a 木製品、「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第247集 泉屋遺跡第10・11・13・15次発掘調査報告書 一閑遊水地事業関連遺跡発掘調査」、297-301、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター。
- 財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1997 b 木製品、「岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第247集 泉屋遺跡第10・11・13・15次発掘調査報告書 一閑遊水地事業関連遺跡発掘調査」、352-360、(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター。

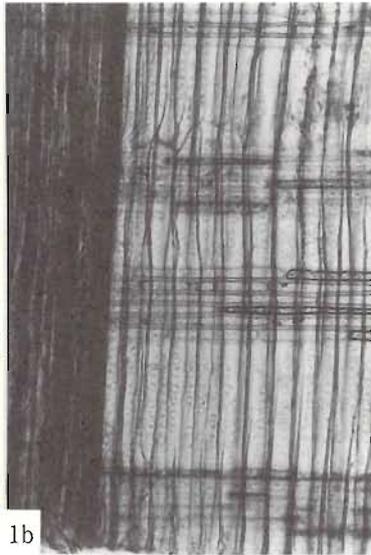
- 図版1 1. アスナロ No.2 a
2. アサダ No.9
3. ブナ属 No.3
- 図版2 4. コナラ属コナラ亜属コナラ節 No.12
5. クリ No.8
6. ケヤキ No.6
- 図版3 7. サイカチ No.4
8. ヤマウルシ No.10
9. イネ科タケ亜科 No.2 b

a : 木口 x40 b : 柾目 x100 c : 板目 x100

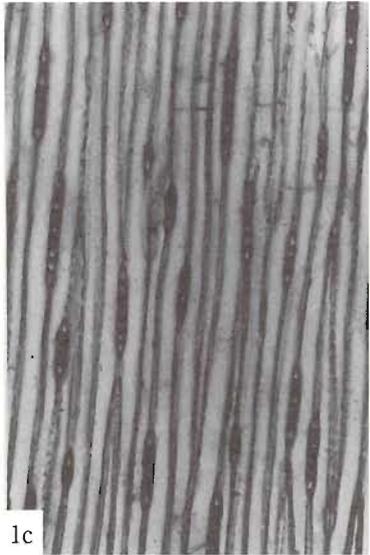
樹木の肥大生長方向は木口では画面下から上へ、柾目では左から右。



1a



1b



1c



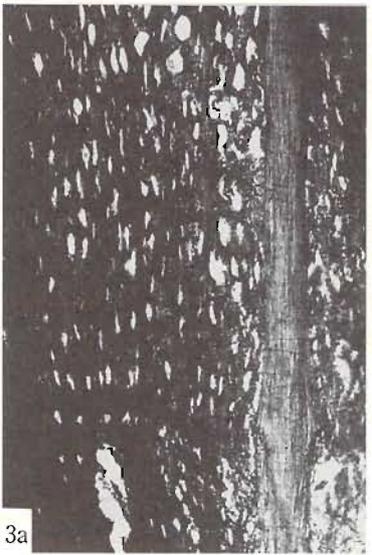
2a



2b



2c



3a

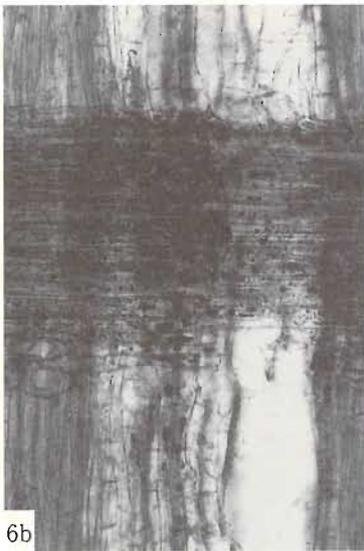
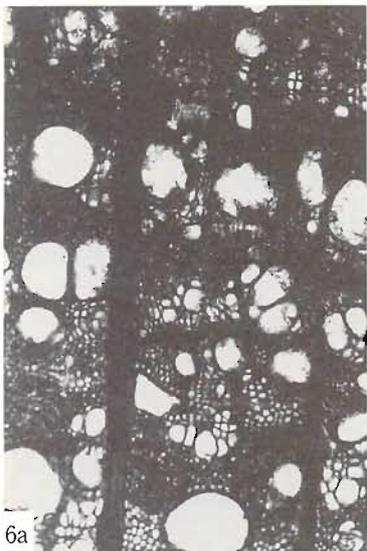
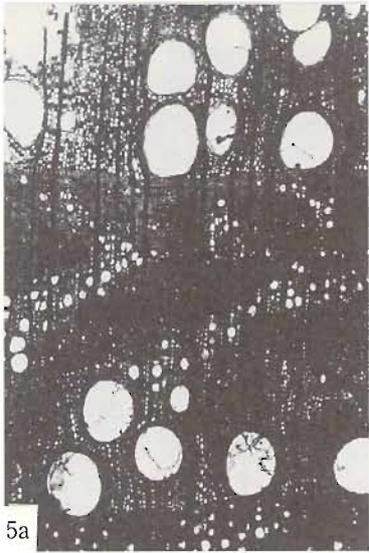
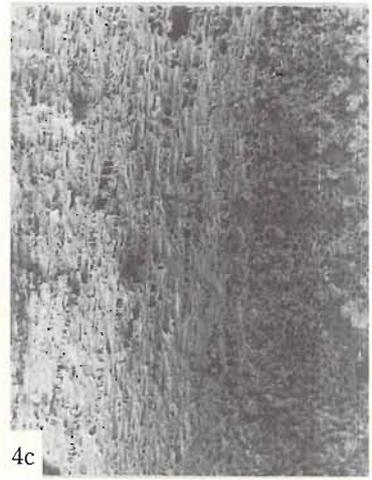


3b

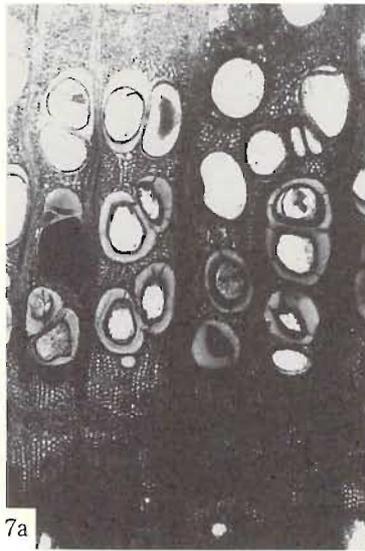


3c

出土材 樹種同定 図版 1



出土材 樹種同定 図版 2



出土材 樹種同定 図版 3

2. 石鳥谷町島岡Ⅱ遺跡のテフラ分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

石鳥谷町に所在する島岡Ⅱ遺跡は、北上川中流域右岸に分布する段丘縁辺部に位置し、標高は約82mである。遺跡の背後に広がる段丘は、渡辺（1991）によりL2面に区分されている。L2面は、北上川右岸に広く分布する扇状地性の河成段丘であるL1面の形成後の下刻期に形成された侵食段丘であると考えられている。なお、L1面の形成年代は約2万年前、L2面の形成年代は約3000年前頃とされている。発掘調査では、平安時代の住居跡や水路、土坑などと江戸時代の掘立柱建物跡や水路、土坑などが検出されている。これらの遺構の時期は、それぞれ伴出する土師器や須恵器および陶磁器などから推定されている。

本報告では、検出された遺構のうち、平安時代とされる水路跡の埋積土より採取された砂質の堆積物が火山灰（テフラ）であるかどうかを検証し、テフラであれば、既存の資料との比較から給源火山と噴出年代を特定し、遺構の年代について考察する。

1. 試料

試料は、調査区西側で検出された1号水路の埋積土より採取された堆積物2点がある。発掘調査所見によれば、1号水路は、長さ8m、幅2m、深さ1.5mであり、南東から北西に延び、底面のやや上部には木が敷かれている。埋積土は、上位より1層から10層まで分層されており、前述の木は埋積土中部よりやや下位の5層と7層の間に確認されている。

試料が採取された層位は、埋積土上部に相当する2層と4層であり、いずれも厚さ数cmの薄層である。ここでは、2点の試料名をそれぞれ2層、4層とする。どちらの試料とも灰黄褐色を呈し、2層はやや砂質のシルト、4層はシルト質の砂である。

2. 分析方法

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。火山ガラスについては、その形態によりバブル型と中間型、軽石型に分類する。各型の形態は、バブル型は薄手平板状あるいは泡のつき目をなす部分であるY字状の高まりを持つもの、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは塊状のもの、軽石型は表面に小気泡を非常に多く持つ塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

屈折率の測定は、古澤（1995）のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。

3. 結果

2層：砂分中には、微量の軽石と少量の火山ガラスが確認された。軽石は、最大径1.2mm程度、粒径の淘汰度は良好である。軽石の色調は白色を呈し、発泡は非常に細かなスポンジ状の発泡をしているものとやや

発泡の不良なものが混在する。火山ガラスは、細砂～極細砂径、無色透明で塊状の軽石型が多く、少量の繊維束状の軽石型とバブル型が含まれる。火山ガラスの屈折率は1,505～1,509（モードは1,506～1,507）である（図1）。

4層：砂分中には、多量の軽石と多量の火山ガラスが確認された。軽石および火山ガラスともに特徴は2層のそれらと全く同様である。ただし、火山ガラスの屈折率は1,505～1,508（モードは1,505～1,507）であった（図2）。

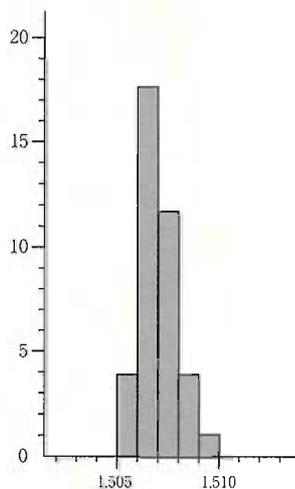


図1 1号水路2層の火山ガラスの屈折率
横軸は屈折率、縦軸は測定個数を表す。

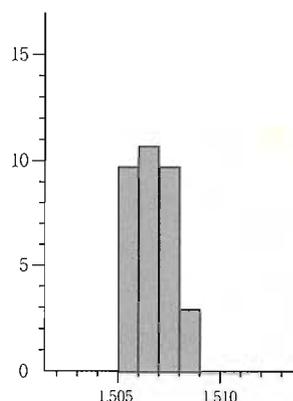


図2 1号水路4層の火山ガラスの屈折率
横軸は屈折率、縦軸は測定個数を表す。

4. 考察

分析結果で述べた軽石および火山ガラスの特徴と高岡Ⅱ遺跡の地理的位置および1号水路の年代観を考慮し、これまでに研究された東北地方におけるテフラの産状（例えば、町田ほか（1981；1984）、Arai et al.（1986）、町田・新井（1992）など）との比較から、今回検出された軽石および火山ガラスは、十和田aテフラ（To-a）に由来すると考えられる。なお、To-aの火山ガラスの屈折率について、Arai et al.（1986）および町田・新井（1992）は1,496～1,504としているが、町田ほか（1981）では北上川沿いの地点におけるTo-aの火山ガラスの中に今回とほぼ同様の値が呈示されている。

軽石と火山ガラスの産状から、4層はおそらくTo-aの降下堆積物である可能性が高く、2層は遺構周囲のTo-aを含んだ碎屑物が流れ込んで堆積したものと考えられる。ここで、To-aの噴出年代については、A.D.915年（町田・新井、1992；早川・小山、1998）とされているから、1号水路は10世紀初頭にはすでに廃棄されて埋積が進行し、窪み程度の痕跡しか残っていない状態であったと考えられる。

引用文献

Arai, F.・Machida, H.・Okumura, K.・Miyuchi, T.・Soda, T.・Yamagata, K.（1986）Catalog for late quaternary marker-tephras in Japan II - Tephros occurring in Northeast Honshu and Hokkaido-. Geographical reports of Tokyo Metropolitan University No. 21, p. 223-250.

古澤 明（1995）火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別. 地質学雑誌, 101, p. 123-133.

早川由紀夫・小山真人（1998）日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日－十和田湖と白頭山－. 火山、43、
p. 403-407.

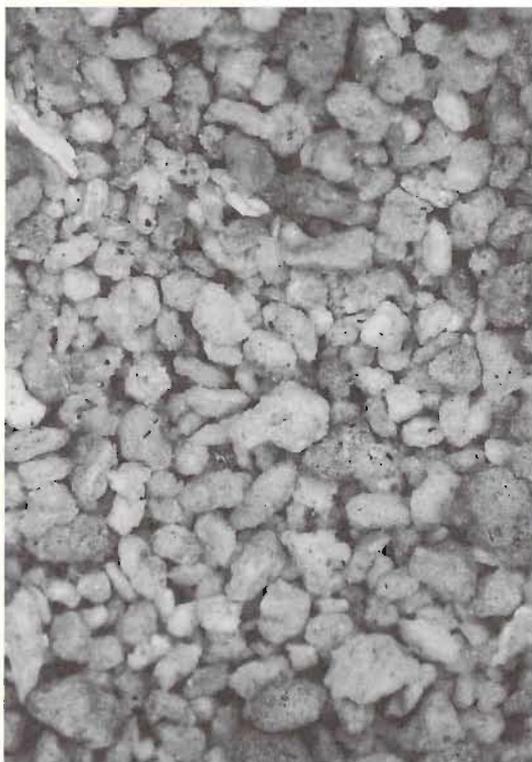
町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス. 276 p.. 東京大学出版会.

町田 洋・新井房夫・森脇 広（1981）日本海を渡ってきたテフラ. 科学、51、 p. 562-569.

町田 洋・新井房夫・杉原重夫・小田静夫・遠藤邦彦（1984）テフラと日本考古学－考古学研究と関連するテフラのカタログ－. 渡辺直
経編「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」、 p. 865-928.

渡辺満久（1991）北上低地帯における河成段丘面の編年および後期更新世における岩屑供給. 第四紀研究、30、 p. 19-42.

図版1 軽石・火山ガラス



3. 石鳥谷町島岡Ⅱ遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

島岡Ⅱ遺跡は、岩手県石鳥谷町に所在し、北上川右岸の河岸段丘縁に立地する。本遺跡の発掘調査では、平安時代と想定される竪穴住居跡・水路、江戸時代と想定される掘立柱建物跡・水路などの遺構が確認され、これらの時代の所産と考えられる土師器や須恵器、陶磁器などの遺物などが確認されている。

今回の分析報告は、本遺跡から検出された4号住居跡の年代に関する情報を得るため、住居跡から出土した炭化材を対象として、放射性炭素年代測定を実施する。また、分析試料である炭化材の由来に関する情報を得るため樹種同定も合わせて実施する。

1. 試料

分析試料は、4号住居跡から出土した炭化材2点である。試料の詳細は表1に記す。

2. 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

測定は、株式会社加速器分析研究所の協力を得た。なお、 $\delta^{13}\text{C}$ の値は質量分析器を用いて試料炭素の ^{13}C 濃度($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$)を測定し、標準試料PDB(白亜紀のベレムナイト類の化石)の測定値を基準として、それからのずれを計算し、千分偏差(‰;パーミル)で表したものである。今回の試料の補正年代は、この値に基づいて補正をした年代である。

(2) 炭化材同定

木口(横断面)・柾目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

3. 結果

(1) 放射性炭素年代測定

4号住居跡から出土した炭化材の測定年代値(補正年代値)は、住居跡から出土した炭化材が約1620年前、土坑内から出土した炭化材が約1480年前の値を示す。

表1 放射性炭素年代測定および炭化材同定結果

遺構名	出土位置	試料の質	樹種	補正年代BP	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	測定年代BP	Code.No.
4号住居	—	炭化材	キハダ	1620±70	-24.3	1610±70	IAA-86
	土坑内	炭化材	コナラ属コナラ亜属コナラ節	1480±80	-23.9	1460±80	IAA-87

1) 年代値の産出には、Libbyの半減期5568年を使用。

2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であることを示す。

(2) 炭化材同定

結果を表1に示す。4号住居跡から出土した炭化材はいずれも広葉樹で、住居跡から出土した炭化材がキハダ、土坑内から出土した炭化材はコナラに同定された。以下に、各種類の主な解剖学的特徴を記す。

・キハダ (*Phellodendron amurense* Ruprecht) ミカン科キハダ属

環孔材で、孔圏部は2～5列、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1～5細胞幅、1～40細胞高。

・コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Lepidobalanus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圏部は1～2列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと同複合放射組織とがある。

4. 考察

島岡Ⅱ遺跡の4号住居跡から出土した炭化材の測定年代値(補正年代値)は、住居跡出土炭化材が4世紀頃、4号住居跡土坑内出土炭化材が5世紀後半に相当する年代であった。分析試料である炭化材は、焼失住居とされる本住居跡内また住居跡内の土坑より出土している。したがって、少なくとも出土位置が明らかな後者の試料については本遺構に共伴する可能性が高く、遺構構築時または使用時の年代を反映していると考えられる。しかし、炭化材の測定年代値は、平安時代の住居跡とする発掘調査時の所見と調和的ではなく、やや古い年代を示している。

ところで、放射性炭素年代は、測定法自体が持つ誤差や、測定的前提条件である大気中の¹⁴Cの濃度が過去において一定ではなかったことなどから、年輪などから測定されたいわゆる暦年代とは一致しない。これらのことから、年輪年代による暦年代既知の年輪についての放射性炭素年代測定を実施することで、暦年代と放射性炭素年代を両軸とする補正曲線が作られている(Stuiver, M. *et al.* 1998)。この補正曲線によれば、補正された暦年代のばらつきが大きい場合がある。今回の測定年代値では、4号住居跡から出土した炭化材の暦年代は放射性炭素年代より約100年新しく、4号住居跡の土坑内から出土した炭化材の暦年代は放射性炭素年代より約160年程度新しくなる可能性がある。

今回の分析結果では、放射性炭素年代測定結果および暦年代による補正年代においても、平安時代より古い年代を示した。今後、これらの分析結果の評価やさらに詳細な年代を特定するためには、同一遺構内でより多くの分析調査を実施するとともに、試料の出土状況や共伴遺物による考古学的所見などと合わせ検証することが望まれる。

引用文献

Stuiver, M., Reimer, P. J., Bard, E., Beck, J. W., Burr, G. S., Hughen, K. A., Kromer, B., McCormac, G., van der Plincht, J. and Spurk, M. (1998) INTCAL98 radiocarbon age calibration, 24,000-0 cal BP. *Radiocarbon*, 40, p.1041-1083.

写 真 图 版



遺跡遠景



完掘状況 (6B15グリッド付近)

写真図版1 遺跡遠景・完掘状況



完掘状況 (4B22グリッド付近)



完掘状況 (4B22グリッド付近)

写真図版 2 完掘状況



完掘状況（4D25グリッド付近）



完掘状況（5E1グリッド付近）

写真図版3 完掘状況



完掘状況 (3G16グリッド付近)



完掘状況 (3G2グリッド付近)

写真図版 4 完掘状況



調 査 風 景



1号竪穴住居 完掘



1号竪穴住居



1号竪穴住居 断面



1号竪穴住居 カマド断面



1号竪穴住居 カマド平面



1号竪穴住居 カマド遺物出土状況

写真図版6 1号竪穴住居



2号竪穴住居



2号竪穴住居 断面



2号竪穴住居 カマド平面

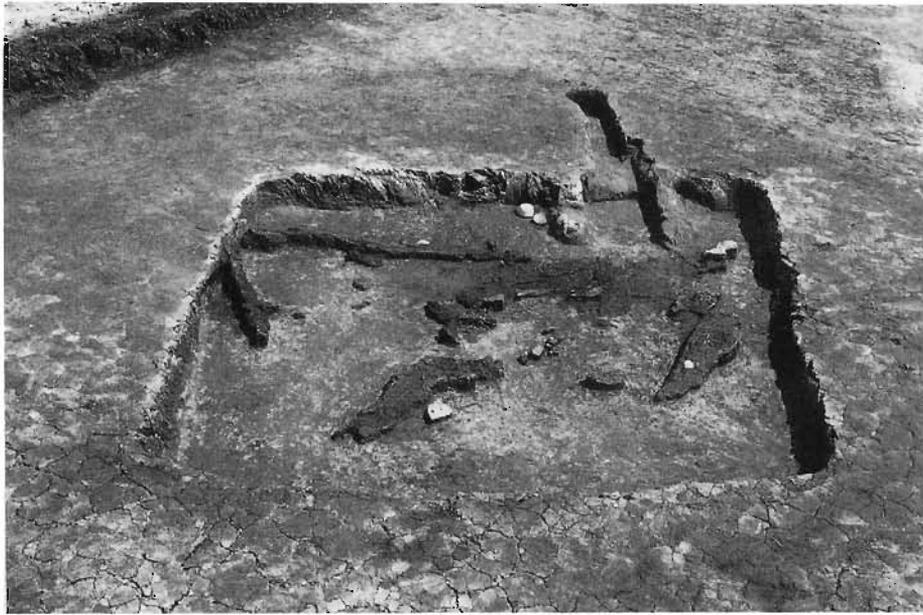


2号竪穴住居 カマド断面

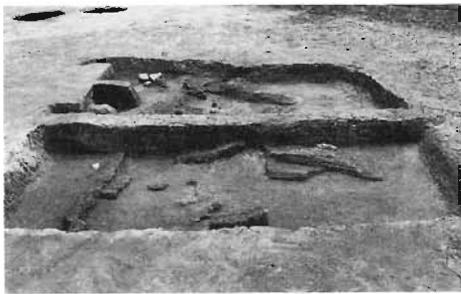


調査風景

写真図版7 2号竪穴住居



4号竖穴住居



4号竖穴住居 断面



4号竖穴住居 カマド



4号竖穴住居 カマド断面



4号竖穴住居 遺物出土状況

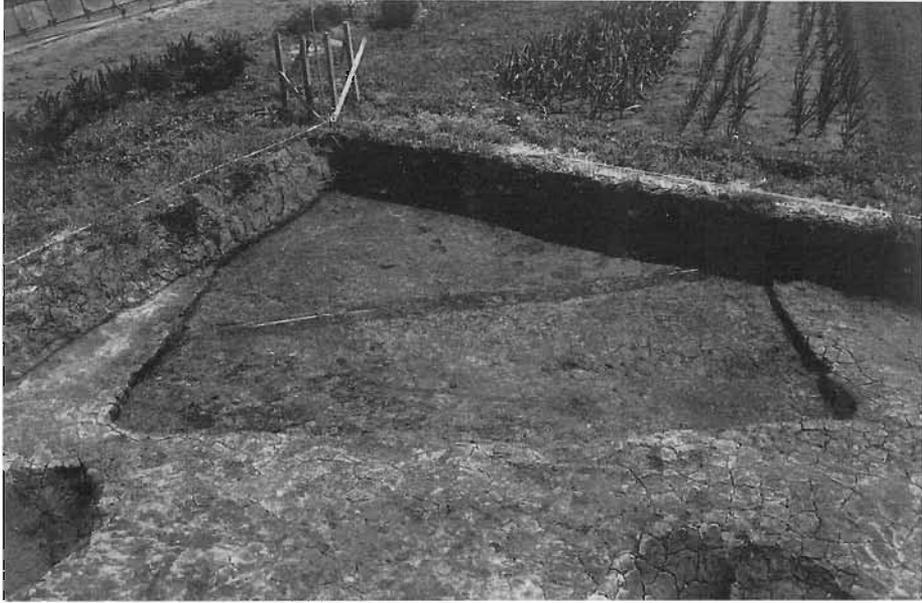
写真図版 8 4号竖穴住居



5号竖穴住居 完掘



6号竖穴住居 完掘



8号竖穴住居 完掘



9号竖穴住居 完掘

写真図版10 8・9号竖穴住居



5号竖穴住居 断面



6号竖穴住居 断面



8号竖穴住居 断面



9号竖穴住居 断面



1号水路 完掘



1号水路 完掘

写真図版11 5・6・8・9号竖穴住居・1号水路



1号水路 断面



1号水路 槌検出状況



1号水路 断面



1号水路 槌検出状況



1号水路 遺物出土状況



1号水路 遺物出土状況



1号溝 完掘



1号溝 断面



1号土坑 完掘



1号土坑 断面



2号土坑 完掘



2号土坑 断面



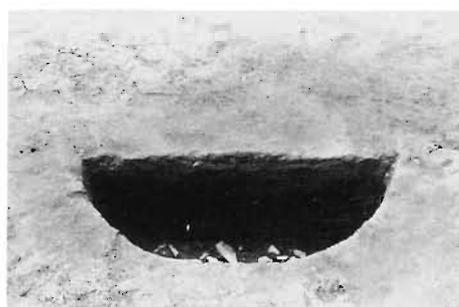
3号土坑 完掘



3号土坑 断面



4号土坑 完掘



4号土坑 断面

写真図版13 1～4号土坑



近世1号土坑 完掘



近世1号土坑 断面



近世1号土坑 桶柁検出状況



近世1号土坑 遺物出土状況



近世2号土坑 完掘



近世2号土坑 断面



近世2号土坑 遺物出土状況



近世2号土坑 遺物出土状況

写真図版14 近世1・2号土坑



近世1号水路 完掘



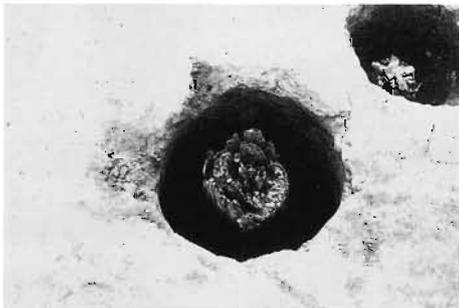
近世1号水路 断面



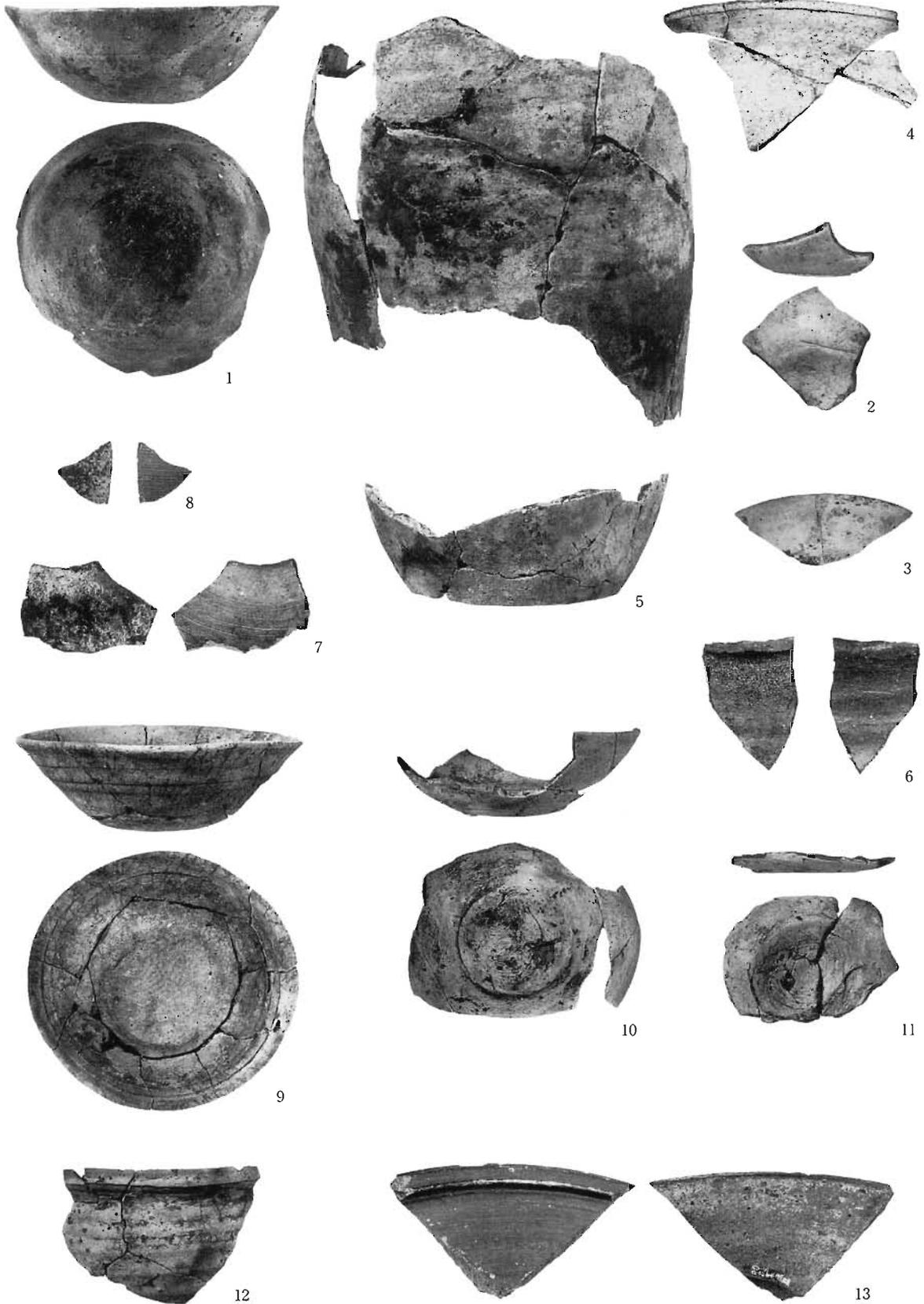
近世1号水路 樋検出状況



近世2号水路 樋検出状況

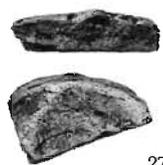
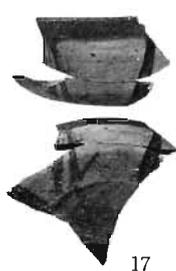


P55 柱材検出状況



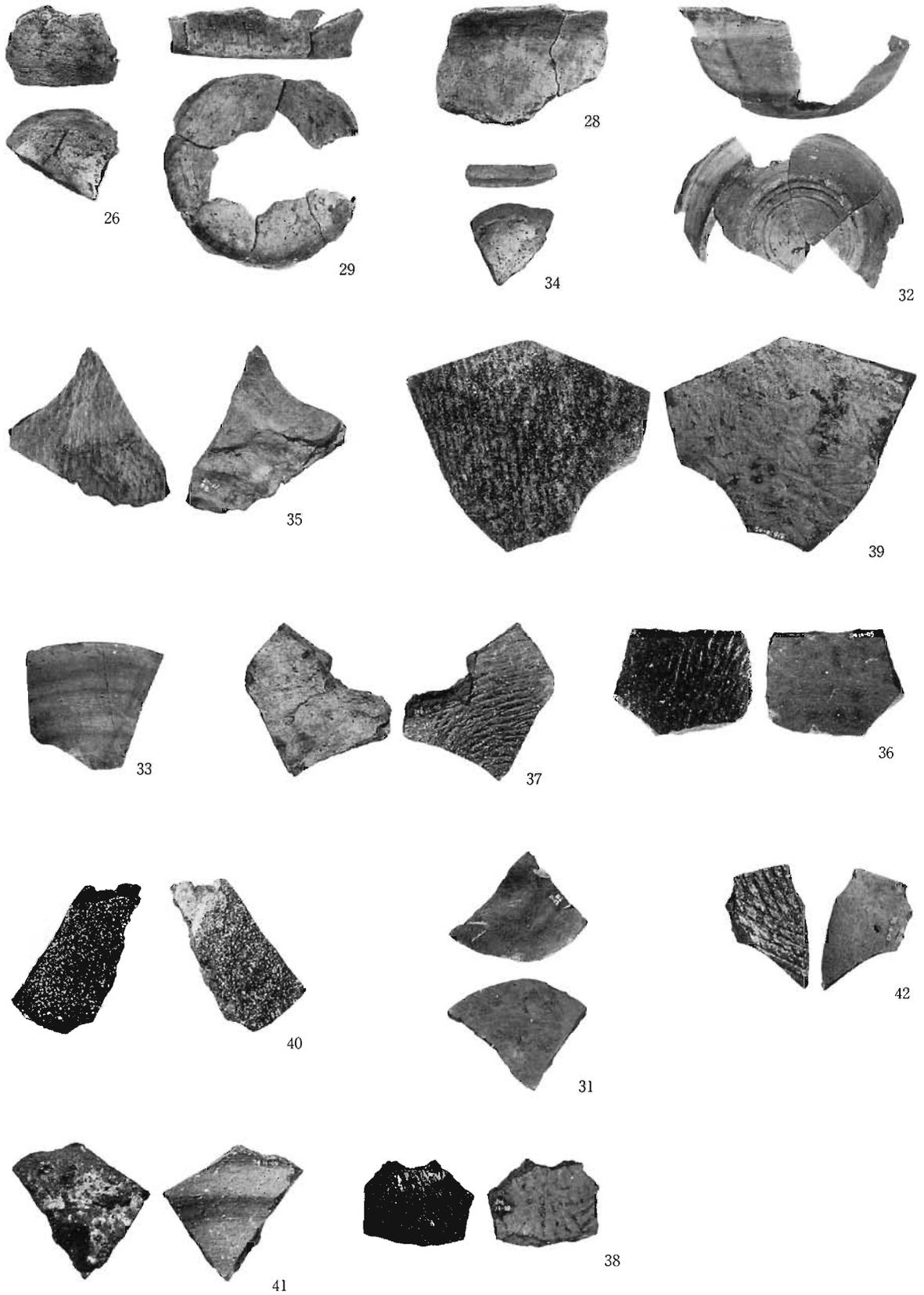
写真図版16 出土遺物(1)

S=1/3



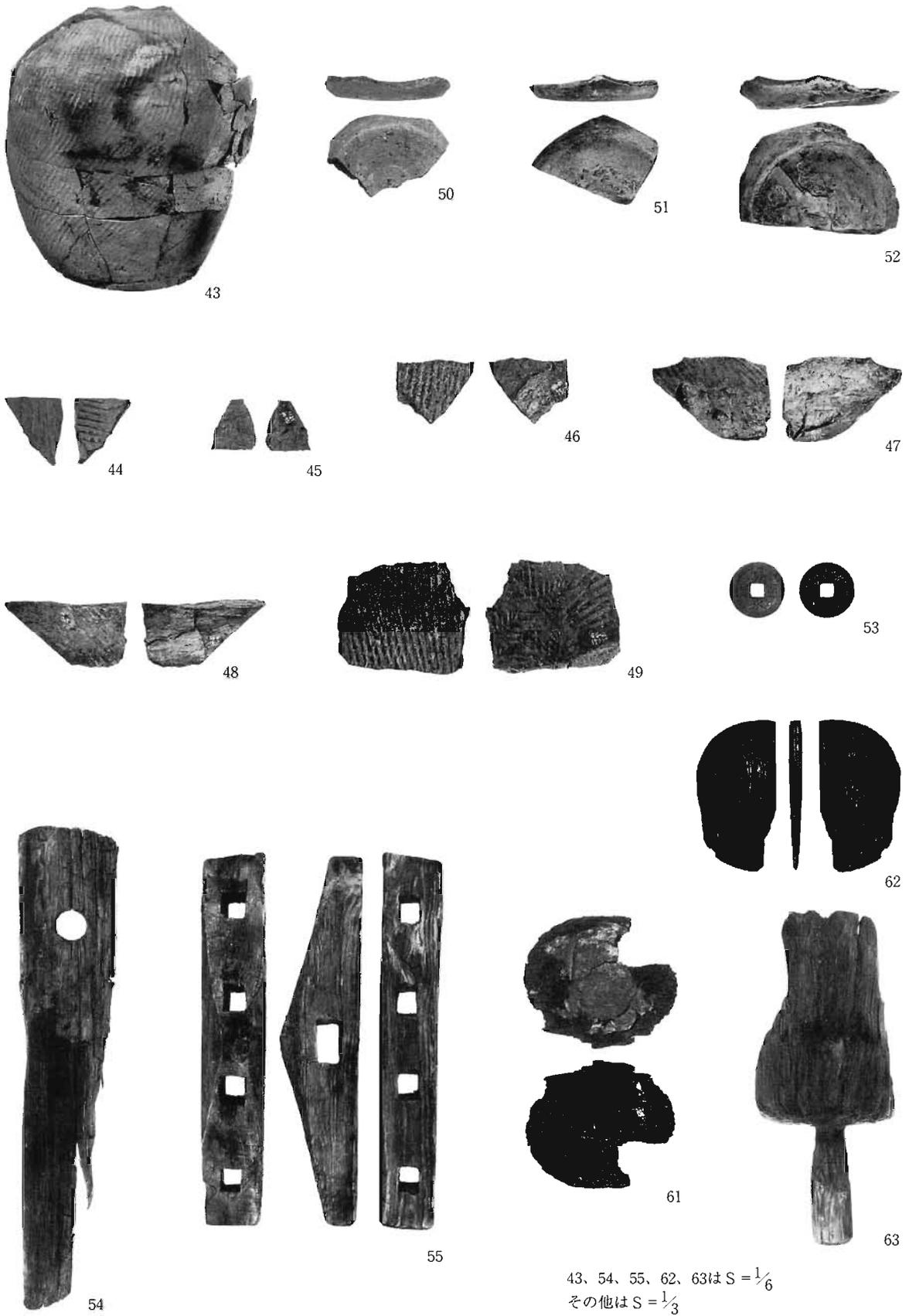
写真図版17 出土遺物(2)

S = $\frac{1}{3}$

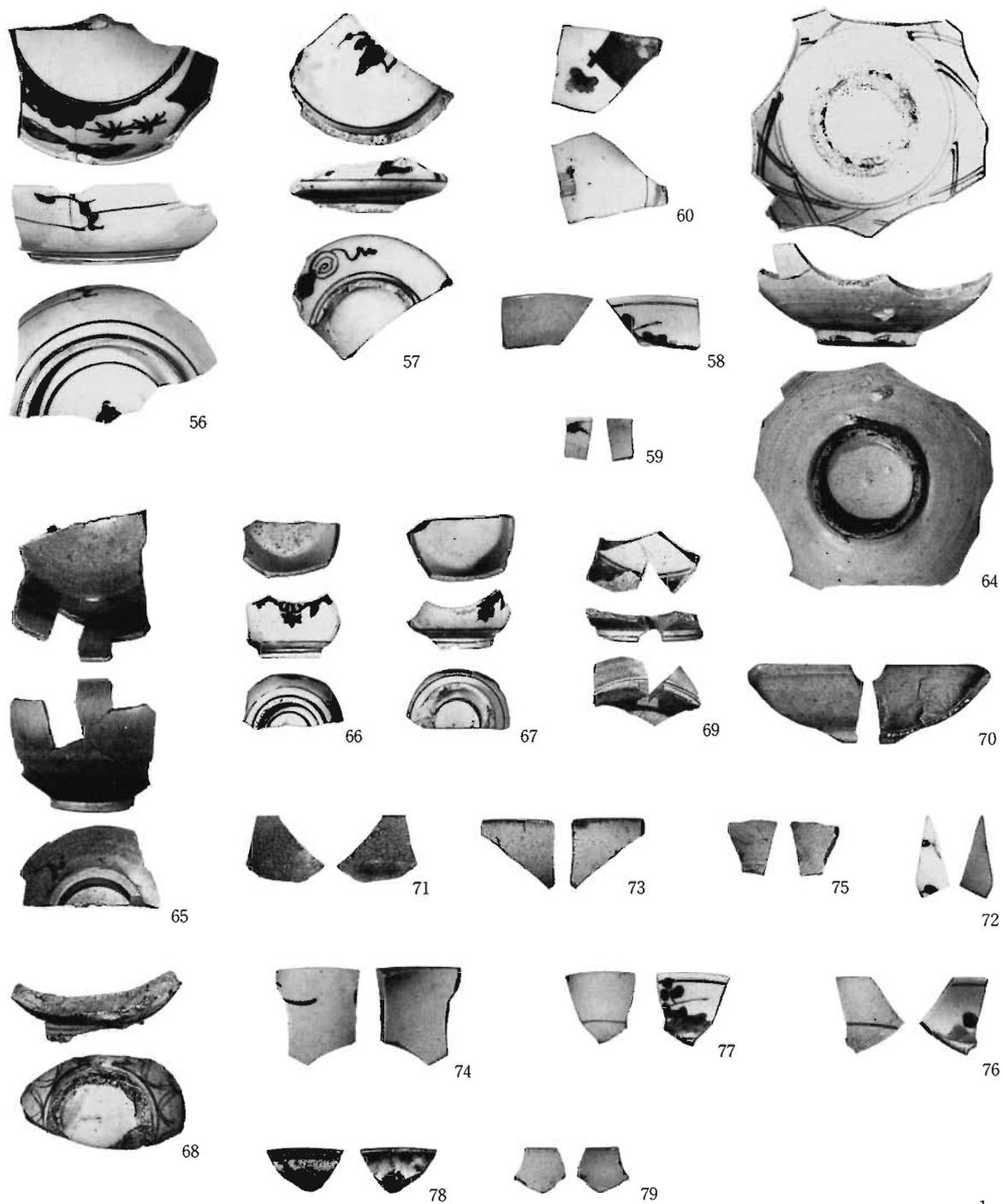


写真図版18 出土遺物(3)

S=1/3



写真図版19 出土遺物(4)



S = 1/3

写真图版20 出土遺物(5)

報 告 書 抄 録

ふりがな	しまおかにいせきはくつちょうさほうこくしょ							
書名	島岡Ⅱ遺跡発掘調査報告書							
副書名	担い手育成基盤整備事業八幡東部地区関連発掘調査							
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第407集							
編著者名	村木 敬							
編集機関	財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11-185 TEL019-638-9001							
発行年月日	西暦2003年1月31日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "		m ²	
しまおかにいせき 島岡Ⅱ遺跡	いわてけんひえぬさくぐん 岩手県稗貫郡 いしどりやちようほちまん 石鳥谷町八幡 第22地割140 ばんち 番地ほか		LE23- 2343	39° 27' 47"	141° 08' 59"	2000.4.10 ～ 6.18	2,800m ²	ほ場整備 八幡東部地区 に伴う緊急発 掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
島岡Ⅱ遺跡	集落跡	平安時代		住居跡7棟・水路 1条・溝1条 土坑4基		土師器・須恵器		
		近世		掘立柱建物跡4棟 ・水路2条・土坑 2基・柱穴58基		近世陶磁器・木製 品		
		時期不明		土坑6基・柱穴25 基				

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第407集

島岡Ⅱ遺跡発掘調査報告書

担い手育成基盤整備事業八幡東部地区関連発掘調査

印刷 平成15年 1月31日

発行 平成15年 1月31日

発行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 盛岡市下飯岡11地割185

TEL (019) 638-9001

FAX (019) 638-8563

印刷 (有)ジロー印刷企画

〒020-0066 盛岡市上田二丁目17番4号

TEL (019) 651-6644

FAX (019) 652-2610

